八九十度に高めて居る。蠶種は浴種後八日目頃には午前四時から、九時迄の早朝にかけて蟻蠶が發生し、之を蠶仔（ツァムチャイ）と呼んで居る。其掃立法は桑葉を煙絲（刻み煙草）のやうに細剉して紙面に撒布したる後、鷺毛若くは手を以て輕く掃下ろして、之を蠶籠に移して居る。初日の掃立は全卵數の五割乃至八割位が普通で、殘餘は翌日に掃立てるが、大抵一二割の不發生卵のあることは前述の通りである。

飼育の狀態に就ては二眠までの稚蠶期に於ては支那の他省と同樣面識ない人間（生面人）には參觀を禁ずる習慣があるが、先づ給桑回數（喂幾口）桑は大體毎三時間として一日に七八回に亙り、雨天濕潤の際は之よりも二三回を減じて居る。初眠は之を蛾眠と稱へ、その以後は漸次剉桑を粗大にし、大眠（四眠）からは全葉を給し、第五作からのものは全芽である。蠶兒は直徑尺大の蠶籠に約三千頭を容れた甚しい密飼である。之が爲めに桑葉は蠶兒に踏み躙られて之を浪費する傾がある。加へて桑葉は豫め風雨の際に備ふる爲に一時に多量に摘採したり、或は桑値段の安い時は買溜めを爲し而かも貯桑は土間に三四尺位の厚さに積み重ねて置き、新鮮な桑葉を與へることが稀な爲に病蠶を併發せしめる憾がある。除沙は大抵乾燥せる日は一日一回とし、濕潤な時には一日に二回若くは二日に三回として比較的之に努めるが、除沙の方法は汰尿と言つて、箸又は手を用ひて表層の桑葉諸共蠶兒を剝ぎ取つて、之を新な蠶籠に移轉し、網の使用は殆ど行はれて居ない、更に壯蠶期に至り蠶兒を一々手に拾ひ取つて移すことは、江蘇省無錫地方の飼育法と酷似し其の取扱も亦亂暴である。斯くして上簇までの日數は季節により固より長短はあるが、今から約二十年前は冬季の桑花造と雖も炭火を用ひず天然育により之を冷蟄と言つて、其飼育日數は四十餘日を要し、第一作及第七作に於ても養蠶家は數日間の給桑を節約すべく、補溫育を見るやうになつてから、第一作及第七作に於ても養蠶家は數日間の給桑を節約すべく、補溫育が普及するに至つた。從て各作を通じたる飼育日數も十六乃至十八日にて足りて居る。

	食桑期	營繭より發蛾迄
桑花造	二二——二五日	二一——二二日
頭要	一七——一八	一七——一八
二造	一七——一八	一六——一七
三造	一六——一七	一五——一六
四造	一六——一五	一五——一六
五造	一六——一七	一六——一七
六造	一六——一七	一七——一八
七造	一七——一八	二一——二二

更に各齡期の發育狀態竝に給桑量に關し省立農林試驗場の調査を見ると左の如し。

	食桑期	眠期	蠶兒の體重（ミリグラム）	給桑量
第一齡	二・五—三日	一・六—一・七	〇・二二	七—八斤
第二齡	一・五	一・七—一・八	一二・〇〇	一八—二〇
第三齡	二・〇	二・〇	五二・〇〇	六〇—七〇

第四齡	二・五	一	二一八・〇〇
第五齡	四―五	―	一、八一二・〇〇

二〇〇
二、〇〇〇

續て上簇期約一日、蛹期十日を示し、八兩蠶種一枚に對する桑量は約二千三百斤となる。而して第五作以後の新梢を摘桑する期には約二千五百斤を算すると言ふ。

三　上簇と殺蛹

上簇と殺蛹法に就ては他地方に見られない獨特な方法が行はれて居る。之には先づ簇として用ひられるものを蠶箔と言つて長さ四尺、幅二尺二寸大、本邦の蠶籠と同樣な形狀である。然しこれは縱に七本の竹棒を骨組とし、その上下兩邊が編まれてあり、それからこの各竹を經として之には幅三四分、厚味六厘位に篠竹を裂いたものを竹軸に扛げては捲付けて多數の耳形を作つたものである。耳形の大さは長さ一寸位である。從て此一本を一串といふが詰り八串を竝べたもので、此の耳形の間に繭を巣ふ譯で、簇として長年の使用に堪へて居る。

そこで大眠を起きた蠶は四五日目に至つて成熟するが、其期は午前二三時頃から同八九時に至る間で、蠶體は黃蠟色を呈して居るから、判然識別され、之を拾ふには容易である。そしてこの多忙期には臨時傭を入れて熟蠶を拾はしめ、熟蠶は直に之を蠶箔一枚に對し約千五百頭を標準に放ち、上簇のことを簿又は上箔といふが、其方法は七八枚の蠶箔を重ね置いて、熟蠶を逐次一枚宛疎密のないやう全面に撒布すれば、蠶兒は多數の竹片に止まり、之より落ちたものは下積の蠶箔に止まるのである。斯くて晴天の時には之を屋外に搬出して樹蔭の下或は單に庭前に於て二枚宛人形に立て竝べ、光線の强い露天の下に營繭せしめることは、その飼育室の暗黑なるに對比して、奇異の感はあるが、これには結繭を早めることゝ、一つには廣東蠶は上簇の際放尿すると甚しく簇を汚すから之を早く乾燥せしめて汚繭を避ける理由からでもある。それから雨天には室內に於て上記の如く竝列して炭火補溫を施して居る。續て一二時間經つと、蠶箔を上下に差換へ蠶兒の地位を箔面に均一ならしめる、斯くて熟蠶は午後四五時頃には繭の外廓を作り、吐絲も二三割には達するのである。此期に至つて大抵蠶箔を屋內に搬入し、箔を四枚重ねに四面に立て竝べて角燈籠の樣な形狀となし、更に上部にも蠶箔三四枚を覆ひ、其中央に大い火鉢一箇を置いて營繭を促進せしめる。此方法を名けて埋沙燈若くは過小火と呼んで居る。所謂燈中の火鉢一箇に付き木炭一斤半乃至二斤を用ひ、上部には藁灰を覆せて午後十時頃に至り、之を撤去する。

次に營繭を終ると二三日經つて庭前に蠶箔を數枚重ねにして、前者と同樣に人形に立て竝べて、長くトンネル式に排列し、地上兩邊の距離は凡そ三尺を隔て、その全部に筵、布團又は毛布を覆ひ、內部には蠶箔約八枚に付き一箇位の割合に火鉢を置いて、每個木炭約二斤を用ひ、殺乾するのが焙繭（ベイカム）法である。そして此兩端上部に小孔を設けて排氣を計り、約三時間の後箔を上下に顚倒して再び炭火を加へて、更に五六時間乾燥するのである。內部の溫度は排氣孔邊に於て華氏百數度、中央部に於て凡そ百二十度を示し繭の乾燥步合は六七分乾見當であるが、一般に之を乾繭

と言ふて居る。斯様に奇拔なる上簇、殺蛹法も多年の經驗から來たもので、其方法の適否も普通育蠶法の理屈からでは遽に論斷は出來ないであらうが、廣東繭のやうに緊縮のない、柔軟な繭を作る種類には簇に藁や樹枝を用ふるよりも、竹片で多數耳形を附けた簇籠の方が不整形繭や玉繭を生ずることの尠いことは事實である。然し蠶兒の營繭中に之を亂暴に移動したり或はまた籠に付いた儘の繭を殺蛹する方法も原始的で、殺乾が齊一に行はれず、炭火に最も接近する部分は過熱の爲め暫繭質を損傷し、且又經濟的に見ても其法を得たものではない。最後に殺蛹繭を簇から搔くには、長さ五寸位の鐵箸に先端を鍵形に拄げたものを以て繭を摘出し、爛繭汚繭は之を別の籠に盛り、斯くて育蠶は千秋樂を告げて居る。

四　養蠶經濟

飼育日數十六七日間に要する桑葉量と、之より得べき收繭量に就いては之を當業者に聞くも農林試驗場や嶺南大學の調査報告を見ても、甚だ明確を缺いて居るが、大體を綜合するに、八兩蠶種一枚(約母蛾五百蛾)を掃立てるに二割前後の不發生卵があるから、蟻量は十六七匁なるものゝ如く、之に對し桑葉要量は葉桑二千三百斤乃至二千五百斤と見て大差あるまい。そして此掃立量から平作に於ては、壯齡期蠶籠三十枚前後を算し、一枚に約三千頭を容れる割合である。續て上簇は簇籠一枚に千五百頭の標準として簇籠約六十枚となり、一枚の收繭は殺乾繭(六七分乾)の割合で、卽ち收繭量は四十五斤乃至五十斤を示し、その頭數は大約十萬粒といふが一般の見當である。更に材を他方面に採るに、蟻量一匁からの收繭顆數は約六千粒を示し、之を四兩辨(四十匁)の本乾繭五百五十粒から割出すと、蟻量一匁からの收繭量は乾繭二・七三斤、卽ち生繭凡そ八斤となり、大體前記の標準に一致するを見る。且又蟻量一匁に對する桑葉量は百二十斤乃至百五十斤の割合を示して居る。

故に之を日本流に言へば、蟻量一匁に對する葉桑は二十二三貫を要し、收繭量は生匁一貫二三百匁と見て大した間違はなかるべく、その效程に於て本邦に比し半にも滿たないことはその飼育法より見て想察するに難くない。

而して養蠶家一戸の飼育量は每作八兩蠶種二三枚を普通とし、一家を擧げて飼育に當つて居るから、大養蠶家を除いては大抵自家の勞力で間に合つて居る。養蠶人夫賃は支那でも賃銀の最も高い地方であるから、育蠶の術に長けたものは常傭で、主人食事持月給十八元から三十元に達し、臨時傭でも日給男七十仙、女五十仙及子供二十仙の割合を示して居る。そして壯蠶期一人で蠶籠四十枚を受持ち得る割合であるといふ。仍て繭の生產費に就いて概略ながら飼育量蠶種二枚に對する概算を試みると次のやうである。

元仙	蠶種二枚、三元五十仙替	
七・〇〇	桑代、四十八擔分三元五十仙替	
一六八・〇〇	延人員、男二十人日給七十仙、女十五人、日給五十仙	
二一・五〇		

一〇・〇〇　木炭其他雜費

合計二百六元五十仙を示し、其收繭量を生繭二百四十斤と見て、百斤當り生産費は凡八十六元に當る。但しこれは勞力及桑葉の全部を他に仰げるものとしての計算であり、若し桑樹を自ら栽培するものとせば、桑の生産費は一擔當り二元二十五仙であるから、桑代に於て六十元を省約し得べく、時に副收入としては蠶糞十二擔半、每擔四十仙に賣却して五元の收入がある。仍て桑を自給する場合一四六元に對し生繭百斤の生産原價は六十元八十仙を示し、一貫匁當り凡そ三元八十仙と知らる。

從て年間の蠶作を七回と見て每作平均蠶種二枚宛を掃立てゝ飼育が順調に行つたとしたならば、養蠶家一戸の通年收繭量は二百五六十貫に達し養蠶業の專業たる所以も亦此點にある。しかも繭相場を假りに一貫匁五元とすれば千二百五十元の收入となり、純益八三五元六〇仙を擧げ得る譯で繭價の高低が三角州に於ける農家の經濟を構成するに如何に重大なるかを察するに足る。

五　蠶病害と氣象狀態

然しながら養蠶家が各作を通じて滿足なる成績を擧げることは到底不可能であり、年間の收繭量も前項の割合に達することなく、延いて其純益も減じて來る。それは多化性蠶の體質强健なるは特徴であるにしても、廣東地方に於ける高溫多濕なる氣象と粗略なる飼育法を以てしては、その蠶作が頗る不確定である。卽ち第一及二作は低溫期補溫育によると雖も蠶室の不完全なる爲めに兎角失敗に陷り易く、更に第三及四作に至つては雨季に入ると共に炎熱を加へて蒸熱に達蠶を招くことは殆ど例年のことである。斯くてこの不作期を過ぎ第五作に入りて、蠶作は漸く確實に近くその最も成績を得て繭質良好なるは第六作とし、第七作も之に次いで居る。加へて此間洪水、桑害に見舞はるゝと共に蠶病も亦その慘害を逞うして居る、蠶病に就ては先づ微粒子病は他省と同樣に蠶種の五割から甚しきはその全部がこの病毒に犯されて居るが、更に其他の蠶病に就ては樣々な俗名はあるが、其中主なる蠶病としては次の三種である。

（軟化病）　黑蠶　黑頭
（膿病）　白蠶　白頭
（硬化病）　紅蠶　硬蠶

先づ軟化病に就てその慘害は廣東地方では殆ど微粒子病に讓らない有樣で、中には軟化病の爲めに、中途蠶兒を廢棄せねばならぬことは尠くない、しかも本病は第一作から四作頃までに最も發病の甚しきを見るのは養蠶地一帶が低い濕地であり、加へて霖雨連日に亙る雨季や換氣不良なる蠶室等に歸因することは蠶體の衞生から見て當然と言ふべきであらう。次に膿病も軟化病と同樣に澤山見受ける蠶病である。俗に之を白頭と言つて大眠後蠶體は白色を呈して腫脹し、たとへ上簇しても薄皮繭を結ぶに過ぎない。これも亦蠶室の過濕及換氣の不良から發生する。硬化病に至つては之を疆病と稱し、溫濕の時季に屢々罹り易い病氣であるが、乾燥季に入

つては稀で、之を前二者に較ぶれば其の病害も甚しくはない。其他蛆害は江浙地方に見る多化性蠶蛆で、蠶室に侵入して直接蠶體に產卵し、之が豫防としては窓張を用ひて居るが、その被害は成繭の百分の一乃至二を占めてゐる。

斯樣に各種の蠶病は尠からず蠶作に影響して居るが、一般農民の蠶病に對する注意は頗る鈍感で、其の豫防法としては例へば醋若くは雙蒸酒一斤に黑砂糖半斤を混合したものを桑葉に撒布すれば、其味はバナナに似て、膿病其他を防ぐに宜しといつた樣に漢法醫式の療法を間々試みるに過ぎない。要するに養蠶家は蠶作に關しては其の豐凶は之を天と風によるものとして、之に天運に委ねて居ることは他省と變りはない。而して育蠶に重要な關係を持つ天候に就いて亞熱帶圈廣東の氣象は左表のやうである。

廣東地方の氣象

(一) 氣溫濕度及雨量（嶺南大學觀測表に據る。雨量は糎、氣溫は午前八時及濕度は百分率）

	1920年 雨量	1920年 氣溫	1920年 濕度	1921年 雨量	1921年 氣溫	1921年 濕度	1922年 雨量	1922年 氣溫	1922年 濕度	1923年 雨量	1923年 氣溫	1923年 濕度	1924年 雨量	1924年 氣溫	1924年 濕度	1925年 雨量	1925年 氣溫	1925年 濕度
一月	一・四六	一〇・三	七六	〇・〇〇	九・八	八九	一・三三	一〇・〇	七九	一六・〇九	一一・九	九一	一・七一	一一・四	七四	六・六四	一二・六	八七
二月	五・三三	一〇・九	九一	二六・五四	一〇・九	九一	四一・八	二二・一	八九	一〇・六六	一四・九	九一	一・八一	一一・三	八〇	一三・七一	一三・五	八五
三月	三・一六	一八・二	九四	一〇・一八	一五・六	一九・九	六・一二	一五・一	八七	一三・六八	一六・三	九〇	六・四四	一六・六	八九	〇・三四	一五・一	八五
四月	一〇・八	二〇・八	八六	三四・九六	一九・六	九一	三・五九	一九・二	九一	七一・九〇	一九・九	九二	二五・二三	二〇・三	八八	一一・八一	一九・七	九〇
五月	一〇・五八	二三・二	九一	三七・七六	二三・九	九五	四一・〇四	二三・八	九五	三三・七三	二六・二	九五	一三・六五	二五・七	二六・四	二六・七九	二四・二	九四
六月	二一・〇一	二六・四	九四	二四・〇八	二六・七	九二	二三・五六	二五・九	九三	二四・三三	二六・八	九二	三四・四〇	二六・四	八八	二七・一〇	二六・八	九四
七月	二三・二〇	二七・一	八九	五〇・三三	二六・〇	八九	二三・一一	二六・六	九一	二六・九〇	二六・六	九〇	五三・八八	二六・二	九一	二七・七九	二四・二	八九
八月	三・八四	二三・九	八一	五四・六五	二五・七	八一	二七・一〇	二六・八	九四	二七・七九	二六・八	八九	五三・二二	二五・三	八八	〇・八四	一四・〇	八六
九月	七・五四	二〇・二	八二	一二・六六	三・四八	七五	〇・〇一	一四・〇	八六	三三・五四	二四・九	八八	七・六一	二五・二	九〇	一・〇四	二〇・九	七四
十月	七・三	一五・七	七五	五・八三	一三・八	八三	〇・八六	一七・三	八一	三・六九	二一・二	七三	四・九五	二一・五	八〇	〇・〇〇	八二	八一
十一月	四・二	一一・二	七五	一三・八	八三	八一	二・一八	一三・三	七八	〇・〇五	一五・五	七八	一・〇四	一八・一	八八	一・三四	一五・六	七八
十二月	一・一	一〇・一	八一	一・八六	一〇・一	八一	〇・八六	一〇・一	七四	三・五九	一一・七	七八	二・一八	一三・三	八一	一・三四	一二・九	七八

(二) 各月晴雨及曇日數（省立農林試驗場氣象觀測表に據る）

	一九二四年 晴天	一九二四年 雨天	一九二四年 曇天	一九二三年 晴天	一九二三年 雨天	一九二三年 曇天	一九二二年 晴天	一九二二年 雨天	一九二二年 曇天	一九二一年 晴天	一九二一年 雨天	一九二一年 曇天
一月	一三	一六	二	二六	四	一	一九	五	二四	—	七	
二月	五	一五	九	一〇	一五	三	五	一二	一一	二	五	
三月	一一	一〇	一〇	一九	一〇	二	六	一九	六	四	一三	

四月	七	二〇	三	一二	一六	二	一三	一四	三	一〇	三	一七
五月	一二	一七	二	一九	一一	一	七	二四	一	四	一	二七
六月	八	二一	一	八	二一	一	七	一二	一	八	一	二一
七月	一三	一八	—	九	二二	—	—	—	—	一八	—	一三
八月	七	二四	—	八	二二	一	二一	一九	—	一九	二	一二
九月	一七	一二	一	一九	一一	—	一五	一五	—	二〇	一	九
十月	一九	一一	一	二〇	九	二	二二	七	二	二九	—	二
十一月	二八	—	二	二三	四	三	二三	六	一	二三	四	三
十二月	二六	五	—	一八	一一	二	二〇	九	二	一九	六	六
全年	一二六	一六九	三一	一九一	一五六	一八	一三七	一五六	三	二〇九	二一	一三五

第五章　製　絲　業

一　器械製絲業の沿革

廣東地方に器械製絲業の起つたのは略本邦と同じく、今から六十年前のことで、現に銀行家として有名な陳籬伯氏の祖父に當る陳啓元氏が當時シヤムで商賣をやつて居つた。其時シヤムで佛國式の製絲工場に器械的な製絲法と精良な生絲を實見するに及んで、廣東蠶業の本場に生れた同氏は深く之に感動されたのであつた。そこで前清同治五年(一八六六年)鄉里たる南海縣下西樵地方の簡村に汽罐を据へた繼昌隆絲廠を設けたのが、抑々廣東器械製絲業の濫觴であると言はれて居る。然し此工場は土地在來の製絲業者や機業家の爲めに異端視されて此間葛糾を釀し爲めに光緒七年工場の閉塞を命ぜられ、已むなく澳門(マカオ)に移轉し復和隆絲廠と改稱して經營した。續いて三年の後政府の許可を得て再び簡村に戻つて事業を繼續するに至つた。之に倣つて鷺州に工場の設立を見たのを始めとして漸次順德、南海兩縣下の町村落に亙つて其數を增し、遂に斯業は此地方に密集的な發達を遂げたのである。而して一八八〇年支那稅關のシルクなる報告に據れば當時廣東地方の器械製絲工場數は十工場、二千四百釜とあるが、最近斯業の經過を見ると次のやうである。

	工場數	釜數
大正元年	一〇九	四二、一〇〇
同　七年	一四七	七二、二〇〇
同　十一年	一八〇	九〇、〇六四
同　十五年	二〇二	九五、二一五

即ち工場數は最近十五年間に殆ど倍加し、之を他地方に較べて相當顯著な發達を遂げたものと見られる。そして其原因としては歐洲戰爭勃發以來米國市場の空前な活況によると共に、廣東絲が米國機業家の希望に迎合して再繰式に改めたことが、尠からず米國向需要を喚起したことを看逎すことが出來ない。同時に將來の發展如何も亦斯業改良の第二階梯として更に製絲經營若くは絲質の上に改善が加へらるゝかどうかによつて、發達の速否が決定さるゝであらう。而して其沿革に就て特に言ふべきは、斯業が所謂田園工業として廣東の田舍に發達したことゝそれから外人の直接的關係乃至指導援助なくして兎も角今日の盛況を見たことは業態の上に諸種の特色を見せて居る。之に就て先づ現在製絲工場の分布を見るに、總釜數の七割五分は順德縣で占め、之に次いで南海縣二割四分强と、その九分九厘までは左迄廣くない兩縣下に集中して居る。就中製絲業の中心地たる容奇（ヨンキー）と桂洲（クワイチヤオ）とは接續町村を爲し、亦大良（ターリヤン）は前者と河一つ距てた程遠からぬ地にある、今之に就いて三角州內主要製絲業地を示すと左記の如し。

製絲業地	工場數	釜數
順德縣容奇	九	四、九〇〇
同　桂州	九	四、一四〇
同　大良	二二	一〇、〇二〇
同　水藤	一一	五、二八〇
同　勒流	五	二、四〇〇
同　大羅村	六	二、八二〇
同　鷺州	七	三、二八〇
其他四四個所	八五	三八、三九五
（計）	（一五四）	（七一、二三五）
南海縣官山	一〇	四、五三〇
同　石灣	六	三、三六〇
同　吉利	四	一、九二〇
其他二〇個所	二五	一二、五二〇
（計）	（四五）	（二二、三三〇）
三水縣西南	二	一、〇〇〇
番禺縣	一	六五〇
總計	二〇二	九五、二一五

斯樣に工場は田舍に散在し、而かも其經營法は佛國式繰絲法に倣ふて、之に支那人の創意を加

へたものであるから工場管理や繰絲法を見る時は全く支那式の經營で、宛然明治三十年前後の本邦製絲業を想起せしめるやうな感がある。然し乍ら之を上海地方に於て所謂上海式製絲經營法が歐人の手から共儘支那人に移つたもので、何となく支那人經營には不釣合の感があるも、廣東地方の製絲業に至つては工場の業態が支那人にシツクリ合つて居るやうに思はれるのである。

二　工場の設備一式

廣東では製絲工場を俗に絲偈（スウカイ）と呼んで居るが、これは我が信州地方で言ふ「きかい」とか、上海邊で湖絲棧（ウースイ）と言ふ方が一般に通りが良いと同樣で、偈とは洋式の器械とも言ふべき意味である。此の絲偈は大抵四五百釜を備へて居るが、四五百釜の工場と言つても、本邦で考へられるやうな大規模なものでなく、一日の生産量を百斤前後に目標を置いて設立されて居る。

工場の構造は先づ土匪の襲來を防ぐ爲めに板塀又は煉瓦で高い圍墻を繞らし、之を共儘壁として場內の處々に煉瓦の方桂を高く立てゝ家根を張つた粗末な煉瓦造平屋建である。この天井の高い、そして一つ家根の下に繰絲場もあれば機關室、原繭室其他が簡單に配置されて居る。そこで工場に行くと何處も大同小異ではあるが、先づ事務所は體裁を重ずる支那人として、孰れも比較的立派な煉瓦建とするも、之に連る現業場一體には床に赤煉瓦を舗いてある。それから繰絲場入口前の廣場には汽鑵が据へられ、また入口近くに大車輪を持つたエンヂン（大偈（タイカイ）といふ）が廻つて居つて火夫、器械係等が作業をして居る。この廣場から繰絲場に入ると眞直に通路があつて、之を絲巷と言ふが、絲巷の兩側には幾つもの膳臺が並行に排列されて居る。膳臺には一臺五六十釜を竝べ二臺宛向合せになつて居るが、此通路は甚だ狹く、僅に三尺乃至四尺の距離を保つに過ぎない。

それに膳臺に配せられた釜は唯繰絲釜一つに過ぎないから、釜と釜との中心距離も僅に一尺九寸といふ狹さである。繰絲釜は赤い圓形の素燒で、徑一尺二寸深さ四寸位の大さで釜底には排水孔さへもなく、繰湯の清澄を期するには、工女の直ぐ手前に水道管があつて、この龍頭から絶えず水を滴らしめ、之によつて繰湯は盆面に溢れて新陳代謝が行はれて居るのである。盆上には水道管と對照の地位にY形の集緒器があつて、その兩端に付けられる集緒孔は瑪瑙製とシヤレて居るが、其の孔は小類など通り拔けて終ふ太さで、廣東絲が類節の多い一因を爲して居る。次いで一對の絲縷はこの集緒孔を通り、共に撚れて上方二個の瑪瑙製絲鈎によつて分たれ、傍に金屬製ベルの付いた懸撚計數器（絲鐘といふ）が据へられて異彩を放つて居るが、粗末な繰絲器械には聊か不釣合の感を起さしめる。次に枠臺に至つて梯子を横へた形の極く簡單な絡交器があつて、絲は平綾を爲して捲取られて居る。枠は柏材で作つた頑丈な骨組で、佛國向六角枠は周圍七尺六寸、重量は少くとも三四貫匁はあるだらう。米國向再繰小枠は周圍一尺五寸、略ぼ本邦物と同樣である。

要するに繰絲場の光景はダダツ廣い家根の下に四五百釜の繰絲器械がズラリと一場に竝べ

られ、採光、排氣には殆ど意を拂つて居ないし、建物と言ひ、木製の器械と言ひ、先づ信州式と言はるゝものより遙に粗末な工場である。尤も工場は地方により例へば水藤地方の如く近時の新設に係るものは繰絲場を各棟に分つた近代式工場であり、之に反して官山地方に於ける工場は洪水を防ぐ爲めに地上六尺ぐらいの高さに床を張り、その上に繰絲器械を据へて採光、排氣とも不完全を極めて居るといふ。然らば工場の建築費は大體若干を要するかと言ふに、先づ繰絲器械類は大抵この地方で間に合つて居る。卽ちボイラーは廣東で作られ、エンヂンは順德縣樂從で製造し、繰絲釜は南海縣石灣產を用ひて居る。依つて今四百釜に對する繰絲器械類の設備費を見るに、大體左記の如くである。

七、〇〇〇元	ボイラー一基
一、八〇〇	エンヂン二臺、繰絲場用六馬力半、一、四〇〇元及再繰絲場用二馬力、四〇〇元
八、〇〇〇	繰絲器械四百釜、二〇元替
四、八〇〇	再繰百六十窓、三〇元替
七〇〇	水上ポンプ一七〇元、軍器購入費三〇〇元其他諸式二三〇元

合計二萬二千三百元を要し、之に土地及繰絲場、再繰場、事務所、繭棧等の建物に就いては勿論建物の精否乃至敷地の地價によつて相違はあるが、大體四百釜の建設費一切は六萬乃至十萬元を要すと言はれ、之を從前の建築費三四萬元に比して、最近物價騰貴の爲め其の建設費も倍加するに至つた。

三　燃料と製絲用水

三角洲一帶の河水は西江を始め所謂三江の分派せるもので、水は支那の大河に洩れず、常に黃濁で、濾過清澄をしなくては到底用水には堪えない。故に工場の一隅に貯水池を設けてその周圍には垣を作つて畜類其他汚物の浸入を防いで、曝露沈澱せしめ、池水は有機物の繁生によつて青綠を呈する位が用水に良いと言はれて居る。この池の中央に方形若くは長方形の二重壁を作り、各壁間約一尺五寸の空隙に細土を塡め、斯樣な壁を二重若くは三重に廻らして濾過を計つて居る。之を上海地方の濾過裝置に較べて簡單であるのは、工場が田舍に在つて地面に貯水池を設ける餘裕があるからであらう。試に水質に就て廣東市水道局に於て分析したる結果を擧げると、

色	微濁	硫酸	〇、〇〇五七
硫化水素	無	硅酸	〇、〇〇六〇
硝酸	無	亞硝酸	無
格魯兒	〇、〇六二三	鐵	痕跡

燃料に就ては曾て薪と石炭とが用ひられ、就中歐洲戰爭當時は輸入炭が運賃、銀塊の暴騰等によつて割高となれる爲めに、燃料の八割は薪を用ゆる狀況であつた。この薪は山岳地廣西省から西江によつて筏を流し、三水縣下の西南石灣（ナイナンセキワン）及石壁地方に揚げられて各製絲場に供給せられ

た。然るに近時薪の値段は漸騰し、數年前百斤七十仙見當にあつたものが、最近は一元四五十仙を唱へ、生絲百斤に對する消費量約六十擔と見て、此燃料代は約九十元を要する。反之最近炭價は上物二十七八元から普通物は二十四五元の相場にあつて、生絲百斤當り二噸半を要するものとして、其の代價は六十餘元で足りるから、最近工場の大部分は石炭を用ひて居る。而して石炭は富源の多い兩廣地方に於て之か開發を計つたならば幾らも產出を見るであらうが、交通不便な現狀に於て現時採掘して居るものは概ね無煙炭であつて一般工場の使用に適せず、之が大部分を臺灣塊炭及撫順炭等に仰ぐ狀況で、廣東の炭界は殆ど邦商の獨占市場である。

四　繰絲作業の全班

既に工場の體裁が全く支那式であるから、其作業振も至極簡單であるのは面白く見られる。先づ工場の管理に於て司理を稱する支配人があつて工場及繭棧(繭買入所)の全般を統べ、管事といふが副支配人格で、以下職員及男工數を擧げれば次のやうである。(四百釜工場)

職員	人數	俸給	
司數	一	三〇元	會計帳簿
管工	六	一五—三〇	現業、檢番
扭絲	七	一〇—一五	結束
司機	二	二〇—二五	エンヂン及器具修理
燒火	一	二〇	火夫
司厨	二	一五	コック
雜務守更	九	一〇—一五	雜務、夜警
計	二八		

之を職制に就て上海地方製絲工場に見るやうな整然たる分業制度によつて居ないから、主なる作業は大抵皆管工と扭絲の兩者の手に行はれ、割合に冗員を見ることがない。そこで次には作業狀況を繭から絲になるまで系統的に述べて見よう。

(イ)繰繭の處理(潮繭)　先づ第一に繭に就ては、選繭女工二三人を置いて、汚繭爛繭等をザツト選出したる後、繭に濕氣を給して、之を浸潤ならしめることは、廣東製絲工場でなくては見られない點で、この工程を經た繭を潮繭と言はれて居る。潮繭の方法は場內の一隅に煉瓦を舗いた薄暗い土間に湯を撒布してから、繭を厚さ一尺位に擴げて日に二回位棒を以て攪拌し、其放置期間は固より季節によつて相違がある。例へば第一乃至三作時のやうに南から多濕な季節風がやつて來る時季には約二日間にて足りるが、第四作頃から漸次乾燥期に入るに連れて三四日間を放置して居る。

更に天候の極度に乾燥する場合には別段の方法が講ぜられることもあるといふ。其方法は池の上に水面から二尺位の高さに竹小屋を作り、床には竹を張つて、此の上に繭を置き、池から昇る水蒸氣によつて浸潤を計るのである。繭の浸潤程度は之を手で握るに柔くて幾分溫たか味

を持ち、繭の特臭が多少拔けた程度を適當とし、其の適否は解舒に密接な關係があるものとして此點に技術を持つたものが當つて居る。而して濕氣を吸集せる潮繭の增量に就ては桂州大和生絲廠に於て第五作繭で乾繭百斤に對し潮繭一〇七・二斤の割合を示した。斯くて繭を搔き集めて之を三十五匁宛秤量して幾百とある小笊に入れて繰絲場の配繭に備へる。

(ロ)繰絲場の作業狀況　繰絲場は早朝繰釜に蒸氣を通して、絲巷に配繭笊を積重ねて作業の準備を整へると、女工は定刻(視察當時は午前七時)頃になつて續々やつて來る。工場では七時十五分前に門を開けて、女工を入場せしめ、七時には門を閉めて之に遲れたものは五仙の遲刻罰が課せられる。女工は積重ねた小笊から銘々一つ宛之を持つて席に着き、先づ小笊の全量を一時に煮繭してから、繰絲の作業に移る順序である。作業は七時に始つて午前十時より三十間を休憩時間として此間に女工は食事を濟まし、十時半から午後五時半まで、休憩なく續けて居る。一日の配繭量は例へば逐次三十五匁入小笊五個即ち百七十五匁を標準に配給され、午後三時になると、檢番は各女工に就いて午後五時半までの繰繭量に對する過不足を按配して、殘繭を出さぬやうにして居る。それには檢番が二人掛りで一人は笊のついた秤を持ち、他は白墨とボールドを携へて各醋臺を渡り歩くと、終業時間まで到底配繭を繰終へる見込のない工女は其餘剩見込量若干匁と告げれば、檢番は配繭の中から之を秤量して取戻し、他の檢番が其工女番號と返却繭量をボールドに記入して行くのである。それから終業時間までに配繭の不足を告げるものは殘餘の繰絲時間に應じて次の割合で更に繭を給せられ、之によつて各工女の繰繭は簡單に過不足なく配給されて居る。

午後三時	三〇匁	午後三時四十五分	一五匁
同　三時十五分	二五	同　四時	一〇
同　三時三十分	二〇	同　四時十五分	五

斯くて終業時間の合圖によつて繰車を止めると、工女は生絲の口留、力絲を施し、醋臺から繰絲釜を引出して繰湯を拂ひ、三々五々退場する有樣である。

(ロ)繰絲後の作業　工女の退いたあとの繰絲場には豫め炭火を起して幾つものトタン箱に分ち、之を五釜に付き一個の割合で、繰絲枠臺の下に置き、枠臺の上からは一帶に幕を下ろして生絲の乾燥を計つて居る。次で夕食を濟まして一休みした檢番結束人等は總掛りで繰絲場に至り、枠から綛を外づすものもあれば、或ものは二人掛宛で長さ二間位ある竹棹を持ち、綛を順序を誤らぬやう漸次竹竿に掛けて、之を結束室に搬入して、順次室內の木架に掛けるのである。竿に掛けた生絲は恰度紺屋の物干竿に染絲を掛げたやうな體裁であるが、看貫方は其儘生絲二綛宛(一人分)を秤の鈎に掛けて、その重量を順次聲を上げて拾ひ讀して行くと、當該檢番は之を聞いて工女繰絲成績簿に記入し、同時にまた事務員は之を聞いて算盤をはぢき其日の繰絲量を知るといふ具合に作業は簡にして要を得て居る。秤を終へると生絲は竿の儘室內に設けてある乾燥室に收め、その坑內に炭火を入れて一夜乾燥する。それから檢番は更にその日の配繭量を記入し之より各工女の絲步を算出して記帳、其日の仕事を終へる譯で、斯樣に管工は我が檢番の如く工

女を監督するばかりでなく、工女の成績から賃銀の算定までを管掌し、女工に對する實權を握つて居ることは一特色と見られる。

（八）再繰の作業　前記の作業は歐州向（大絙絲）に就て述べたが、米國向（括絲）になると小枠を用ひて揚返の工程を經て居る。再繰場は場内に一廓を爲し、孰れも最近數年來に添設せられ、之を繰絲場に較れば遙に工場らしく採光も良好である。而かも此再繰法の起源は邦人が親しく和田式を傳授したもので、之に説明を加へるまでもないが、其處理の丁寧なことは寧ろ本邦よりも理想的であり、例へば枠角を潤すに柔軟な毛筆を用ひて絲の毛羽立ちを防ぎ、或は綾振に繰絲用の「フシコキ」を用ひて二本揚りを防止して居る。大枠は四ツ枠揚げとして一人で四五窓を受持ち、一日五六十本を揚返して居る。揚返の途中に於て所謂中札（チョウフフイケット）を挿入し、揚返を終へた枠には四箇所に口留絲を施してから、場内にある乾燥室に炭火を入れ、室内の溫度を華氏百度以下に於て二三十分間乾燥した後大枠から外づして、之を結束室に送るのである。此際揚返取扱者は工場番號を記せる小票を添へて各工女の繰絲量記入に便ならしめ且つ小票には日によつて異れる色紙を用ひ、前日又は前々日分との混同を防いで居る。

（ニ）生絲の結束　結束室に於ては生絲の檢査整理を行ふことなく、直ちに獨特な束裝法が行はれて居るが、これは絁二本を合せて二人差向で各自手に長さ四五寸の細竹を持つて絁を兩方に引張り、相方から反對の方向に捻つて撚を掛け、一人が眞中から細竹で折返すと、他の一人がその一端を受取り、之を他端に嵌め込みて捻頭を作る。其の操作は敏速に手際良く行はれ一時間に二人掛で約六十本を捻り得るといふ。次で括造に就て廣東絲は十括八十斤入俵とするから一括の重量を八斤とし可成尨大な括である。自然括の本數は一定せず、例へば工女の平均繰絲量を四十匁とすれば一括の本數は三十二本となるが、各工女の繰目の多寡によつて區々たるを免れない。米國向再繰絲にしても當初は絁一本に對する繰繭量を一定し、十五中は一括の本數を六十本、二十一中は五十五六本を標準としたが、最近は之に著しい不同を見る。八斤に纏められた絁は括箱に並べて、小型の壓搾器で締めたる後取出して頭髪を梳つるやうに外面を念入りに整理してから商標は太い木綿絲で括にくゝりつける。斯くて括は晒木綿で包みたる上に油紙で包んで大抵毎日之を問屋に向け發送して工場裡萬一の盜難を避けて居る。

（ホ）屑物整理其他　一體に廣東の繭は絲量が尠い上に除綿を行はないから手屑の產出量は頗る多い。この屑物に就ては更に項を改めて述べるが、生皮苧は水結（ツイイキー）と呼ばれ、大和生絲廠に於ては第五造乾繭に對する生皮苧量は一一％の割合を示し、また粤經絲廠の此期新繭期からの水結生產量は乾繭に對し最高一三・六八％から最低一〇・八〇％を示し、之を生絲百斤に對し約五六十斤の生皮苧が出る有樣である。是等の手屑はタタキの上に鐵板に無數の穴を穿てる桶型の壓搾器に入れて水を絞つてから之を汽罐の傍に掛けて乾燥し千斤に纏めて廣東の屑物問屋に送荷する。次に蛹蠶繭（チャムフオン）は之を絲場（スウザン）から搬出するに、低い車臺に桶を載せたもので搔き集めたる後、農家に賣却するが、五百釜の工場で蛹量は五六百斤に達し、値段は百斤一元五十仙乃至一元八十仙である。農家に買はれた蛹は之を池塘に投じ副業たる養魚の飼料となる。其他の仕事に於

て司機はエンヂンの手入と共に破損し易い絲鐘の修理に當り、薪割は寄宿工女に給すべき薪を取扱ひ、それから武裝せる夜警は夜間匪賊の襲來に備へて居るが、工場には二三十挺の銃が用意してあつて、特に物騷なる場合には增員して非常警戒をやる。斯樣に廣東絲工場は支那人式に發達し、粗笨的にして簡單なる經營は低級な廣東絲の經營法としては當を得たものと言ふべきであるが、然し此點に就ては更に肝心なる工場能率から觀察せねばならぬ。

五　繰絲法の得失及工程

共撚式二口繰の繰絲器械に就いては、既に前項に說明を加へたから其の運用に關し先づ附屬品を見るに、索緒箒は岡松の根で作られ長さ二尺ぐらいある尨大なものであり、また索緒、添緒に用ふる竹箸は大小二組あつて、大なるは長さ九寸位、それから繭を掬ふ金屬製杓子一個及索緒用小笊(徑及深さ五寸位)一個其他膳臺整理用に大小の素燒小皿二枚を用ひ、大皿(徑凡そ六寸)には蛹を入れ、小皿(徑凡そ二寸五分)は玉繭及揚繭の容器に充てゝ居る。そこで工女は席に着くや、お下げに結つた頭髮は後ろの繰車に捲込まれる懼があるから、之を枠臺に結付け、膳臺に向つて兩脚は臺下に長く渡された横板の上に載せて愈作業に着手するのである。先づ煮繭索緒の作業は配繭笊三四十匁入の繭全部を盆面に投じ、蒸汽管の龍頭を開いて盛に繰湯を煮沸し、二百度位の熱湯に數分間竹箸で攪拌して充分繭層に湯水の浸透を促す。次で索緒箒を使つて相當緒立つたところで、太い竹箸で中央から緒絲を掬ふて右手に撮み上げると、之に繫つた繭は圓錐の形狀となり、その一部を釜に殘して、他は之を前方撚掛架の鈎に懸けて置く、其狀は恰度投網を吊下したやうな恰好である。續て絲縷は二つの集緒孔を通して絲鐘にかけて之を廻轉すると、百纖每にペルが鳴る仕掛になつて居る。通例撚は二三百纖を施して絲鈎に掛け更に絲鈎から絡交器に至る間に於てモウ一回撚を掛けて居る。

而して歐洲向大枠になると回轉數を一分間約六十回の速度とし、繰絲するに從ひ添緒には右手に竹箸を握つて、左手に纏められて居る繭を一つ宛撮み上げては、之を集緒孔下に投げて箸先で幹絲に纏着せしめ、持繭が減少すると吊し置いた繭を適量宛抓取つて補充するのである。それから落緒繭の緒絲を求めるには何分にも繰鍋一つで全部の操作を辨じなくてはならぬから落緒繭は之を小笊に入れて繰湯に浸し、竹箸で笊の中を搔き廻して索緒し、よつて以て釜面の散亂を防いで居る。斯樣な繰絲法の運用價値に就いては先づ原料繭の關係を見なくてはならないが、廣東繭の如く外觀は恰も綿繭のやうに緊縮なく、その割合に內層は細い纖維で密着して居る繭質に對しては、到底尋常の方法で繰絲するは困難なるべく、勢ひ手の觸られないやうな熱湯に於て煮繭索緒するを要し、之が爲に竹箸の使用を見るに至つた譯である。そして竹箸の器用なる使振りは殆ど手指を使ふに變りはないが、然し之が爲め添緒に切れ絲が長くなり易く、延いて抱合を害し、類節を生ずることを免れぬ。また繭の纖度は二デニール以下で、十四中の粒付數は七八粒から二十一中に至つては十二三粒を算する有樣であるが、唯二口繰だけに添緒に追はるゝこともなく、自然纖度は齊一に近く、忌むべき絲條斑を作る缺點は比較的尠い、此點廣東式繰

絲法の得色たるを失はぬが、然し之を經營上の重要點である工程に至つては二口繰を如何に回轉せしめても、其の能率は知れたものである。のみならず共撚式に於て丁寧にも多數の繭を二個所に懸けるから、抱合は遺憾がないにしても頻りに切斷を繁くし、其都度例の絲鐘をチンゝゝ鳴らさねばならない。この煩瑣な手數と同時に煮繭索緒及繰絲の全作を交々鍋一つで辦じて居るから、假りに一回の煮繭に六分間を要するものと見ても、一日に五回の煮繭をやれば三十分間といふ貴重な時間は操作の回轉を休んで居るのである。

從て工程の慢々的なるは察するまでもなく、蓋し此點が特殊な多化性繭の繰絲法として行はれて居る廣東式繰絲法の一大缺陷であらう。然らば一日の繰目は幾何かといふに、十四中に就て最優格工場は一釜三十四五匁から中等格に於て四十匁前後、裾物工場に至つて五六十匁といふ見當であらう。次で絲量に就ては生皮苧量が生絲の半額以上も出る有樣であるから乾繭百匁からの絲歩は二十匁にあるが、之を上海式繰絲法に較れば絲目を切ることが稍劣い。今是等の點に就いて最優格普通品に比し約二百弗高)の粤經絲廠(五五〇釜)に於て一九二六年新絲からの成績を見ると左表の如くである。

作別	織度	一日の平均繰目	同對乾繭百匁絲量	同生皮苧量
大造	十四中	三一・四九匁	二〇・〇〇	一一・三六匁
同	同	三二・六三	一九・九五	一一・九〇
同	同	三二・六三	一九・九五	九・三五
同	同	三二・二〇	二〇・六三	一一・〇八
同	同	三二・一八	—	一二・二五
同	同	三七・一六	—	一三・三八
同	同	三七・四〇	一九・五〇	一二・九四
同	同	三六・六五	一九・三五	八・六〇
同	同	三七・七一	一八・四四	一三・二三
同	二造	三六・三二	一九・五三	一二・〇〇
同	同	三六・〇六	一九・〇二	一二・二一
同	同	十五中		
同	同	三六・三八	—	一二・九〇
同	三造	三八・七〇	一八・〇八	一二・七〇
同	同	三八・二四	一八・六八	一二・五〇
同	同	三七・二五	一八・三八	一〇・一〇
同	同	三五・五八	一八・六〇	一二・七六
同	四造	三三・四〇	二一・九〇	一一・五七
同	同	三二・八三	二一・七五	一一・三三
同	同	三七・七三	二一・一五	一二・〇七
同	同	三四・七〇	二〇・七八	一一・一三
同	五造	三五・〇三	二〇・四八	一一・〇九
同	同	四〇・一三	一八・九八	一二・三八

同	十四中	三九・五二	—	一三・六八
同　同		四一・五一	二〇・七〇	一二・三九
寒造　同		三六・一四	二二・九五	一〇・八〇
同　同		三六・〇〇	—	一〇・五九
（平均）		三五・九八	一九・九四	一一・七八

但し繰業時間は年間太陽の出沒時間の長短により十時間乃至十二時間である。尙又最優格工場大和生絲廠に於ても視察當時五造の乾繭に就て一日の繰目は最高四十匁から最低二十七匁、其平均は三十三匁及乾繭百匁に對する絲步平均十七八匁を示して居た。

六　原料繭の品質及價格

既述の通り廣東繭は大造（二化性）と輪月（多化性）の兩種であるが、前者は頭造に限られ廣東繭は卽ち輪月種と見て差支ない。この繭は氣持の良い笹色を持ち、兩端は緩かに尖つた長圓形を爲し、而かも非常に小粒で一升凡そ六百粒を算する。從て纖維の細いことは言ふまでもなく、之を一粒繰にかけて最初の百回纖度が最も太いと言つても、僅に一・九三「デニール」に過ぎない。續て第二次百回一・七八第三次一・四四と、內層に入るに從ひ著しく細くなつて末尾の第四次百回纖度に至つては、僅々〇・九三「デニール」といふ細さで、到底繰絲に蛹襯を攻めることが出來ない。絲量の僅少にして工程の遲々たるのも當然であらう。

更に此繭の特徵としては殆ど毛羽と繭層の境目がなく、上海地方で綿繭と言はるるものに類し、之を踏潰したり、壓搾したりしても、左迄繰絲に支障を來さざるものの如く廣東絲の彈力性に富む一面を語つて居る。それから繭は非常によく揃つて居る。省內何處の產地でも繭は似たものであるし、また養蠶家個々の荷口に見るも、大體に於て蠶作が良ければ全部が優繭であり、惡ければ全部が劣繭であるといふ狀況で品質が良く統一して居ることは、時にとつて製絲經營上便益とする所であらう。尙其品位に關して私の携へて來た見本繭に就いて片倉製絲株式會社大宮試驗所の繰絲成績を擧げると次のやうである。

廣東繭の繰絲成績

繰絲成績

要項	第五造	第七造
繭の種別	青白	薄青白
乾繭受日	一三〇・〇〇匁	一五〇・〇〇匁
繰絲本數	二	二
繰絲量	二八・〇〇	二九・二〇
一本絲目	一四・〇〇	一四・六〇
對千百匁繰絲量	二一・六〇	一九・四六
繰絲時間	九時・三五分	一〇時・二〇分

絲質檢査

要項	第五造	第七造
平均纖度	一三・八〇	一三・七〇
均齊	五等不良	五等不良
類節（大類）	一・五	一・五
（小類）	三九・六	五八・九
光澤	クリーム色にて光澤あり	同上
手觸	滑にして佳	滑にして可
平均一粒纖度（厚）	一・八四	一・八二

生絲廿匁繰絲時間	六・五一	七・〇四	一・四五（中）
生絲十匁生皮苧量	四・六四匁	五・一〇	一・〇五（薄）
生絲十匁ビス及揚繭量	一・三〇	一・一七	平均一粒絲長

	一・三五	一、七〇〇尺
	一・〇二	一、五二〇尺

△繰絲方法、三ツ枠、半沈、繰絲溫度一八五度

△煮繭時間、御法川煮繭機適度二分三十秒、上落一分三十秒、煮過三分三十秒、溫度二〇〇度

△煮繭程度の六ケ敗きこと、繰絲困難の故均齊不良及額節甚だ多し

更に各作柄に對し左記參考表を掲げよう。

大正十三年對生絲百斤原繭要量（七分乾見當）

作別	出廻額比較	平均纖度（デニール）	上繭	下繭
頭造	一・〇	二・二〇	八九三斤	一四・八六斤
二造	二・〇	一・八〇	九四九	一三・九六
三造	一・五	一・九〇	八六七	一四・四五
四造	一・五	一・九五	九八六	一六・三九
五造	二・〇	二・〇〇	九五九	一五・九八
六造	二・〇	一・八五	九二〇	一五・三〇
寒造	一・〇	一・八〇	九三三	一五・五二
平均			九三一	一五・四九

	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月
上繭	四	五	六	七	八、九	九、十	十、十一	
下繭	四	五	六	七	八、九	九、十	十、十一	

次に繭價は絲況並に豐凶によつて著しい高低があるばかりでなく、之を明確に知ることの甚だ困難な事情が介在して居る。蓋市場に取引せられる繭は農家の手に殺蛹の行はれた繭で、乾燥歩合が甚しく區々であり、斤量取引もあれば、籠數取引もあつて、直ちに生繭相場を知ることが出來ないからである。從て繭相場を示すに仲繭（換算）一萬粒を建値とし或は生絲一斤に對する繭値段卽ち掛を以てする狀況である。私が視察當時の第七作の出廻相場は生絲一斤に對し十四元を唱へて居た、之を生繭相場に換算すると、大體一貫匁五元八十仙見當となる。處で最近の繭相場は罷業以來之を知るべき材料がないから、左に某輸出商調査による大正十三年度に於ける繭相場を左表に擧げよう。

作別	繭價（一萬粒建香港弗）上繭	繭價（一萬粒建香港弗）下繭	繭本生絲百斤	出廻時生絲相場弗
一	一四・五〇弗	一〇・六二	一、〇一五	一、三〇〇
二	九・二四	六・八一	六九五	一、二一〇
三	九・二四	六・八一	六三〇	一、〇八〇
四	一一・九八	八・八三	九九五	一、二六〇
五	一三・五三	九・九八	一、〇一五	一、四六〇
六	一三・八五	一〇・二一	一、〇〇〇	一、三二〇
七	一〇・三九	七・六六	七六〇	一、二七五
平均	一一・八二匁	八・七〇	八七〇	
乾繭十粒の目方	〇・二五六匁	〇・一七七		

七　繭市場

繭は水路の四通八達せるデルタに於て四月から十一月初旬にかけて七回に亙つて出廻るから、繭取引は充分な發達を遂げ、その機關の整頓は見るべきものがある。そして其主なるものは繭市と繭棧とであつて、先づ農家は繭を「繭市」に持ち込んで、賣却し、繭市に於て「販家」といふ仲買人の手に買集められた繭は之を製絲家の經營する「繭棧」に賣込む順序である。其他地方によつては仲買人が農村に出張して買出す所謂坪買も行はれて居るがこれは餘り多くはない。

先づ繭市といふのは頻る宏大なるバラツク建の繭市場で、多くは株式組織の下に營利を目的に經營せられ、資本金の如きも一萬乃至六萬元と言はれて居る。繭市の位置は孰れも舟揖の便ある水路に面して設けられ、之に小蒸汽船を備へ、無料で顧客往來の用に供し、或は買人に代つて繭代金の立替に應じ、其の手數料として賣人より繭代金の三分及買人より一分乃至一分五厘を取得する營業である。

繭市の數は順德縣二一個所、南海縣一三、三水縣四、清遠、鶴山縣各三、香山、新會縣各二個所と合計四十八個所を算し、其規模の大小は一樣ではないが、通例各作の取引高は平均十萬元に達し出盛期には一日二千擔位の取引を見る盛況である。繭市に於ける買人は大抵水斗と稱するもので占め、彼等は此處で買つた繭を繭棧に轉賣して其値鞘を利得する仲買人であるが、此間盛に思惑を試むるスペキレターが尠くない。水斗が繭市の取引員となるには豫め繭市に登記承認を經なくてはならないが、其の認可を受けたものは場内の一廓に葦子帳で數坪宛に仕切られた繭の置場を與へられ、此處に家號を懸げて購繭に當り、一家號は數人乃至十數人から組織し、殊に繭の最大集散地たる客寄桂州に於て水斗の數は約三百七八十家に達し、之に從事する人員も數千人を算ふる盛況振である。

出廻期中の繭市の光景を見るに、農家は繭を四五十斤宛アンペラ製の叭に入れて市場に詰め寄せ、場内は足の踏み入れ場所もない程の熱鬧を極め、到る所に商談が行はれて居るし、この人出を當に色々な物賣も入込めば、市場の附近には飲食店が立ち竝び、全く緣日のやうな賑ひである。繭市は未明、甚しきは夜中から始まつて、早きは午前十時から遲くも正午までに終る。それは買人が午後に繭棧との取引をせねばならぬ關係からであらう。そして各作の出廻期間は凡そ三週間である。

買人は繭を鑑定するに之を口に含み或は咬み、更に念入なのは其一端を口に咬へて、他端を兩手の指で之を引伸して其解舒及品質の良否を檢すなどと聞くが、是等は初心者のやることで、大抵は荷口の拜見と乾燥步合を判定して値段を切出すが、その商談振りも、これが上海地方の繭行であつたとしたならば、若し買手が安い指値をしようものなら、忽ち乃公の繭が何處が惡い、繭を買ふ金がないだらう……などと喧しい光景を見せるが、此處の繭市には斯樣な喧騷を見ないことは流石は廣東であると思はれた。然しながらまた水斗は田舍の客を捕へて一家十數人のものが、各自異る買人のやうに見せかけて銘々安値を切出して之を踏買するやうな詐計も行はれ

るといふ。斯くて商談が纏ると看貫は繭市當事者の手に行はれ、其の秤場は木柵を廻らして左右に出入口を設けてある。しかも此入口は狹くて身を屈めなくては這入れない恰度檻のやうな體裁で、其内部に正副二本の天秤が吊してあり、兩者の衡差百分の三以下が許されて居る。秤手は看貫を讀み上げると買人は其の數量を書留め、同時に秤場の隣室に控へる書記は之を記帳すると同時に紅絲二色に區別した二枚の傳票を作製する。即ち繭價は銀(兩)にて建てられ、之を毫銀(小銀貨)に換算して支拂ふ譯で、二枚の傳票は之を會計室に送ると、現金係は綠色傳票によつて繭代金を十日以内に賣人に支拂ひ、赤色傳票は之を買人たる水斗に交付して後日決濟の用に供して居る。水斗の買入れた繭は場内各自の繭置場に持込むと其處には數人の老婦が据り込んで選別をやつて居る。選繭歩合は約一割、屑繭は直ちに之を座繰業者に賣却し、上繭は相當の荷口に纏めて製絲家の繭棧に引込むのである。

斯樣に繭市は繭代金の立替を爲し、出廻の終りたる後水斗と決濟を遂げるが、此際信用ある者を除いては豫め保證金を提供せしめて居る。それから水斗が製絲家に繭を掛賣した場合には繭代金の取立は繭市が代つて之に當ることになつて居るが、繭市はこの集金人に對し一分の手數料を支拂ふ慣習である。其他繭市は地方に勸誘員を派して顧客の吸集に努め、勸誘員には報酬として集荷取引高に對し二分の口錢を與へると言ふやうに繭市の營業は仲々組織的である。然し繭市の取引慣習は大量集散地容桂を始め斤量取引によるを普通とするが、地方によつて一種の容量取引を行ふ繭市がある。この容量取引は繭を籠と稱する竹籠に入れて其個數により賣買し、其の籠には大中小と三種がある。大籠の繭粒數は九千粒乃至一萬斤粒を算し、中籠は四千乃至七千粒及小籠は二三千粒を容れて居る。斯樣に各籠の繭粒數は一定せぬが、每籠若干と値を決めて取引して居る。更に東莞縣石龍地方の繭市に於ては販家が直接養蠶地方に出張して繭を農家から買集めて、之を繭市に持ち込み繭市には大手の販家が之を收買して容桂地方の繭棧に賣却し、或は容桂地方の製絲家がこの繭市に出張するものもある。試みに農林試驗場調査に係はる主なる繭市を擧げれば左表の如し。

繭市一覽表

繭市名	所在地	取引年額	摘要
容桂絲業	桂州	五〇〇(萬元)	容桂地方は斤量取引、
盛豐	容奇	三〇〇	小蒸汽船を備へ集荷す
合興	勒流	六—七〇	勒流地方は籠(籮)數取
公信	同	四—五〇	引により午前二三時に
年豐	同	六—七〇	開市天明頃散市
榮益	龍江	六—七〇	同　上
永和祥	樂從	三—四〇	樂從地方は籠數取引、
廣和	同	三—四〇	天明に開市、午前十時
公信和	同	二〇	頃散市

和豐	同		—	同上
廣和祥	陳村		四—六〇	同上
公興	同		三—一〇	同上
穗豐	同		二〇	
天和	大良		五—六〇	斤量取引による
利農	甘竹		一〇	籠數取引二、五、八日開市
和豐	官山		二〇	官山地方は籠數取引
永豐盛	同		四—五〇	午前八九時開市正午散
人和	同		二〇	市、繭市の規模一般に
大公	同		二〇	宏大
人和祥	吉利		一〇	籠數取引による
聚利祥	平洲		二〇	籠數取引による
公平	同		一〇	
綸豐	同		一〇	
利農商	九江		二〇	籠數取引
同泰	同		一〇	
洪德	同		三—四〇	小蒸汽を備へ買人の爲めに容桂と往來す
經業公平	香山小攬		七〇	斤量取引、容桂方面へ汽船を配す
復興	同古鎮		五—六〇	斤量取引、午前九時開市、正午散市
泰記	新會北街		一八〇—二〇〇	斤量取引により小蒸汽船を備へ集荷す
業豐	同		—	籠數取引
大有平	三水西南		三〇	
公和	同		一六—一七	
悅來興	同		一七—一八	西南の對岸老砂にあり
同益和	同		三〇	最近取引漸減の傾向、
大有年	鶴山古勞		一〇	
肇慶	高要城外		一〇	斤量取引民國九年開設
泰和祥	東莞石龍		三六—三七	
合安綸	同		七	
大綸	同		七	
廣年豐	同		七	
公安祥	同		七	
福昌綸	同		三	
興祥	同		三	

其他黄連、倫敦地方に二三個所を加へて其總數は約五拾個所を算し、繭の取引總額は二千數百萬元に達して居る。

八　繭棧と蠶繭棧

製絲家の繭買入所たる繭棧は繭市のやうな大規模なものでないが、割合立派な煉瓦建で、內部は買場、帳場乾燥室及貯繭場等に分たれて居る。繭棧は工場に附設するものもあれば、或は二三製絲家が共同仕入に當るものもあつて其數は省內百八十餘棧を算へるが、其八割までは最大集散市場たる容桂地方に集つて居る。繭棧の賃借料は通例年二三千元を要し、工場支配人監督の下に大體左記職員を配して居る。

	人員	一人の給料
正副買手（買入係）	二人	三〇元
執繭辦（切步其他試驗係）	一	二五
掌櫃（會計）	一	二〇
焙繭（乾燥係）	二	一五
雜務	五	一二
口挽工女	二	一〇
司厨	一	一五

大體左記職員によつて購繭方法は相當組織的に行はれて居る。之に就て先づ繭棧の入口を這入ると買入事項に就いて次のやうな注意書が貼られて居る。

一、引込みたる總荷は之を全部搔き廻はすこと（入門撈繭）
一、供試用見本四十匁の採り方は遣直すことなし（掛號不覆）
一、大口試驗と小口試驗は同一人の手に行ふこと（大辦小辦在一手）
一、繭袋の上部にある繭と底部の繭とが乾燥の度同じからざる荷口は受付けず（底面不符不掛）
一、看貫前の荷は賣人の責任にあること（未看秤貨歸客人）
一、商談不調にて一旦持出した繭は再び引込むべからず

斯樣に買入方法は先づ繭仲買人、思惑師及大養蠶家が繭をアンペラの叺に入れて之を擔つたり、或は船によつて繭棧に持ち込んで來る。是等の荷口は少きは五六十貫から、大口は數百貫と纏つた大量ではあるが、之を買場の蓆の上に曝け出し、二三人の苦力が擢のやうな木棒を以て丁寧に繭を搔き混ぜること本邦工場に於ける所謂合併挽にやる混繭と同樣である。斯くて充分に各俵の繭を混合したる後再び叺に收めて供試見本を徵るのである。之には各俵から一握ぐらひ宛採取して笊に入れ、之に番號を記せる札を附して荷口の混同を防いで居る。

偖て試驗方法に就て先づ第一著は見本繭から繭四十匁を秤量して其の粒數を算へ、其の乾燥程度を知るにあるが、之を「大辦」若くは「四兩辦」と稱して居る。之に依つて例へば三百粒あれば此繭一斤の顆數は一萬二千粒なることが判知され、延いて一萬粒建の値段も算出が出來るのである。而して之を實際に徵するに四十匁の繭量に對する顆數は三百粒前後のもの多きを占めて居るが、少きは二百二三十粒から多きは四百粒を算し、殺蛹による乾燥程度の區々たるを示して居る。次の手段は圓卓子若くは竹製の圓い盆を試驗臺として、其上に前記四十匁の試驗量を平等に百粒宛に區分し之を買人の選擇に任せてその一區を口挽試驗に充て、他の一區に就て切步試驗を行ふが、之を「小辦」と稱して居る。そこで先づ切步試驗から說明するに、四十匁の繭

を百粒宛竝べられた區分に就て賣人は平手で繭面を押して最も繭層のありそうな一區を選んで、之を係員に渡すと係員はこの百粒區を更に五等分して其一區二十粒に就て切歩を行ふのである。詰り總荷に對する切歩試驗は僅々二十粒に就て檢査するに過ぎないから、其の二十粒は出來得る限り、總荷の品位を代表するものでなくてはならない。從つて其等分方法は頗る鄭重に行はれて居るから多少煩雜ではあるが、左に等分法の順序を說明して見よう。

イ、先づ百粒に就いて繭綿、夾雜物を除去して盆に繭層の厚い上繭から漸次十粒宛を拾ひ集め、假りに之を十粒一區とすれば A,BC,……J, の拾區となり、品位はA區より順次遞下し來るのである。

ロ、次に最優繭A區と最劣のJ區を除いたB乃至I區に就て先づB區を一粒宛一區に分ける時はB區は $B^1 B^2 B^3 \ldots\ldots B^{10}$ の十區となり、次に之にCDE…K區の繭を一粒宛前者に添加して行くと、各區の繭は例へば $B^1 C^1 D^1 E^1 F^1 G^1 H^1 I^1$, $B^2 C^2 D^2 \ldots\ldots H^2 I^2$, $B^3 C^3 \ldots\ldots$ 乃至 $B^{10} C^{10} D^{10} \ldots\ldots H^{10} I^{10}$, の八粒十區となり、各區の品位は理論上平等に區分された譯である。

ハ、第三段としては上記八粒十區を隨意二組づつ組合せて五區に半減すると各區の品位は例へば、$B^{1+2} C^{1+2} D^{1+2} \ldots\ldots I^{1+2}$, $B^{2+3} C^{2+3}, \ldots\ldots$, $B^{4+6} C^{4+6} \ldots\ldots$ 等の同一品位二粒を持つた十六粒一區の組合せが出來るのである。

ニ、最後に殘されたA區Iの二十粒を前記區分法に從て四粒宛の五區に分ちて、前記五區に添加すると全數の百粒は品質的にも五等分されて、例へば $A^{1+2} B^{1+2} \ldots\ldots H^{1+2} I^{1+2}$ 其他二十粒宛の五區となる。

斯樣に理論上品位相等しい各區を頭から品位の順序に竝べて賣人をして其一區を任意選擇せしめて居る。そこで賣人は前述大辨の場合と同樣に平手を愼重に繭面に押し當てゝ各區を比較し最も切歩のあり相な區を指摘すると、買人は該區二十粒の切歩を行ふのである。切歩は鋏を以て繭層を開き、含まれたる汚繭爛繭等に對しては之を一つ々々水に浸して洗滌したる後、繭層は之を金網に入れ、傍に備へてある火鉢の上に焙つてから、銳敏なる天秤を以て秤量するのである。斯くて例へば二十粒の繭層量を〇・四匁であつたとすれば一萬粒に對する繭層量は二百匁となり、之より得べき絲量に對し、彼等は大體その六掛半といふ見當を持つて居るから、一萬粒に對する絲量は百三十匁なることが推算され、之より繭價が割出されるのである。同時に一方口挽試驗には棧內の一隅に足踏繰絲器械二三臺を据へて、供試量百粒に對し先づ下繭を選出してから、上繭を繰絲し、其の解舒を測定するには、最初切斷したる時に盆面に殘れる粒數を算へ次で第二、第三次の切斷時に於ける殘繭數を算へて之を左記事項の傳票に記入するのである。

號				
第	頭	過	若干粒	蠟　口（蛆出繭）　若干粒
貳	過	同	上	黑　靈（汚繭）　同
參	過	同	上	梅　口（揚繭）　同
				双　頭（玉繭）　同
貳				繭（薄皮其他）　同

即ち買人は前記口挽試驗と切歩試驗及乾燥程度の三項を彼此參照し、そこで始めて一斤若干と指値をするのである。斯樣に繭棧に於ける購繭法は甚だ合理的であつて、たとへ其の手段に

不充分な點があるにしても、買賣兩者談笑の間に於て僅々十五分間位で、これだけの試驗を濟ま
し商談を遂げて居ることは聊か賞讃に値するであらう。

値段の協定を終へた荷口は天秤を以て看貫し、通例第四作からの春挽原料に持越すべきもの
は之を乾燥室(爐灶)に送り、本乾燥(焙繭)に附し、半プレツス俵裝(夾繭)を施して貯藏する。乾燥の設
備は天井の高く、薄暗い室内に於て乾燥室は各室長さ四五間、幅一間半乃至二間、高さ三四尺の大
さに煉瓦壁を積上げ其上部に竹簀を張つた我が「ほいろ」様のもので竹簀の上に繭を七八寸の
厚味に敷き竝べ、四邊には高さ一尺五寸位の腰板を廻らして居る。坑の正面には二三個所に幅
二尺、高二尺五寸位の口を設け之より炭火を投入して口には木戸を閉め、自然的に加熱を與へて
居るが、熱の放逸などにはお構なしの不經濟極る乾燥法で殺蛹繭を全乾とするに約十二時間を
要する。

次で繭の貯藏法は廣東でなくては見られない獨特な方法が行はれて居る。それは木綿袋に
焙繭五六十斤を容れ壓搾機によつて容積を凡そ三分の一位に壓搾し、この半プレツス俵裝は長
立方形15×16×28寸大とし、之に麻繩を掛けた丁寧なものである。察するに是れは俵裝によつ
て濕氣を防ぐのと貯藏の便宜から來たものであらう。更に廣東省に於ける產繭地としては三
角洲一帶と共に西江の沿岸に沿ふて廣西省に亙る地帶は主要なる原料給供地であつて、此方面
より廣東製絲家に供給する乾繭は當業者の見るところでは年額乾繭七萬擔と言はれて居る。
之に就いて廣東省梧州稅關による蠶絲類の輸出を示すと左記數字を示して居る。

	大正十二年度	同十三年度	同十四年度
座繰白繭絲	四二	七	二擔
座繰黃繭絲	一二	—	—
繭	四、〇一〇	二、六九二	四、二八一
屑絲	七四三	五五七	八九一
屑繭	二〇三	一七九	一六

上表の數字は當業者の言ふ處とは相違はあるが、それは稅關を經ずして廣東に輸送するものが
多いからで、是等は水客と稱する商人に買はれて產地で炭火を以て全乾となしアンペラ袋に包
裝し西江を利用して船で運搬し、この繭は一名包頭繭と言はれて居る。此種の繭は三水縣西南(サイナン)
に集り蔓繭棧と稱する市場に於て買賣されて居る。蔓繭棧とは西南特有の繭委託買賣機關で
水客は此處に繭を委託すると製絲家の繭棧が出張して購繭に當つて居る。此棧の營業は繭百
斤に對して手數料一元四十仙及倉敷料二十餘仙を賣手より徵する慣習である。左に蔓繭棧及
その取引額を示すと次のやうである。

棧名	取引年額	棧名	取引年額
萬興祥	三十餘萬元	聯益隆	十餘萬元
公興祥	二十餘萬元	同福興	二三十萬元
公興和	十餘萬元	慶兆豐	十餘萬元

卽ち合計六棧其取引年額は約二百萬元に達し、西江上流廣西省方面が原料地として重きを爲して居ることが察せられると同時に、將來廣東產繭額の增加も此方面に最も囑望されて居る。

九　工女の養成と賞罰法

假りに三角洲に於ける製絲工場が全部運轉するものとせば、之に座繰業を入れて約十萬人といふ工女がそう廣くない順德、南海二縣(略我が信州の半分位の地域)に働いて居るのである。從てこの工場に於ける農家の子弟は孰れも年頃になれば、工場に勤めるばかりでなく、製絲家又は富豪の娘と雖も尙且繰絲に從事し、普通の婦女子に至つてはたとへ一旦婚嫁しても一二年にして自ら去り、再び製絲工女となりて自活する奇風がある。そこで農家の子女が一人前の製絲工になるには十二三歲頃になると、先づ先輩格の製絲工女を選んで、之に弟子入する譯である。それには母親が菓子其他の贈物を携へて娘を師となるべき工女に引合し、神前に線香、燭、花等を立てゝ師弟の契を結び、普通此の兩者を師傅、師仔と呼んで居る。弟子卽ち師仔が工場に入るには手附金として三元乃至五元を工場に納めてから、師傅たる工女の身邊に至り、萬端の手助を爲し、其間繰絲の技術を習得する。工場によつては師仔に「某々絲廠學生」なる徽章を胸に下げしめて一般工女と區別して居るものもある。

斯樣に工女の養成は工女間の私的關係の下に行はれ、工場は直接之に關係して居ないから勿論給料などは拂はない。そして師仔が相當期間(通例三箇月)に技術の習得を終へたものは工場から釜が與へられ、最初の十五日間は工場に對し、只奉公すべき義務がある。しかもその技術尙未熟のものには之を二十五日に延長し、此期を過ぎて始めて若干の賃銀が支給され、三箇月後に至つて前納手附金が工場から返還される。

而して製絲工場は密集的に存在して居るが、工女の轉勤も頻繁であつて、中には弟子を置去りにして他工場に轉ずるものもある。斯る場合には工場は師仔の爲めに師傅を周旋することがあり、或はまた弟子諸共他工場に轉ずるとか、事故なくして十日以上缺席せる場合には之を除名し、其の手附金を沒收する規定である。工女の繰絲成績に對する賞罰規定も澤山な箇條に亙つて之を設けて居るが、賞罰本來の目的に適ふものは尠い。先づ賞罰規定に就て絲目賞(高絲といふ)は十匁に對し十仙の割合を以て支給せられ、精勤賞は十五日間を一期として其間皆勤者には四日分、一日缺勤者には二日分の賃銀を與へて出勤を奬勵して居る。それからデニール賞罰は工場により異るが、今左に二工場の例を擧げて見やう。

甲工場(二十一中)

太	細	罰金額
二一・五	一九・〇	五仙
二二・〇	一八・五	一〇仙
二二・五	一八・〇	半日分賃銀
二三・〇	一七・五	二日分

乙工場(十五中)

纖度	罰金額(仙)
一二・五	罰　八〇
一三・〇	同　二〇
一三・五	同　五
一四・〇	賞罰なし

二三・五	一七・〇	三日分	一四・五	賞　一〇	
二四・〇	一六・五	四日分	一五・〇	同　二〇	
二四・五	一六・〇	六日分	一五・五	同　一〇	
二五・〇	一五・五	八日分	一六・〇	賞罰なし	
二五・五	一五・〇	十日分	一六・五	罰　四〇	
二六・〇	一四・五	全部の賃銀	一七・〇	同　二・〇〇	

乙工場に於ては前表最高罰金二元を二回以上受けたるものは之を解傭するの規定である。而して繊度檢査は四五百釜の工場に於て通例一日に二五乃至四〇釜に就て行はるゝに過ぎないが、歐洲向直繰に至つては重い大枠を床上に横へて檢査せねばならぬから甚だ厄介である。其他罰則に至つては其數四五十項の多きに達し、果して實行されて居るや否やは疑はしいが、その主なるものを列擧すれば左記のやうである。

双口（二本揚）	罰	五仙	
大梗多（大類多きもの）	同	一〇	
大梗太多（大類甚だ多きもの）	同	二〇	
花爛（ズル節）	同	一〇	
水冷（繰湯低温のもの）	同	一〇	
搭多繭（粒付數多きもの）	同	一〇	
沉底多（沈み繭多きもの）	同	一〇	
水濁（繰湯濁れるもの）	同	一〇	
打少（撚懸少きもの）	同	一〇	
埋晏工（遲刻するもの）	同	五	

一〇　繰絲時間と賃銀

前章にも述べた通り三角洲一帶は匪賊横行の處で、點燈作業は出來ない。のみならず薄暮からは工女の往來さへ物騷であるから、繰絲時間は日出に始つて日沒に終る。從て繰業時間は一番日の長い夏季に於て午前五時半から午後六時半までを最長とし、冬季は午前七時に始まつて午後五時半に終業し、其間食事休憩時間一回三十分を差引いた純工作時間は十時乃至十二時間半の間にある。また工場には別に休日といふものがない。舊曆年末年始に一二箇月の閉業期を除いては、打通し繰業を續けて居る。それから舊正休みに工場主は一回工女を招いて馳走の宴を張るとか、或は支那の二大節句たる端午、仲秋の兩節に祝儀を與へるなど昔の本邦工場に似た習慣がある。

賃銀の支拂は月二回拂卽ち十五日間を一期とし、之を是關と呼んで居る。この是關毎に賃銀は勘定され、これは管工（檢番）の手に行はるゝばかりでなく、同時に管工は是關毎の繰絲成績によつて工女の賃銀を高低して居る。日給額に就ては勿論工女の技倆により低きは二三十仙から多きは五六十仙と等差があり、多數工女の中には一人二人一元近くの日給者もあるが、普通二十

五仙乃至五十仙のものが最も多い。容奇粵經絲廠の賃銀は平均日給三十二仙を示し、また桂州大和生絲廠に於て一是關に於ける延人員五四九人に對して支拂はれた賃銀は三二二元四〇仙を算し、一人當りの賃銀は五十八仙强に當り、其内譯は日給平均四十六仙、絲目賞、精勤賞等平均十二仙を示した。之によつて廣東工女一日の收入は食費自辨持五十八仙、再繰工一日八十仙と見て大差あるまい。

一一　製絲工女の特色

廣東の製絲工女は二十歳から二十五歳頃のものが最も多數を占め、之を上海地方の平均年齡三十歳前後に比して割合に年長者の少いことは一般に工場の採光が惡しく、視力少しく劣へると繰絲に堪えないからであらう。而して彼等の特色として先づ言ふべきは、獨身主義が多いことで、曾て私は或る書物に支那の同性愛(磨鏡薑)は廣東製絲工女の間から起つたものであるとの記事を見たことがあるが、それかあらぬか一旦姻嫁しても俗に「不落家」と言つて夫の家には還らず、或ものは若干金を夫家に與へて、同棲の絆から免れて自立自活するといふやうな奇風に富んで居る。從て彼等は活潑であり、惡く言へば女らしい淑かな感は毫毛もない。身形は比較的小奇麗に整つて居るが、短い褲子に靴を用ふることなく、素足に支那式の木履をはいて工場にやつて來る樣子は北方の纏足婦人とは著しい相違である。勝ち氣で我儘な氣性は作業中に於て妄りに私語を交へたり、或は飲食をとり、甚しきは煙草を咥へて繰絲を續けるものもある有樣で之を能く使役することは容易ではあるまい。然し此點は一面工場が支那式に發達して、經營者は工女の訓練敎導などには無關心であることにも起因するであらう。けれどもまた一方彼等の技工に巧なる質は天稟とも言ふべく、且つ盛夏殘暑の候不完全な場内に苦熱と鬪ひ長時間の作業に堪える堅忍努力は賞讃に値するものがあるといふやうに、廣東工女は支那製絲工女の持つ長所と短所とを最も發揮して居るであらう。

工女の多くは通勤であるが、工場の集中する地方では遠來者の爲めに大抵寄宿舍を設け、一二割の工女を收容して居る。其設備は汽船の三等室のやうに室内に上下二段の寢床を設けた不完全極まるもので、衞生などには全く無頓着である。更に舍内には多數の竈を竝べた厨房があつて、之に一人の飯炊を置いて工女は銘々米鹽を備へ、また工場の終業時には門口に野菜賣などがやつて來て、工女等は思ひ々々にその束を買つて簡單に自炊を營んで居る。燃料たる薪は工場から支給され、地方によつては薪の支給に酬ゆるに、時間外三十分の繰絲を行ふ慣習がある。

翻つて所謂勞働問題を見るに、最近罷業の頻發は殆ど全支を通じての風潮であつて、大正十五年上海及無錫地方に於ける製絲工女の罷業の如き巡警は工女から糞桶を投げ付けられる騷であつたが、此點に魁を爲す廣東地方に於て大正十四年三角洲の全般に起つた製絲工女の罷業は當時一般の視聽を惹いた相當大事件であつたから、茲に少しくその顚末を記して置こう。この爭議の發端は去る大正十四年三月中旬南海縣官山の安棧絲廠の工女は賃銀增給の要求を迫つて斥けられた爲めに、彼等は生絲及器械器具類を破壞するなどの暴行沙汰に及び工女側にも數

名の負傷者を見た。そして工場主が此の事件を南海縣廳に訴へた爲めに工女の首腦者數名は拘留されたのであつた。之に對し工女側は此事件を當時の國民黨勞働部長廖仲愷に訴へて兎も角事件は一時落着を見たのであつた。然るにこれが因で、廣東工人會と製絲工女との關係が親しくなり、遂に四月に入つて斯業の中心地容奇大良地方に於ける工女は一團となつて、工會(組合)の組織賃銀の値上、操業時間の短縮及繰絲に關する罰則の撤廢等の要求條件を提げて一勢に罷業を始め、この風潮は忽ち廣東全部の工場に波及して不穩の形勢となつた。この過酷なる要求を以てする大罷業に對し製絲家側の採つた處置は、その同業團體たる廣東絲業研究所を中心に結束して、工場の閉塞、繭の不買同盟等を以て工女側に對抗し、これが實行の徹底を期する爲めに嚴重なる規約が結ばれた。その主なるものを擧げると次のやうである。

イ、工場閉塞期中は絶體に購繭に當るを得ず、若し之に違犯して私かに購繭を行ひ或は本所に密告するものありて、その證據充分なるものは購繭の全部を沒收し、罰金三千元以上を徵す。

ロ、工場閉塞期間中私かに操業し、該生絲を廣東の問屋に送荷するものは之を沒收し、且問屋が之を隱匿したる事實を發見した場合には問屋をして其責を負はしめ三千元以下の罰金を課し、若しも之に應ぜざる時は其工場及問屋の責任者氏名を貼示し、爾後永久に斯業に携はしめざること。

ハ、繭、生絲の沒收及罰金はその五割を通告者に賞し、殘餘の五割を本所の收入とす。

ニ、閉場期中工場の職員にして個人の資格を以て繰絲を行ふものは豫め工場を辭職すべし。此際工場所有の器械、器具及乾燥室一切は何人と雖も之を使用するを得ず。職員にして此の規約を違犯したるものは爾後全部の工場に於て雇傭せしめず。

ホ、各工場は保證金として舊曆三月二十日までに銀三百元を本所に積立てること。

ヘ、繭出廻期には各工場及繭棧より委員を選任し、毎日各地方に出張せしめて、同業者の規約に對する勵行取締を講ずること。

ト、同業者は隨意現銀を工場に送附することを得す。工場職員の給料支拂に送金を要するものと雖も一回千元を超ゆるべからず。

チ、復業期は罷業終息後同業者八割以上の申合があり且つ地方委員が工女の復業せる實情の證明並に官廳が之を保護すべき言明ありたる時に於て同業者の大會を開催し、多數決によつて其の復業期を決定すること。

斯樣に工女側の大規模な罷業と共に製絲業者も亦前項の如き峻嚴なる規約の下に團結することは廣東人士の一特徴と見られるが、之が爲めに直接傍杖を喰つたものは農家であつた。彼等は製絲家の繭不買同盟によつて繭の處分に窮し、其の結果彼等の子女たる製絲工女側の腰が折れて、漸く賃銀の若干値增によつて、この大事件は解決されたのであつた。即ち廣東製絲業が赤い國民政府の膝元にあつて勞働問題の壓迫を受けることは免れない。去りながら製絲工に婦女子を使用し、且つ工場が廣東市を離れた田舍に散在して居ることは、餘程この脅威から免れて居る事實を見る。

一二　製絲金融

轉じて廣東に於ける製絲經營に就て經濟方面を見るには前以て廣東省の一般金融事情に說

明を加へなくてはならないが、先づ廣東に於ける通貨は他省と大に趣を異にして居る。實際論から言へば通貨には香港弗（ホンコンダラー）と毫子（ハオツ）といふ小銀貨が對立して居ることであるが香港弗といふは香港法貨を基礎として香上銀行や查打銀行等が發行する一、五、十、五十及百弗券等の紙幣で之を港紙（カムチー）と稱し、信用があるから流通力も相當に廣く、殊に一般外國貿易には總てこの香港弗を用ひて居る。之に對し廣東在來の貨幣には廣東兩があり、銀元銅元等があつて複雜し、此種の通貨は幾多變遷を經て、現在通貨の主なるものは毫子（ハオツ）（又は毫銀）と呼ばるゝ小銀貨である。就中双毫（サンハオ）なる二十仙銀貨が殆ど全部を占めて一元銀貨はなく、この五個を以て銀一元とする十進法をとり上海のやうに大洋小洋の區別がない。これが言はゞ廣東弗（廣貨）であつて、本編に銀額を示すに元と記するのは則ちこの毫銀である。それから毫銀を基礎に廣東銀行が發行する一元及五元券があり、之を粤紙（オウチー）と呼んで居るが一般に信用なく、その流通力は港紙香港弗に遠く及ばない。そして現在支那人間の商取引は總て毫子を用ひ、その補助貨として銅貨がある狀況である。

然しこの毫子の取引には計數（輕毫）と計量（重毫）の二種があり、小口の買賣を除ては後者の重毫によつて授受が行はれて居る。これは二十仙銀貨卽ち双毫一個は廣東兩の〇・一四四に當り、詰りその五個は〇・七二兩に當つて居るから、例へば百元の支拂には毫銀七百二十匁を秤量して授受を行ふて居る。それで生絲問屋に行くと帳場の櫃臺には必ず一種變つた天秤が置かれて、例へば工場に現銀を送る際には先づ双毫を圓い竹盆に載せて、ザラ〳〵振ひ、輕量な小銀貨や贋造品を選び出してから秤量し、之を百元若くは百兩宛アンペラ包に入れて送付する有樣は隨分變つて居る。そして斯樣な慣習は小銀貨の純分が鑄造年次によつて異同がある爲めに起つたものである。

從て之を生絲取引に就ても生絲相場は香港弗で建てられ問屋は商館から絲代金を香港弗で受取り、製絲家との授受には毫銀を用ひて居るから、此の兩者の換算率には注意を怠ることが出來ない。而して香港弗を建値とする毫銀相場は一般事情から言つて、輸入季には外國品に對する支拂の爲め香港弗の需要を喚起して、香港弗は騰貴し、之に對する毫銀の打步は多くなり、反之輸出季は土產品の買付に毫銀資金の需要を促し、其他節季戰爭等の特殊事情によつて毫銀の打步は減少し時には割引を要する場合もある。だが大體に於て香港弗百弗に對し毫銀は高きは百十元から安くとも百三十元見當の間にあつて、視察當時は毫銀百二十五元の相場を示し、卽ち香港弗の八掛にあつた。そして以下換算には此率を用ふるであらう。

次に廣東の金融機關としては先づ我が正金、臺銀を始め英米佛の一流銀行が支店を持つて居るが、然し是等外國銀行は爲替を主業とする自國本位の銀行であり、また支那人經營の新式銀行も最近擡頭して來たものゝ、未だ製絲金融機關として最も重きを爲して居るものは支那在來の銀號である。現在廣東に於ける銀號は其數六十餘號を算し其八割までは製絲資金の貸付を主要業務として居る。のみならず此種銀行經營者には製絲業の中心地たる順德縣人が最も活躍し、彼等は廣東金融界の實權を掌握して居る事實に見ても、生絲の廣東金融に占むる地位の重大なることが察せられる。而して銀號の製絲資金は直接製絲家に融通するものは殆どなく、孰れ

も問屋の手を經て行はれて居る。問屋に對する放資は概して支那流の無擔保信用貸である。けれども問屋の資力は豐富なるものが多いから、這裡の關係は健實であつて、比較的間違は少いやうである。

それから外國銀行は問屋に對し生絲賣行不振の際に生絲を擔保として貸出すものがあり。或は時昌志利（グリフス・グリン）等の商館が外國銀行を利用して、商買の便宜上生絲を擔保に時價七掛見當の短期融通に當つて居るが、之を銀號に較れば固より物の數ではない。資金の需要は第五六作及一作、換言すれば操業開始の春季頃と春挽原料の仕入に當る秋季の五六作が最も旺盛で、此時期には金融は逼迫を告げ毫銀相場の昂騰するのが例である。然しながら繭が連續的に七回に亙つて出廻ることは、特に巨額の資金を一時に要することなく、且つ資金の運轉も順調なる事情にあつて、金利は比較的低廉で、通例年七、八分を示し、最高と雖も一割八分を超ゆることは稀であるといふ。

一三　生産費と原價の採算

そこで生絲の生産費に關する事項を觀察するに、斯業は繭の素質關係から繰絲工程の低率なるに加へて、割合に物價勞銀の高い地方であるから、生産費は比較的多額を要する。之に就ては固より確數を缺くが、既述各項を綜合して假りに工場の釜數四百釜、一日の生産高を一釜四十匁即ち百斤とし、年間の操業日數を三百日と見て、生絲百斤に對する生産費の見積を試みると大體次のやうである。

生絲の生産費

項目	總額	對生絲百斤	摘要
	元	元	
（家賃）	七、二〇〇	二四・〇	工場家賃月六百元の割
（繭棧）	六、九〇〇	二三・〇	（繭棧賃借料年三千元、職員苦力給料及食費二千四百元、乾燥用木炭三百擔五元替、此金千五百元）
（工費）	六九、六〇〇	二三二・〇	四百人三百日分一日一人平均五八仙替
（燃料）	一八、七五〇	六二・五	石炭一日二噸半、二五元替三百日分
（給料）	五、四六〇	一八・二	二八人、月額四百五十五元
（賄費）	二、八〇〇	九・三	同上食費、薪炭費十箇月分
（雜費）	三、〇〇〇	一〇・〇	（地方雜稅一千元、器械修繕費六百元、生絲束裝三百元、旅費通信費百元、寄附祭祀百元、村落護衛費百元、生絲乾燥用木炭五百元及點燈其他雜費三百元）
（金利）	六、〇〇〇	二〇・〇	原料繭持越平均二箇月として年一割を見積る
合計	一一九、七一〇	三九九・〇	（香港弗換算三百二十弗但購繭費を含む）

即ち前表は歐洲向十四中としての生産費はザツト四百元であるが、之に對し大體に於て二十一中は繰絲量を一釜四十五匁と看做す時は三百五十元を示し、更に此種米國向は之に再繰費を要する。この費用に就いては再繰工十乃至十五人を要し、その賃銀平均七十仙及掛員一名と見て、生絲百斤當り凡そ十五元と見積れば足るであらう。

次に生絲賣込諸掛は從來問屋によつては、その立替となるべき運賃、稅金、賣込諸費及口錢を賣價の二十五分の一として、之を絲代金より差引く習慣も行はれて居たが、然し最近のやうに絲價は低位にあり、且つ新附加稅が出來ては、上記の割合では不足を來すであらう。今之に就いて左に生絲百斤に對する諸掛を列擧しやう。

生絲百斤の賣込諸掛

（運賃）	元 一・四〇	廣東着運賃百斤　一・二五仙及艀賃一五仙
（稅金）	—	各稅目は左の如し
厘金稅	一四・三三	內地稅拾括八十斤に付き　一一、四六仙の割
廣州府稅	二・二五	廣東入市稅每包　一・八〇仙の割
砲臺稅	九・三七	八十斤七〇仙の割、當初砲臺修理の爲の臨時稅たりしも引續き徵收せらる
海關稅	一八・一〇	輸出稅、生絲百斤海關兩十兩の割
新出口稅	一八・一〇	大正十五年十月十日より徵收する內地稅
（荷造）	二・四五	商館引込賃一俵一五仙、荷造費同二元三〇仙
（賣込口錢）	一八・〇〇	賣上金額の千分の十乃至十五
合計	八四・〇〇	（香港弗換算一二五替凡そ　六七、二〇元）

前表に於て各種稅金は生絲百斤六十餘元の多額に上るのは、上海地方の如く繭に對する厘金稅がないからで、繭絲に對する稅金の總負擔額は之を上海地方に對比すれば寧ろ稍少額なるを見る。而して生絲の厘金稅には問屋の存在する沙基に土絲厘廠なる徵收局が設けられ、廣東に入荷せる生絲は先づ此處で秤量、課稅を受けてから問屋の倉庫に搬入せられ、後者の海關稅及新附加稅は生絲輸出の際海關及內地稅徵收局に納付すべきものである。卽ち生絲百斤に對する生產諸費及賣込諸掛は合せて四百八十三元（香港弗三八七弗）となり、之に對して屑物の收入は勿論市價の變動によつて異るが、生絲百斤に對し大凡次のやうである。

生絲百斤當り副收入

品目	生產高	單價	銀額
生皮苧	六〇斤	一擔一五〇・〇〇元替	九〇元
蛹及蛹視	五〇〇斤	同　一・八〇	九元
選出屑繭	二〇斤	同　三〇・〇〇	六元
揚繭	二〇斤	同　一五・〇〇	三元
合計			一〇八元

仍て前記總費用より之を差引く時は三七五元となり、その香港弗換算は三百弗を示すが故に廣東絲（準優物）百斤に對する屑物收入を差引きたる總費用は凡そ三百弗と見て大過あるまい。而して視察當時第七作の繭相場は繭本廣貨千三四百元を唱へて居たから、その平均繭本港紙千八十弗を原料代價と見れば、第七作の生絲原價は廣東着千三百八十弗となる勘定である。

一四　製絲家の資力と營業成績

製絲家と言ふも廣東では個人經營は甚だ稀で、多くは數名の出資者からなる支那流の合資組織によつて居る。其資本金は三四萬元から最高二十萬元まで〻通例十萬元前後のものが最も多數を占め、概して其基礎は健實ではないから損失すれば解體して新に組合を作り、年々關係者の離合集散の行はるゝことは上海と同樣である。而して組合の責任者たる所謂製絲家は大抵工場の管理は息子や番頭(司理)に任せて廣東に常住し、生絲の賣込、資金の調達から海外需要の趨向を察して繰絲すべき生絲の種類の指定乃至購繭の指圖に當つて居る。然し製絲家は概して保守的である。曾て廣東絲に新面目を加へた彼の再繰式採用の如きも、我三井洋行生絲部員の懇なる勸誘によつて、漸く一工場に試みられたるにその端を發し、始めて其の刷新を見たのであつた。更にまた當業者の進取的精神に缺けて居ることは最近廣東絲の需要變遷に當面して、之に適應すべき道を見出し難く、彼等は尠からず苦境に陷つて居る。

之を最近數箇年來の業界に見るに、大正八年頃から十一年に至る期間は正しく廣東絲の黃金期であつた。それは當時米國市場に於て廣東縮緬(カントンクレープ)の流行と共に偶々再繰絲採用による絲質の向上は米國機業家の意に投じて廣東絲に對し一層の期待が繫がれ、漸次我が信州物の用途に喰込まんとする情勢を示した。然るに其後所謂信州物の品位は向上する一方日米爲替の低落ては事實は著しく日本絲を割安くならしめて、廣東絲は尠からずその牽制を受けねばならなかつた。揭てゝ流行の變遷も加つて最近廣東絲の米國需要は往時に較べて秋風落莫の感なきを得ない。現に廣東絲と信州上一番の絲價を比較するに、大正十二年度に於て一封度に就き三〇仙乃至九〇仙の値開を示したものが十五年度に至つては一弗五十仙から一弗九十仙といふ開きを示し之を和斤百斤の値鞘に於て、從前の約百五十圓方から最近は四百圓といふ隔りを見せて居る。斯樣な大きい値開は最近銀塊相場の低落によつて幾分緩和されて居るが、それにしても最近低廉なる日本絲に對して、斯樣な値鞘に置かれて居る爲め、絲價は常に低位に動いて居る。之に對して繭の値段がその割合に應じて低落すれば、採算も出來やうが、繭價が斯く合理的に低落することの困難なことは、本邦と同樣である、然るが故に最近兩三年來製絲家の營業成績は概ね不良である。今之に就いて各事業年度の成績を見ると大體次のやうである。

大正十二年度　前三個年を通じ大體好成績を告げた斯業は本年度に入つても依然好況を續けたが、適々九月初旬本邦關東の大震災による横濱市場の潰滅は廣東市場をして空前の活況を呈せしめ、絲價は千九百元から一躍二千四百六十元の高値に飛び上り、折柄第五六作の繭價も素晴らしい暴騰を來した。然るにその後横濱市場の恢復に連れて絲價は一落千丈の概を示し期末千三百五十元に低落し、破產者が頻出するの慘狀であつた。

大正十三年度　第二三作出廻期に於て日本絲の大暴落の餘波を受けて、絲價は四月上旬千七百五十元から六月下旬には最低千七十元に墜落し、七月から八月に掛け約一箇月半に亙り、沙面使用人の罷業は一時生絲取引を杜絕せしめた。續て十月中旬には廣東市商團軍と政府軍の衝突に激

烈なる市街戰を演じて人心恟々たる事件の續發に、當業者は到底成績を擧げることが出來なかつた。然し前年度に較れば絲價は季間最低千七十元最高千五百元の間にあつて稍無難であつた。

大正十四年度　端境期から新繭時に掛けて前述製絲工女の大罷業が勃發して當業者は之に對抗するに工場閉塞、繭の不買同盟を以てする大騷が行はれた。それが解決すると間もなく六月初旬上海事件から有名な沙面事件を惹起し、香港封鎖が始つて以來、廣東絲は失費を忍びて上海市場に送つて、之を賣却せねばならなかつた。しかも絲價は新絲千二百四十元に生れ、漸落歩調を辿り、季末には遂に千元臺を破つて最低九百七十元を示せる狀況であつたから、當業者の窮狀は察するまでもなかつた。

大正十五年度　香港封鎖、沙面の罷業は執拗にも前期より依然繼續されて、漸く十月十日に至つて解決されたが、絲價は季初の千三十元より稍上向きたるも、僅に千百二三十元に引返したるに止り、之に對する繭仕入は概ね採算原價を超へて此期も亦損失を免れ難い狀態であつた。

斯樣に最近數年來廣東絲は絲質向上の跡なきに加へて米國に於ける流行の變遷による需要の衰退と對內的には色々な事件の續發によつて著しく苦境に陷り、僅に根柢ある歐洲向需要によつて事なきを得て居る現狀と見られる。然し之が爲めに斯業が直ちに著しい衰退傾向を認めないことは、前回にも述べた通り斯業の經營組織に於て資力ある問屋が製絲經營の一組合員として後楯を爲して居ることを看逎すことが出來ないと同時に、最近不振なる局面の轉換を期するには繭質の改良と共に、當業者は其經營法若くは繰絲技術の上に何等か一轉機を見出さねばならぬ必要に迫られ居る。

一五　手繰及足踏製絲業

最近廣東地方に於ける座繰絲の輸出は殆ど言ふに足らぬ數量であるが、駛門絲と言つて地遣向には相當盛に需要されて居る。そして之には手繰絲(手絙)と足踏(踏絙)との二種がある。手繰は最も原始的方法であるが、今尙順德縣下水藤勁流地方及南海縣下九江甘竹地方に於て副業として命脈を繫いで居る生業である。この繰絲法は焜爐の上に鐵製又は素燒の繰鍋を据へ、鍋の上には其一端に竹轆若くは捲轆と稱する軸が渡してある。この軸は竹を以つて直徑三寸二分長さ二寸四分の圓筒形に作つたコロを木架に附けたものである。枠は本邦在來の「かなぐり」枠と同樣X字形の腕木の四端に約五寸幅の橫木を附けて枠角とし、其周圍は九尺二寸之を地上八寸位の高さに支柱で掛け、手にて廻轉する仕組で、撚懸器も絡交裝置もない頗る簡單な構造である。操作は竹箸を持つて索緒し、緒絲は先づ椰子實の殼に穴を穿てる集緒孔を通つて前記捲轆に一と捲きしたる後、左手に枠を回轉し、右手で絡交を操つて居る。之に幾分改良を加へたものは繰枠の前に針金のついた木架を設け、之に繩を繰枠に連結して左右に動く簡單な絡交裝置を持つて居る。

從て原料繭は繭市や工場から出る選出繭を用ひて、多くは老婦が繰絲に當り、絲は著しく暗褐色を呈し纖度の不整は言ふまでもないが、大體二十五乃至三十デニールの間にある。此絲は一束約五十匁、每十匁の値段は六十仙から一元見當で機屋に買はれて紗(紹)及綢の原絲に用ひられ

て居る。此外南海縣九江地方から繭皮又は絲皮Pujimmといふ特殊品の產出がある。これは繭の毛羽から外層に亙る優良部を大枠に繰つたもので、纖度の太いことは麻絲の如く色澤も暗褐色を呈して居る。價格は百斤百元乃至百七十元で主として印度向に需要されて居る。それから水藤龍山等の西樵地方に於ては繭紗といつて二等繭から手絁によつて繭皮同樣な絲を繰絲し、內地及印度向に充てゝ居るが、此地方の製絲工場に於ても此種工女を置いて、選出繭や揚繭を以て繭紗を作るものがあり、其他農家では屑繭、出殼繭等から紬絲を製造するなど廢繭の利用は多樣に亙つて普く利用されて居る。

足踏製絲卽ち踹絁は前者に比して一段進步せるもので、三角洲一帶に亙つて廣く用ひられて居る。大體の構造は器械製絲工場の繰絲法に則つたもので、繰鍋の下に焜爐を据へ、工業組織になると汽罐を用ひて居るものもある。大枠右端の心棒から綱を吊して地上の踏板に結び、また左端の摺車を通して簡單なる絡交裝置を設けて居る。繰絲の狀況は粒付數に殆ど頓着なく二十乃至三十粒を以てし、自然纖度の不齊は免れ難く、且つ繰湯の取換も甚だ不充分で著しく色澤を損し、此種生絲は各地絲市に出廻り地遺向を主とするも、一部は輸出向となるものもあつて、廣東市場では之をMarket Cargoと稱し、その品位はNative Best No. 3格に賣買せられ一名七里絲と呼ばれて居る。この足踏製絲業は農家が自己の產繭を以て繰絲する者もあれば、數臺を据へ二等繭を買入れて營業する者もあり、更に大規模なものになると五六十乃至二百臺を備へて工場組織を有し、現に最大製絲業地容桂地方の如き此種工場は二十四箇所を下らない。繰絲量は一日一人凡そ八十匁に達し、絲量は生絲百斤に乾繭七八百斤を要すといふ。從て生產費の如き一擔百五六十元にて足り、設備費も亦繰絲器械一臺凡そ十元に過ぎないから、薄資者の經營するもの多く自然營業日數の如きも、繭及絲の相場如何により不定である。然し優良なる工場の製品は器械絲の裾物として取扱はれて居る。

一六　座繰絲の取引

斯樣に廣東地方の座繰業は既に器械製絲業が全般に發達した爲めに、他省と違ひ特に座繰業地として見るべきものがなく、大體本邦と同樣二等繭其他廢繭の利用法として存在して居る狀況であり、各種座繰絲は絲市又は絲墟と稱する市場に於て賣買されて居る。絲市は桂州を始め三角洲內に二十餘市を算へ、桑市、蠶種市と同樣に鄕族又は個人の所有に係り、年々入札によつて、最高入札者に市場を賃貸しその額は市場の大小により通例年六十元乃至千元の間にある。この場內には廣く臺が竝置されて生絲取引の便に供し、一隅に秤場を設けて秤手及書記を置いて居る。更に場內空地に店舗を附設し、之を兩替屋に貸與し、買人をして卽時絲代支拂の便に備へ、また經紀なる仲介人があつて、これは絲市に年五元乃至十元を納めて、取引の媒介を業として居る。絲市は繭市と異つて年中營業をして居るが、その取引日は一、四、七若くは二、五、八、或は三、六、九日と定められて月に九回開かれ、駛門絲を始め絲皮、生皮苧に至るまで出廻るばかりでなく、紗綢の如き織物も此處に於て取引されて居る。取引慣習に就ては買人は賣人に對し絲價の百分

の二を値引し、その徴收額の二割を絲市に納め八割を仲介人に與へて居る。更にまた買人側は生絲百斤に對し二斤の芥斤を徴し、之を以て生絲の結束及輸送に充て、絲市によつては之に代ゆるに絲代金百元に就き七十仙を徴る處もある。

座繰絲の絲價は勿論市況により異るが、通例細絲は十匁九十仙乃至一元、粗絲六七十仙及水結(生皮苧)一斤一元五六十仙を示し、年間の取引額は桂州の最大市に於て二百數十萬元に達し小なるは十五萬元、全體を通じては約一千萬元に達すと言はれて居る。夫に絲市に於ける絹織物の取引も相當盛に行れ、大絲市に於ては一日の取引額三千元に上る者もあり、全市織物の取引總額は千五百萬乃至二千萬元に達すといふ。そしてこの取引には絲市は一定に就き買人より一仙及賣人から一仙五厘を徴收する慣習である。

絲市一覽表

所在地	取引日	取引年額	摘要
順德桂州同安	一、四、七日	二六〇—二七〇(萬元)	取引漸增の傾向
同　同桂	一、四、七	三—四〇	取引漸次減少の傾向
同　水藤	三、六、九	五—六〇	足踏座繰絲多數を占む
同　勒流	一、四、七	三—四〇	手繰絲及絹織物も出廻る
同　樂從	二、五、八	三—四〇	足踏座繰絲多し
同　陳村	一、四、七		
同龍江經綸	二、五、八	四—五〇	別に生絲店十餘家あり
同　龍山	三、六、九	一〇〇	絹織物、出穀繭及生皮苧等も登市
同　甘竹	二、五、八	一〇	手繰絲は近時漸減
南海　官山	三、六、九	五—六〇	足踏絲多數を占む
同　大岸	—	一〇	同　上
同　華夏	—	一〇	同　上
同　民樂	二、五、八	一〇〇	絹織物の取引額約二百萬元其取引日は四、七、十日
同　沙頭	一、四、七	—	近時取引額漸減
同　吉利	二、五、八	一〇	足踏座繰絲多し
同　廣綸泰	三、六、九	二〇	近時手繰足踏共漸減す
香山　小欖	二、五、八	二—三〇	足踏座繰絲多し
同　古鎭	—	一〇	足踏座繰絲多し

其他順德縣下に龍譚、倫敎、杏壇、馬霽及江尾等にも存在し其數は三十個所を算し總取引年額は千五百萬乃至二千萬元と推せられる。

第六章　生絲及屑物貿易

一　廣東絲の需給

抑廣東は十五世紀の初め歐人の東漸が支那海に入つてから、早くも支那貿易の門戸として西歐諸國との通商が始まり、殊にポルトガル人の占據する澳門（マカオ）との貿易は頗る盛大であつた。しかも其頃よりして生絲並に茶は極東の主要品として西歐に紹介されたのであつた。從て廣東の生絲貿易は我が横濱より遙に古い歴史を持つて居ることは言ふまでもない。次いで沙面（シャーメン）の民留地が設けられてから廣東絲はこの麗はしい街を取引市場として居ることは已に述べた通りである。而して廣東に集散する生絲は之を上海市場が奥地は四川省から北は滿州の柞蠶絲を包括して居る狀況に較れば、僅に廣東、廣西兩省を範圍とするに過ぎない。加へて座繰絲の輸出は言ふに足らぬ數量であるから、生絲の供給地と言へば孰れも廣東から小蒸汽で一日以内にある三角洲一帶に限られて居る。そして此地方は既述の如く物騷であるから、生絲は日々專用の絲艇（シルクボート）によつて廣東に送られ、工場には殆どストツクといふものがない。この絲艇といふのはテンダーを以て大きな屋形船のやうな民船を曳いて行くもので、之を經營する運輸會社は孰れも問屋の出資關係になつて居る。テンダーの乘組員は十人位で舵機及機關係を除いては皆嚴めしく武裝し、階上には機關銃二三挺を据へて四邊を見張りながら進行する樣子は如何にも物々しい。そして乘組員には萬一殉職の如き場合には妻子の保證が與へられて居る。一方また海賊に對しては當業者團體から金員を貢ぐなど、用意周到を極めて居るものゝ如く、匪賊横行の時と雖も絲艇が之に見舞はれることは殆どなく、廣東から繭市や繭棧に送る巨額の購繭資金や生絲の輸送を始め、通信から蠶絲關係者の往來は皆この絲艇によつて、事なきを得て居るのである。

それからまた繭の出廻は上海地方の春蠶一期と違ひ、年七回に亙つて出廻るから、各作の蠶況は生絲供給の上には夫程の重要性を持たない。それよりも市場の入荷に關係するものは洪水である。これは英國を攻擊する宣傳文に「帝國主義の害毒は怪獸洪水よりも甚し」などゝ洪水を持ち出す程で、廣東地方は雨季に天候が狂ふと直ちに氾濫して慘膽たる狀況を來すことがある。尤も生絲及繭の運搬に支障を來すやうな大洪水は頻繁にあるものではない。然しながら生絲の供給はその内部關係に就て歐洲向は六角枠（周圍の長さ四呎）、米國向は再繰絲從前は四角枠二呎四吋）と兩者需要の性質を異にして居ることは製絲家が固より其需要狀況を觀察して繰絲方針を決するとは言へ、暫々その均衡を失し、時として一方に供給の不足を告げ、絲價の變動を來すことが尠くないとは言へない。そこで歐米向需要の消長を見るに歐洲戰爭前米國向輸出は其歐洲向に對し僅に二分の一に過ぎなかつたが、戰時歐洲向の減少に反し、米國向は遽かに增加を來し、遂に前者を凌駕し、戰後五個年間の平均に於ては歐洲向に對し二倍に當る數量を米國へ輸出して兩者の地位は轉倒するに至り、就中大正十年度の如きは歐洲向一一、七九八俵に比し

米國向は四一、八三一俵の記錄を示した。然るに最近この趨勢は再轉して漸次歐洲向輸出の恢復を告げ、殊に最近歐洲向輸出は顯著なるものがある。而して廣東絲の需要を左右する共用途を見るに、獨特なる絲質よりして所謂廣東縮緬を始め、ベルベット及びショーセから一般粗製品の原料として半練品或は絹綿交織等下級品方面に需要されて居る。

二　輸出商館

現在沙面に於て生絲を取扱ふ商館は英商八、佛商七、日商三、伊商二及瑞米各一商と合計二十二商の多きを算して居るのは、通例一般輸出入貿易商が生絲を Side Business として取扱つて居るからで、生絲專門商とも見るべきは僅に我が日本生絲、倫泰洋行（ボーマゼット）位のものである。それに歐洲筋とも言ふべきものは古くから廣東貿易に着手して海外機業家と密接な連絡の下に口錢取を主要業務として居るから、自然多數を占めて居る次第である。而して歐洲筋の顏觸にも變遷があり、戰前までは獨逸系商館の活躍は相當見るべきものがあつたが、是等は歐戰勃發以來閉熄し、今でも沙面に獨人の營業は禁じられて居る。續て有力なる英商怡和（ジヤーデイン）泰和（レイス）洋行等の活動も衰へ、最近では佛商信孚（ヴヴイヤ）洋行が最も活躍して居る。次で米國筋とも言ふべきものを見るに、廣東絲の米國向躍進は歐洲戰爭からで、之に伴ひ紐育の支那絲專門の機業家たるイーグル關係の商社は暫々目覺しい活躍振りを示したが、その活動は兎角線香花火的に終り、現在米人經營としては殆ど言ふべきものがない。此間に處して邦商の米國向取扱は何しろ米國市場が日本絲の獨舞臺たる立場から、當然活動を有利ならしめ、最近三井、日本生絲を始め日本棉花等邦商が廣東に於て米國向取引に最も重きを爲して居る點は看逃すことが出來ない。

商館は多くは英租界に散在し、工部局に對し營業稅、倉庫稅年各五十元と、生絲一俵に付き十仙宛の附加稅を納めて居る。商館の業務や營業振りは特に言ふべきことがないが、出來るだけ業務の手數を省約すべく、その買入條件は總て船積渡 F.o.b. により、船積までの處理は賣方たる問屋の處辨に歸せしめて居るから、生絲檢査を除ては、業務に世話はない。それから商館は上海同樣に皆買辨 Comprador を置き、之を使用せぬのは三井洋行ぐらいのものである。然し買辨といふも、此種商館のそれは顧問格とも見るべきもので、商館は必らずしも買辨の手を經て生絲を買はねばならぬことはなく、唯買辨の手を通じたる一個年の取扱高に對し、賣手たる問屋は賣價の二千分の三、卽ち千元に付き一元五十仙の手數料を支拂ひ、また商館に於ける生絲檢査の供試に生ずる廢絲は買辨の收入とし、その大部は之を輩下の使用人に分配する慣習である。買辨は通例問屋の主人若くはブローカアーが勤め、一人にて二三商館を受持つものがあり、詰り商館が買辨を置くの利便は之によつて取引の圓滑を計ると共に、市況の探訪、各作の蠶況乃至在荷の調査等に資する點にある。試に大正十四年度に於ける廣東生絲輸出商竝に其の取引高を示すと左表の如くである（大正十四年五月一日より同十五年四月末日に終る）（單位俵）

	歐洲向	其他	米國向	計
安ーノルド利（英）	一、三七七	—	二、九三二	四、三九〇

倫泰（ポヤー、マゼット）（佛）	一、七〇〇	—	一、七〇〇	—	—
バーカード、アミタニ（伊）	—	—	—	—	—
カツサー、ジエー（佛）	二、〇八四	—	二、〇八四	—	—
クレリシ、ビドネ（伊）	四九三	—	四九三	—	—
コントアール、ダツシヤ（佛）	二、四九七	四八	三一〇	—	—
時泰（ジエネラル、シルク）（米）	—	—	二、八五五	三、三五三	三、三五三
志利（ゲリシ、ドラバード）（佛）	一、四二二	—	二、七四二	一、三二〇	一、三二〇
時昌（グリフス）（英）	三、六〇七	—	五、五五五	一、九四八	一、九四八
泰和（ホルヨーク、メツセー）（英）	九七〇	一四三	三、〇〇四	一、八九一	一、八九一
日本棉花（日）	二〇	—	六三五	六一五	六一五
怡和（英）	七四五	—	一、一二五	三八〇	三八〇
永利（英）	七五四	—	一、九一四	一、一六〇	一、一六〇
路利（英）	—	—	—	—	—
土信孚（佛）	八、三四七	五	一七、〇〇七	八、六五五	八、六五五
三井（日）	一、八八五	—	八、〇一九	六、一三四	六、一三四
日本生絲（日）	一、〇四七	—	二、七三七	一、六九〇	一、六九〇
ポアサア（佛）	一、九二〇	—	一、九二〇	—	—
バスキー（英）	三、四三四	—	五、〇六九	一、六三五	—
サンバンニー（佛）	五二〇	—	五二〇	—	—
ベリンガー和（瑞）	九六五	—	一、〇八〇	一二〇	—
其他	一、三一〇	—	一、三一〇	—	—
合計	三五、〇九七	一九六	六七、四三六	三二、一四三	三、三一〇

斯樣に廣東には所謂マバラ筋が多いから、年々その顏觸に若干の移動を見て居る。現に同期の如きも新手に在支米人の最大商社愼昌洋行（フンダーソンヤー）が加はつて居るが、先づ生絲商の主なるものは全數の一半位で、左に是等個々の商館に就て述べて見よう。

安利（英）　從前獨英人の合辦による商社、一九一五年から英人の手に移り沙面屈指の貿易商として生絲は一九一七年から着手し、殊に米國向には相當活動して居る。

倫泰（英）　多年生絲を專門に取扱ひ、佛國向の大手筋である。

的唄（英）　沙面の老舗であるが、生絲よりも寧ろ屑絲の大手筋である。

志利（佛）　沙面の古顏且つ最大の生絲商として活躍したが最近は稍不振氣味である。

時泰（米）　一九一五年開業、米國向として一時目覺しき活動を示し、今尙米國向の大手筋である。

時昌（英）　沙面最古の生絲老舗として經營は堅實であると言はれて居る。

永利（英）　印度人の巨商と英人の合辦で一時歐洲向大手筋として活動したるも最近は不振。

信孚（英）　最近數年來歐米向共其取扱高は第一位を占め、廣東絲のみでなく嶄然支那絲の最大手筋として、此の右に出るものはない。邦商原輸出店及江商の代理を營むとも聞いて居る。

泰和（英）　怡和と共に英商の双璧とも言ふべく其取扱商は一時第一位に上つたこともあつたが、戰後蹉跌以來最近の活動は遠く往時には及ばない。

怡和(英)　支那に於ける第一位の英商、一般貿易及船舶業に亙り活躍は顯著であるが、最近生絲の取扱は退嬰して居る。

三　問屋及ブロカアー

上海地方と異つて製絲業が三角洲の田舍に散在して居ることは自然廣東に本邦と略ぼ同樣な問屋の發達を遂げ之を絲庄と稱し、現在その數は左記二十八店を算し、其資本金及取扱推算量を擧げれば左表の如し。

店名	資本金	取扱高推算
慶記	一〇・〇	三、四〇〇
和經	一・二	六、〇〇〇
永和	二〇・〇	八、〇〇〇
寶經昌	八・〇	三、五〇〇
祥泰	四・〇	六〇〇
公興	七・〇	二、〇〇〇
厚經	四・〇	一、五〇〇
仁隆	四・〇	一、五〇〇
協和興	二〇・〇	八、〇〇〇
經盛綸	一〇・〇	二、五〇〇
慶隆興	一〇・〇	三、〇〇〇
致和祥	一・五	三〇〇
協成昌	八・〇	一、八〇〇
和誠興	五・〇	一、五〇〇

店名	資本金 萬兩	取扱高推算 俵
興昌	一〇・〇	二、三〇〇
阜經	八・〇	一、五〇〇
均和祥	一〇・〇	四、六〇〇
隆記	八・〇	二、八〇〇
仁榮	七・〇	二、〇〇〇
裕奥祥	一〇・〇	三、八〇〇
天寶福	一〇・〇	四、二〇〇
生記	八・〇	八〇〇
廣永福	一五・〇	三、七〇〇
東興隆	八・〇	一、三〇〇
厚德祥	六・〇	一、四〇〇
綸祥	五・〇	一、三〇〇
永泰隆	一五・〇	一、二五〇

是等の問屋は前述の如く殆ど皆沙面に程遠からぬ新興大街又は西興大街に一廓を爲して、問屋街を形づくつて居ることは、物騷な土地柄、自衞上集つたものであるが、生絲取引に便とする點が尠くない。問屋の構へは高い煉瓦壁の中央に設けられた石磚門を入ると、直ぐ天井の高い室内の奥に帳場が設けられ、そこには神位が祀られてあり、隣室には應接間や居室がある。それから通りを距てゝ向側に二三層の煉瓦建倉庫を構へ、階上の四圍には棚を設けて、工場から來る括毎の生絲は棚の上に收められて居る。

問屋の組織は資產家からなる支那流の合資經營が多い。從て公稱資本金は前表最高二十萬兩に過ぎないが、無限責任として信用は頗る厚いと言はれ、生絲の賣込や製絲金融を一手に引受けて居る。のみならず工場の有力なる一組合員として製絲經營の衡に當り、斯業の實權は寧ろ彼等の掌中にある狀態である。即ち彼等の投資は一工場に集中するを避けて、之を取引關係ある諸工場に分散し、その安全を期して居る譯で、一般に薄資にして信用なき製絲家が近頃の不況に處して、よく事業を繼續し得る所以のものは、中間機關として此種有力なる問屋が存在して居るからである。

而して問屋には皆ブロカアーがあつて生絲の賣込に當り、全體では二十數人を算して居る。これは横濱に於ける問屋の賣子と見るべきもので、問屋の使用人として月給を貰ふものや純益の分配に與る歩合制度によるもの、或はまた生絲一俵に付き約三十仙位の口錢によつて居るも

の等がある。然しながら商館との生絲賣買に當つては直接契約の當事者として、問屋を代表して責任を負ふて居るから一般にブロカアーと呼んで居る。之が爲めに彼等は商館と問屋の間に介して所謂下駄を覆くといふやうな惡行爲も行はれるらしいが、通例ブロカーとなるには英語を解し問屋經營者の血族關係にあるものが多い。尙又問屋に就いては前述の如く絲代金の授受は商館からは香港弗で受取り、製絲家には毫銀を以て支拂ふ慣習であるから、例へば賣値千二百弗に對する問屋の手取は毫銀換算一二五元替、千三百五十元となり、その換差による差益百五十元に對する問屋と荷主との處分關係乃至その內幕に至つては、外間からは容易に窺知することが出來ない。

四　生絲の品位及格付

前述の如く廣東絲は歐洲向大枠絲と米國向再繰絲New styleに分たれ、之を纖度別にして歐洲向は「十四中」が大部を占め、外に少許の「十二中」があり、米國向は「十五中」を主とし「二十一中」及「二十四中」の極太品がザット二割見當を占めて居る。但し後者の「二十四中」は 23/25 に一段と範圍を擴めた 12/26 として居る。そして廣東では纖度を表はすに、支那固有の數字たる「一二三×〆⊥≒≒文十」を利用し、例へば「十四中」を示すに 𠀋「十五中」を本或は「二十四中」を 𠀋 と書くのは流石は文字の國である。

絲價に對する纖度の關係は再繰絲十五中を標準としてその高低を見るに、通例細十二中は百弗高、十四中は再繰費に相當する十元位開き、極太品に至つて二十一中は百元、二十四中は百元乃至百五十元方の安値にある。それは極太品になると、原料には劣等繭を使用する傾があつて、皆XX Crack. A格以下の裾物である。

而して廣東絲は最近殆ど皆原標取引となり、商館の所謂私標なるものは跡を絕てる狀況にあるから、格付なるものの拘束力は餘程失つて來た。そして其格付も市場に共通せるものはなく各商館が銘々自家用の格付表を持つて居るが、之に就て米國向は大正十年前後再繰絲に轉化の當時は直繰式たる舊格は亂れて、新式絲の格差は殆ど平等のものとなり、唯從來の格合に照らして一二十元の高下を示すに過ぎなかつた。然るに時日の經過に伴つて漸次其間に格付を生じ、最近米國向格付は大體次のやうである。

格名	代表的商標
(1) Grand XX	Anchor, Tsungwai Hung, Win Cheong Sing, Tai Ho Sang.
(2) XX Crack, Superior	Chung Sun Hung, Chun Sun Wo, Kwong Cheong, Ming Choong, Red Anchor,
(3) XX Crack, good No. 1	Kai Sing Cheong, Koon Kee, White pearl
(4) XX Crack, good.	D'ble Chinese girl, D'ble Emper girl, D'ble Swallow, Flying Tiger, Hing Kee
(5) XX Crack,	AXE, Chop, AXE & Anchor, Cawel, Cheueng King, Chung Kee, Cous & Pagoda

卽ち最優格に屬す工場は僅に三工場で、その頭字をとつて通例AWTと言つて居るが、最近之

に大和生絲廠が加はり、(4)格に比し、凡そ二百弗高の見當にある。而して最も多い(4)格は全數の三分の一を占め、之に次ぎて(2)(3)(5)格の順序である、更に歐洲向格付は前者の格合に照し一般に左記の如く分けて居る。

Grand Extra
Small Extra
(Kai Shing Chong grade, Special Best No 1, Star grade)
Best No 1. good
Best No 1.

前記に於ける標準格は Best No. 1 good にして、Small Extra は之より百七八十弗高を示し、右括弧内の格は標準格よりも二三十弗高のもので、例へば Star grade といふのは前年の罷業以來 Best No. 1 good が一般に纖度其他が著しく劣化せる際に某館のスター印を附せるものが、特に優良であつたから、市場にスターグレードなるものが出來たといふやうに、廣東市場に於ける格付といふものは全體に共通するものではない。

五　生絲取引慣習

廣東市場に於ける輸出商からなる廣東外人生絲協會 Foreign Silk Association of Canton は生絲取引に關する規約 By-Laws を設けて問屋との間に取引の紛爭を避けて居るから、取引慣習に就いては先づその規約から見て行くことが便利であらう。

契約 Contract.　生絲又は屑絲を某月積若くば某々月積として賣買するものゝ引渡時期は特に契約に名記せざる限り、其定められたる月内に引渡を了するものとす。但し某々月積と一箇月以上に亙りたるものは、各月に等分して之を引渡すことを得。

約定品の受渡 On Contract for future delivery.　先約定によつて引込みたる生絲の品質が買人の意に適はずして、標準格に不合格たることが明白となりたる場合には、賣人は他の荷口を以て之が取替を爲さざる可らず。其取替は商館の特定されたる場合を除き、契約期間内に行ふことを要す。但し商標の特定せられたるものに對しては、買人は製絲工場をして取替を爲し得る相當の猶豫期間を與ふるものとす。

買人は生絲を月の特定せる汽船に積載すべく引渡を希望するものは、豫め其旨を契約面に記載するを要す。

生絲の製造が内地に於ける火災、盜難、洪水、罷業若くは擾亂等により遲延し、其事故が不可抗力と看做された場合買人は當該生絲の受渡に相當の猶豫期限を與へざるべからず。賣人は買人より請求する時は遲延事由の證明を提供するを要す。

契約は賣買當事者によつて支障なく履行せざるべからず、若しも兩者の間に解決し能はざる紛爭を惹起したる時は之を仲裁に附すべく、委員に照會するものとす。

受渡 Delivery.　約定品の一部として月の末日に引渡されたる荷口はたとへ該月に船積することを能はずと雖も、該月内に引渡せるものと看做す。

中札 Chop Ticket.　器械絲は總て各綛に工場名を記せる小票 Special Chop Ticket を挿入せざる可ら

す。若し各綛に中札の挿入なき荷口に對しては、買人は之が取替を主張することを得。

現物賣買 Ready Silk. 現物取引に在りては生絲の品質が標準格に合格せずとも、賣人は之が取替を爲すことを要せず。但し買人が品質に缺點あるに拘らず、之を地遣向に處分せんと希望する場合には買人をして電報を以て內地の商人に交渉するに足る時日を與へるものとす。

現物は契約成立の日より十日以內に生絲を商館に引込むべきものとす。

買賣契約の締結 Purchases. 商談成立に對し買人又は賣人より買賣契約書の作製を要求することを得。左もなくば兩者立會の下に生絲買入簿 Purchase Book. に記入したる後署名するものとす。

電貸借 Offers 總べて電貸借は賣買兩者により記帳署名すべきものとす。其日限は定められたる日の午後四時迄效力を有す。但し香港廣東間若くは海底電線に事故ありたる場合は之に相當する期間の延長を許すべし。

生絲の乾燥 Drying. 倉庫に引込みたる生絲は庫內に火鉢を置き一夜間之を乾燥す。但し天候著しく濕氣を帶べる際は之を二夜間とす。

保險 Insurance 檢査の爲め商館の倉庫に引込みたる生絲の火災による損失に關し爭議を防ぐ爲め、買賣兩者 Foreign & Native Merchants は左記各項を承諾す。

(一) 商館の要求あるに非ざれば、生絲を商館の倉庫に引込むことを得ず。

(二) 倉庫に引込みたる生絲に對し、商館は契約値段若くは市價の兩者孰れか其の高價なる方の金額に該當する火災保險を附するものとす。

(三) 檢査の結果品質不良の爲め破談となりたる生絲に就き火災に對する商館の責任は四十八時間限りとす。該期間を過ぎたる生絲の責任は全部賣人に歸するを以て、賣人は該期間內に之を引戻すべし。

(四) 外國海上保險證券によるが如く、沙面より香港向河船に積込む際に於ける危險は商館によつて之を保險に附すべし。

(五) 生絲の荷造費、輸出稅、艀賃及苦力賃其他沙面の倉庫より河船の船積込に要する諸掛は之を賣人より支拂ふべきものとす。

絲代金の授受 Payments. 生絲代金の支拂代金の支拂日は直ぐ次便の汽船が香港を出航せる日と定む。

破談引戻品 Reject Lots 所謂ペケ品は速刻賣人に返却さるべきものとす。同時に買人は一旦ペケとなりたるものを任意留め置くことを得ず。

仲裁 Arbitration. 會員若くは賣人より書面を以て請求ありたる時は支那人組合及外人協會の委員會は各仲裁者を選定す。該仲裁者によつて解決する能はざる場合は兩委員會の會長より一名の審判者を任命し、その裁斷を以て終結とす。

繫爭者は前記兩組合の任命せる仲裁者に對しては異議を申立つることを得。仲裁者として受任する者なき場合には兩組合の會長は直ちに一名の審判者を任命し、その裁斷を以て終結とす。

仲裁手數料 Fees 仲裁に要する手數料は一俵に付き五弗の割合とし、一口三十弗を限度とす。

該手數料は繫爭者の一方若くは相方が負擔すべきかに就いては、仲裁者之を決定す。手數料の三分の一は兩組合の收入に歸し、三分の二は仲裁者の所得とす。

不正製品 Frudulent Reeling. 商館に引込みたる生絲の荷口に就いて不正なる繰絲によりたるものと認められたる簾ある時は該生絲を留め置きて、之を前記兩組合の選定せる技術家の檢定に委

せざる可らず、不正品に對しては生絲一俵に付き二百弗の罰金を課し且賣人をして之が取替を爲さしむるものとす、賣人が適當なる取替を爲さざる時は買人は隨意他店より之が補給を爲し、之によつて生じたる買入價格の差金に對しては賣人が其責に任ずるものとす。賣人の責任は再び引渡されたる生絲が檢査によつて適當と認められ、看貫を了したる後始めて解除さるべきものとす。

尙前項に關し左記罰則を添加す。

織度に就いては各綛の上部及底部が中間部の織度と一致せざる場合卽ち綛二十四本の平均織度に對し、上底兩部か中間部より五デニール以上太きもの、十二本以上を含みたるものある時は賣人は總荷口に對し、一俵に付き二百弗の割合を以て罰金を支拂はざる可らず。而して此種不正品が買人によつて發見されたる場合には支那人及外人兩組合は專門家を任命して其實否を檢査し、生絲は罰金の支拂はるゝ迄買人の手に保管さるゝものとす。罰金の支拂はれたる時は生絲を賣人に返還すると同時に買人の請求あれば、賣人は之に對し充分なる取替を爲さざる可らず。罰金は之を兩組合に等分に分配して會費に充當するものとす。

事故 Disputes　廣東の生絲貿易商に對して一商館のみならず、全體に關する事件、例へば苦力の罷業或は問屋の生絲引渡遲延の如き爭議及事故其他面倒の起りたる場合には商館は協會委員に交渉することなくして、單獨解決に當ることを得ず。協會の委員は商館全體を代表して此種事件の解決を講ずべき責に任ず。

斯樣に當業者の申合規約は長文に亙つて居る。之によつて大體生絲取引慣習の概要も窺知されるであらうが、更にその取引狀況を系統的に述べると次のやうである。

(イ)生絲の賣買狀況　生絲の賣込には問屋の主人又は番頭(ブロカアー)が得意先を廻つて商談を進め、其の取引方法は前述のやうに橫濱市場でいふ値極約定と振賣の二つである。而してこの先約定に至つては、最近兩三年來絲價は概して安値に彷徨して居る爲めに、先物に賣り應ずるものは殆どなく、僅に優良な特殊品を除き、普通品は大抵皆後者の振賣によつて居る。商談の成立には買付月日、仲買人、工場及商標名、數量(一俵八十斤入俵數、織度蠶作、渡月及値段(對百斤香港建)等を決定したる後別に契約書を取交すことなく、通例商館の Purchase Book 若くは單に Memo に前記條項を記入し、之にブロカアーの署名を以てこと足りて居る。卽ちブロカアーがこの買賣に關し全責任を負ふ譯である。次に生絲市況に關しては問屋の間に安盧及聯益といふ二個所の茶館があつて、當業者は夕刻から此處に相會して、每日の市況を談合する集會所に充てゝ居る、然し其の取引振は橫濱市場の公開的なのとは違ひ、大概は秘密裡に行はるゝ所謂闇商內である から、問屋自身と雖も詳細に市場の模樣を知悉することは困難であると言はれて居る。

(ロ)生絲の檢査　振賣にあつては生絲を商談後十日以內に引込み、檢査の結果ペケとなれば其契約は消滅するが、先約定に就いて取替の出來ることは前記規約の通りである。そこで生絲の檢査方法に於いて、先づ器械檢査は一荷口十俵より每俵綛二本の割合で、合計二十本を徵り織度檢査は各綛から各五本宛合計百本を試驗し、また再ガラに就ては海外機屋の標準回轉數により三十分乃至一時間再繰して其切斷數を檢して居る。之に關し廣東獨特の慣習とも言ふべきは檢査に要するガラ取(男工)を始め、器械檢査及拜見の手續に要する使用人は總て問屋から數名の

ものを派して其の作業に當らしめ、商館側は檢査の監督及試驗のレコードを採れば足るから、尠からず手數が省けて居る。

(ハ)生絲の乾燥及看貫　拜見を了つた生絲は倉庫内に設けられてある乾燥室に入れ、室内に火鉢を置いて午後五時から翌朝九時まで乾燥し、之に要する火鉢の數は生絲十俵に付き三個の割合として居る。然し積荷を急いで乾燥を行はぬ時には規定一俵の純量一〇七・五封度を一〇七・七五封度に匁增して受渡をする慣習である。斯くて生絲の看貫方法も大分變つて居る。それは先づ衡器の分銅を一〇七・五封度に定着してから、括を裸の儘秤臺に載せて、重量が之より超過する時は總數を減じ、滿たない時には之に加へて一俵の純量を一律に一〇七・五封度(約八十斤)として居る。どうして斯樣な方法が行はれるかに就いて一說には廣東から香港向輸送の途中、生絲の拔取盜難を防ぐ爲めに起つたものとも言はれ、また一俵約八十斤入とするのは上海地方の七里大枠絲と同樣に從前歐洲向の運賃關係から來た慣習のものゝ如くである。看貫料は生絲拾俵に就き總六本を徵る慣習で、之に若干本の Sample Skein を加へる。それから拜見より看貫に要する雜役も亦問屋の扱に屬して居る。

(ニ)荷造及船積　看貫濟生絲は括每に工場から來た晒木綿の風呂敷に收めて拾括を金布袋に入れ、之を油紙に覆ひ、その上を更に麻繩を掛けてアンペラ包として壓搾し、其俵裝は之を百斤俵に較べて體裁が劣る。この荷造は打包行と稱する荷造請負業者が之に當り、その業者は三家あつて、荷造に從事する人夫は保證金百弗を入れるばかりでなく、信用ある人物を選ぶから、一般下層支那人の通有性とも言ふべき盜癖は此種使用人には全くその弊を認めないと言ふ。而して商館と海外取引先との取引は仕切量目 Invoice weight により、卽ち生絲一俵の純量一〇七・五封度から括絲商標其他風袋を差引いた原量を一〇六・七五封度として買賣する慣習であるから、商館は生絲を再看する必要はない。それで Weight Memo には各俵の總重量と一律に一一四封度(八十五斤半)として居る。

斯くて船積の用意が出來ると、商館は香港行河船の積込業者にその積出日を通告すると共に、輸出申告書及船荷明細書を作製して之を前者に交付すると船積業者は其書類によつて通關手續及船積を爲すのである。但し米國向に要する Consuler Invoice Fee 一口六弗五十仙は商館の負擔に屬して居る。廣東に於ける生絲輸出商の生絲買付は斯樣に船積渡F.O.B.條件によれるもので、其買入竝に輸出手續には直接手を下すことをなるべく省略して居るから、他市場に比し營業費の少額なるは言ふまでもないが、此點が廣東絲の輸出數量に比し取扱者の多過ぎる一因ではあるまいかと思はる。運賃に就ては生絲六俵を以て一噸とし或は容積にして四十載とし、其運賃率は外國貨幣を以て建てられ、紐育向は米貨建金弗の換算は積出日の Demand Exchange Rate により歐洲向運賃は年四回每に各社が協定する換算率を以て運賃を徵する慣習である。

六　屑物の整理及種類

廣東では屑繭を繭仔(カムチャイ)と言ひ、屑絲を水結(ソイギー)と稱し、其の輸出數量は年額四五萬擔に達し、生絲に次

ぐ主要輸出品である。而して屑物の種類は既述の如く廣東に於ては製絲工場の釜底は魚塘に投じて養魚の飼料に充てるし、また座繰製絲業が發達して工場、繭市から出る廢繭は地遣向座繰絲の原料にするから、屑繭として出廻るものは出殼繭ぐらいのものに過ぎない。それに出殼繭も一部は紬絲に消費されて繭綢なる織物となる。

從て屑物の大半は器械及座繰製絲から產出する水結卽ち生皮苧である。そして生皮苧の產出に就ては前にも述た通り、繰絲の際索緒箒で緒立の繭を纏めて膳臺の木架に吊下して、漸次繰繭を摘取つた際に殘れる頭帶（クオダイ）Hard matte と言つて、緒絲の凝結せる部分の附いた緒絲や添緒に手繰る「くち絲」等である、そして之を品質に見るに上述の如く聊か玉石混淆の觀があり、それに毛羽の部分も含まれて居るが、兎に角生絲百斤から生皮苧量は六七十斤にも達し支那の生皮苧としては惡くはない。然し座繰生皮苧に至つては、更に雜物を混じ、品質は前者より著しく劣る。而して器械生皮苧は工場に於て既述の通り壓搾器に掛けて除水したる後汽罐の傍に之を乾燥して廣東に發送する。

產地の屑物は皆廣東に集つて問屋の整理場に於て多數の女工を使ひ、屑物の內から繭綿の固結せる部分を小刀で除せるものを Sorted と稱し其の工程を經ざる荷口を unsorted と言ひ、それからまた屑物を石の上に載せて木槌を以て打敲いて纖維を柔軟にしたる後、夾雜物を振ひ落し小刀を以て纏綿せる纖維を延き伸す操作を Opened と唱へ此の工程を加へないものを unopened と言ふて居る。斯くて之を數等に分類して商館に賣却して居る、そこで今市場に於て取引さるゝ種類、數量及仕向先を擧げると大體次のやうである。

1 執繭仔一號 New Style Best No. 1 Opened

器械生皮苧にして前記 Sorted, Opened の工程を加へたる上に、更に之に附着せる揚繭を除去せるものである、これは米國向として約十年前頃から試みられた荷口なれば New Style と呼ばれ品質は最上である、然し之に若干座繰生皮苧の優良品を混入する跡がある。

2 行一號 Old Style Best No. 1 Opened

歐洲向器械生皮苧で前者のやうに揚繭を除去せざるものである。產額は前者と共に全額の七割五分見當を占めて居る。

3 一號切頭原庄 Best No. 1 Unopened, Cut Hard

器械生皮苧の固結せる部分卽ち頭帶を除去せるものであるが、未だ木槌を加へない荷口である。然しこの荷口には座キの優等品を混入する傾があり且つ頭帶も未だ一割見當は殘つて居るのを見る。

4 有頭一號原庄 Ordinary unopened with Hard matte

產地より送致せられ未だ手を加へない新荷である。問屋は之を其儘賣却することを好まず、勢ひ買ふとなれば幾分高値を出さねばならない。從て市場に取引される數量は前者と合せて全額の五分見當を出でないであらう。それに此の荷口には頭帶は勿論座キ及揚繭等が二割から甚しきは三割見當を含んで居ることは免れない。

5 行二號 Best No. 2 Opened

座キにして既述の工程を加へたものであるが、之には頭帶を摧いたものや、繭仔を混入し歐洲向

である。

6 次二號 Ordinary No. 2 Opened

前者の並物品にして頭帶及繭仔の混入は一層多く、品質は不良である。

7 二號原庄 Best No. 2 Unopened

座キに手を入れないもの、一乃至二割見當の頭帶と多少の繭仔を混じて品質は不良である。

8 Ordinary Best No. 2 Unopened

座キ並物、前記5乃至8に亙る四種の座キ卽座繰生皮苧は孰れも歐洲向に需要され、その生產額に就いて、生皮苧は大體器キ七割、座キ三割の比にあるが、後者の座キは之を器キに混入する爲め、此等四種の輸出量は全額の一割見當と看做して大差あるまい。

9 頭帶 Hard matte

頭帶とは上海屑物市場に出廻る座キの一種なる狗尾とか小條子或は牛尾と稱するものと同樣に、索緒の際緒絲を纏めて旋回する爲めに、緒絲は固結して恰も樹皮のやうになれるものであるが、この頭帶は器キとして廣東獨特のものである。頭帶の長さは二三寸で、生產量は生皮苧の一割二分見當を占めるが他の荷口に混入されるから、頭帶としての出廻量は年額五千擔位であらう。

10 繭仔 Cocoon Refused

揚繭(梅口)其他の屑繭は多くは內地用水結布の原料に消費され、また釜底物は養魚の飼料に充てられて居る。それに屑繭の輸出稅は廣東では出殼繭や本繭と同樣百斤三兩を徵られるから、殆ど輸出を見ない狀況である。

11 繭殼 Pierced Cocoon

廣東地方に於て蠶種製造の副產物たる出殼繭の多數なことは言ふまでもないが、是等の一部は內地消費を除き主として歐洲向に需要されて居る。問屋の賣却する出殼繭は切步七一%を保證し、且つその保證は海外消費地にまでも責任を負ふて居る。

12 各種の屑絲 Rereeling waste, Filature waste, Gum waste

是等の屑絲は繰絲場、揚返場及機屋から出る絲屑で、品質は勿論優良であるが、輸出量は數百擔に過ぎない。

13 Kwong Sai Kumbs

器械及座繰生皮苧の優良品若くは二等繭から印度向 Pun Jum を製造する際生する屑物で品質は優良である。

七　屑物問屋と輸出商館

廣東に於ける屑物問屋は孰れも生絲問屋の兼營若くは之と資本關係を持つたもので、沙基の問屋街にも二三介在して居るが、その多くは廣東市と珠江を隔てた對岸河南(ホウナン)に存在して居る、それは問屋は皆整理場を設けて、そこに通例四五百人の女工を使用するから、其の便宜上河南が地の利を得て居るからである。普通整理場は二階建にして階上は倉庫及 Sorted の作業に充て、階下を Opened 及荷造場に使用して居る。整理場に於ては屑物は之を笊に入れて女工に配給し、賃銀はその仕事高若くは日給である。而して廣東の屑物取扱問屋は左記二十家を算して居る。

華昌厚記	安綸	九〇〇	—	九〇〇擔	
兆綸廣和	安興	一、一〇〇	—	一、一〇〇	
合興綸元	寶經記	一、九〇〇	一、九〇〇	一、九〇〇	
華經永源	和記棧	一一、九〇〇	二〇一	一七、五三五	
		五、六三五		三、七二六	
志利		一			
時昌		三、五二五			
泰和		七〇〇	—	七〇〇	
怡和		一、一三五	—	一、一三五	
カランヂヤ		—			
信孚		二、六〇〇	—	二、六〇〇	
		五〇〇	—	五〇〇	
バスキー		—			
		二、八九〇		二、八九〇	

之に對し沙面に於ける屑物輸出商の主なるものは、志利を始め所謂三館筋關係のものが優勢を示し、其他生絲商の兼營する所である。大正十四年に度ける商館及其輸出量を擧げると左表の如くである。

商館名	歐洲向	米國向	合計
間和	七、〇四八	—	七、〇四八
其他	一六〇	—	一六〇
計	二〇、七〇三	一九、四九一	四〇、一九四
出殼繭	三、九三五	—	三、九三五
合計	二四、六三八	一九、四九一	四四、一二九

八　屑物取引慣習

屑物に關する取引慣習は大體生絲取引のそれに準據して居る。蓋屑物問屋は皆生絲問屋と密接なる關係を有し、屑物の賣込には生絲ブロカアーが當つて居る。そして取引には現物取引 Ready Cargo と先物取引 Contract Cargo の二種があり、前者の現物にありては、山積により總荷拜見の結果標準格に合はずペケとなれば、該契約は自然消滅するが、先物取引の場合には幾度となく取替の出來ることは生絲取引と同樣である。

取引は通例先約定によるものが多く、その契約は長きは十個月先に亙るものもあるが、通例三個月先渡を普通として居る。荷口の檢査は商談成立の際豫め見本を提供せしめて、受渡期に總荷と見本とが相違なきかを鑑定したる後に看貫を行ふ。而して此際廣東の特殊慣習としては Piel per 95 Catties Net. なる受渡が行はれて居る。これは海外消費地に於ける減耗量に對し賣人は百斤に付き五斤以上の勿切は責任を負ひ、言ひ換れば一擔(百斤)當り正味九十五斤を保證す

る譯である。之に對し問屋は通例一擔に正味九十六斤入として引渡を爲す模樣で、一般屑物市場に於ける芥斤の慣習とは大に趣を異にして居る。商館の屑物買付は生絲同樣に廣東船積渡F. O. B. Canton の條件により、輸出稅(屑絲百斤海關兩一兩、出殼繭三兩積込費(一俵凡そ二〇仙)及荷造費(材料共廣貨一元)等の輸出諸掛は賣方たる問屋の負擔である。

然しながら問屋の荷造は壓搾器に掛けて藤蔓で締めて、アンペラ包みとして、其上から藤蔓を縛したる半プレツス俵裝である。從て之を本式のPress Cargo とする場合には沙面の大北毛廠が經營する廣東市大沙頭にある打包廠に託して再裝せねばならぬ。普通半プツス俵は屑絲九十五斤入及出殼繭七十五斤入を一俵とするが、本プレツスでは、この三俵(約十才)を一俵(約二才)に壓搾し、荷造料一俵に付四乃至五弗は勿論買方たる商館の負擔である。次に代金の授受は河船積後問屋から積荷證若くはLocal B/L の呈示を俟ち之と引換に代金を支拂ふ慣習である。

九　屑物の需要

廣東產屑物は纖維の細い憾はあるが、生絲の持つ特性と同樣、その彈力性其他の特色は之を利用することが興味ある點と思はれる。而して此屑物に先鞭を付けたのは言ふまでもなく歐洲筋であつて、今尙歐洲絹紡業に於ける東洋屑物買付同盟たる所謂三館筋は廣東及上海市場を左右し、現に支那屑物の利用に至つては到底本邦絹紡筋で消化し難いやうな劣等品まで需要され、支那產屑物が歐洲向に重大なる關係を持つて居ることは今更言ふまでもない。然しながら一方本邦絹紡業の發達に伴ひ、最近上海屑物市場に於ける邦商の活躍は相當目覺しいものがあつて、殊に玉繭、毛羽の如きは邦商筋の手に左右されて居る狀況である。然し未だ廣東屑物に對しては邦商の染手するものなく、稀に試驗的買付を見るに過ぎないが將來此方面に發展することは相當有望なる商賣と思はれる。今之に就いて廣東屑物の市況を見るに、最近數箇年間に於ける廣東器キの優良品は百斤最高三百弗、最低一二〇弗の間にあり、各種目による市況は大體次のやうである。

品種	大正十四年八月中の相場	同十五年七月中の相場
		弗
New Style Best No. 1 Opened	二五五	二〇〇
Old Style Best No, 1 Opened	二四五	一九〇
Best No. 1 unopened Cut Hard	二三五	一八〇
Ordinary Best No 1. unopened	二〇五	一四五
Best No. 2 Opened	—	一六〇
Ordinary No. 2 Opened	一八五	一二〇
BestNo. 2 unopened	—	一一〇
Ordinary Best No. 2 unopened	—	九〇
Hard Matte	—	六五
Pierced Cocoon	一六〇	一三〇

Reeel Waste	一	一
生絲相場	一、一六〇	一、〇八〇

而して視察當時に於ける工場から出た儘の有頭一號原庄は百斤百四十五元を示し、之に日本向諸掛を見るに廣東より横濱着運賃は基隆經由で四十載に付き香港弗十二弗、海上保險料十二仙五厘の率であるから、前記原價百四十五斤の生皮苧に對する横濱着値段は邦貨換算凡そ百五十圓を示し、其の品質から見て採算の出來ない相場ではない。それに廣東と內地との交通關係は直航はないにしても、大阪商船會社は基隆若くは高雄と廣東間に數隻を配し、また上海廣東航路には日清汽船會社の就航するありて、その交通は左迄不便ではないから、我が當業者が廣東屑物に着手することは望ましいことであらう。

第七章　南支那蠶業の將來

一　斯業の缺陷

南支那に於ける育蠶製絲の狀況に就いて玆に結論として斯業の將來がどうなるかといふ問題に關して考察して見なくてはならない。重ねて言ふまでもなく廣東地方の蠶業は本邦や中部支那の業態と著しく異つた特色を備へ、謂はゞ熱帶蠶業を代表するものである。しかも其蠶業は三角洲に於て面積から言へば、僅に甲信地方ぐらゐの地域に頗る密集的に、年幾回となく飼育が行はれて居るから、眇たる地積より生絲は能く年額六萬俵(八十斤入)を輸出する狀況である。

それ故に稀に見るこの旺盛な蠶業がどうして三角洲に發達したか、先づその原因に溯つて考へて見る必要がある。察するにこれは肥沃なるデルタが栽桑地として至極適當して居るばかりでなく、年々繰返す氾濫洪水に對しては、一般栽植物に比し、桑を植えることが何よりも有利であり、加へて熱帶的氣候により年に幾度となく飼育が出來ることは、三角洲の農民を擧げて專業的な蠶業に趨らしめた主なる原因であらう。現に此地方に於ては米作は年二回の收穫があるに拘らず、米田を見ることの稀なのも、洪水によつて假りにその一作が被害を蒙つたとしたならば、米の收穫は一半を失ふことになるが、繭ならば七分の一で濟むからで、自然全省米の輸移入額は之を大正十年は八百十餘萬擔同十一年は千三百餘萬擔といふやうな莫大な數量に上つて居

る。更にデルタを離れた高原地帶は土地乾燥して年に四回作に止まることもその一因であらう。

斯くて三角洲に於ける蠶業の現狀は此儘の業態で進むものとすれば、もう既に發達を遂げ得る限度にまで近く到達して居るのである。卽ち之を繭市繭棧による繭取引の發達と言ひ、或は桑市に於ける旺盛な桑葉買賣や專門の蠶種製造家及蠶紙市の存在など諸般の機關が整つて分業的に發達して居ることは他省に見られない點である。然しながら其發達は本邦のやうに官民の指導奬勵によつたものでは勿論なく、單に自然の成行と便宜から今日の如き生產組織を見た譯で、其間樣々な缺陷を見出すが、之に就て斯業の發達を阻害する缺陷とも見るべき事情を左に列擧して見よう。

（一）廣東絲の品質が粗惡劣等なること

廣東絲の品位に就てその出色と言へば僅に彈力性に富むと言ふ一點で、纖度は惡くないにしても、類節が多く其他化學及物理的性質は寧ろ野蠶絲に近く到底優等絲に伍する資格はない、從つて用途も特殊品の原料として其需要は極限されて居る。之を前にも述べた通り數年前再繰絲に改めてから、著しく米國機業家の需要を喚起し、之に多大の期待が繫がれたことは當時廣東縮緬の流行と共に、一面には値惚關係から廣東絲を我が信州物の用途に代へんとする希望があつたからであらう、然るに廣東絲に緣つて日本絲の代用を求むることが、殆ど不可能であつたことが、近時米國向需要の減退せる一因ではなからうかと推せられる。

而して廣東絲の品質劣等なことは多化性蠶種から來る自然的素質と繰絲法の缺陷に歸因することは言ふまでもない。卽ち廣東蠶は高溫多濕な氣候と簡素な育蠶法によつて尙よく營繭し、この强健なる輪月種が今日旺盛なる蠶業の根柢をなすに至つたけれども、何しろ繭の劣等なるを免れない。それ故に廣東蠶絲業の根本的改革としては、先づ蠶品種の改善に俟つ外はない。然しこの特殊な環境にある蠶種の改良は蘊蓄ある斯道大家の研究に據らなくては、その實現は困難なるべく、米人經營の嶺南大學が多少共之に關係して居るが、未だ微粒子病の排除にさへ手を付け得ない現狀にあつては前途遼遠たらざるを得ない。然しながら繭の原質から來る缺點は餘儀ないにしても、乾繭法や繰絲法の不完全に基づく生絲の缺點に關しては、其の方法に工夫を加ふるに於ては、更に一段の向上を計り得る餘地は多々ある。

（二）廣東絲の特色たる廉價生產が漸次困難ならんとする傾向にあること

廣東絲は品位が劣等にしても、その價格の低廉であることが、これまで華客を惹いた原因の一つで、米國當業者が廣東絲に著目したのも、恐らく此點ではなからうかと思はれる。然しながら絲の高いとか安いとかいふことは比較の問題であつて、日本絲が三四千圓も唱へた時代には廣東絲は確かに低廉であつた。けれども最近我が當業者が絲價を一般衣料や物價に對する地位より見て、千三五百圓を目標に置き生產に努めて居る今日、品質の惡い廣東絲の低廉といふことは尠からず其の價値を減じて來た。最近廣東絲の日本絲に對する値開が一層大きくなつたのも畢竟斯樣な關係から生じたものであらう。のみならず省內に於ける一般物價及勞銀の昂騰

傾向は最近兩三年來國民政府の治下にあつて一層顯著となり、勢ひ生絲の生產原價を尠からず高めて居る。之を旣述の數字に見るに、桑の生產費は天惠により葉桑百斤一元八十仙を示すも、勞銀の昂騰によつて生繭百斤の生產原價は桑葉を自給するものは、凡そ五十元から買桑による凡そ八十元を告げて居る。從て製絲家の繭仕入値段はどうしても繭本千二百元前後(香貨九百六十弗)に落付かねばならない。之に屑物の收入を差引いた問屋著生產費及賣込費約三百弗を加算して、生絲百斤當りの原價は千二百弗となり、之を邦貨に換算して大體絲價千二百五十圓以上でなければ有利な採算は出來ないのである。然るに最近廣東絲は日本絲に比し三四百圓方の安値にあつては、たとへ銀安の好材料があるにしても、上海絲のやうに好反響を齎らさない譯で、此點から見ても斯業の經營に改善を加ふべき必要がある。

そして之が爲めには育蠶に病害を逞しうする微粒子病の撲滅を期して收繭率を高めることも必要ではあるが、更に現在の繰絲法に改善を加ふるところがなくてはならない。それは現在最優等格工場に於ける一日の繰絲量は僅に三十二三匁に過ぎない狀況であるから、絲質優良なる生絲を作らうとすれば、一方特色とすべき廉價生產に反して來る。けれども繰絲法の改善に就ては上海地方のやうに原料が優良であれば、直ちに日本式繰絲法の採用も容易であるが、柔軟にして纖度の細い廣東繭に適合する繰絲法を求めることは、一朝一夕の研究では困難であらう。

(三)　斯業の生產組織が著しく投機性を帶びて居ること

前にも述べた通り斯業は分業的に發達を遂げて居るが、却て之が爲めに各業は市況や洪水其他の事情と相俟つて消長常なく、著しく投機性を帶びて居る。卽ち蠶種製造家は兎角蠶種の需要に急激な變化があつて、種紙の暴騰暴落に遇つて居るし、桑葉賣買の頗る旺盛なることは桑の販賣を目的に栽桑する者があり、葉價の騰落は養蠶經營を甚しく不安ならしめると共に、新鮮なる給葉を缺いて育蠶に支障を與へて居る。更に繭の取引に於ても、之に介在する繭仲買人が夥しく、彼等は盛に思惑を試みる爲めに、繭の相場は不合理な變動を告げて居る有樣で、自然製絲經營の投機的なことは言ふまでもない。斯くして斯界の各種業態が著しく安定を缺き、斯業の健全なる發達を阻止して居る。

二　嶺南大學蠶桑科及全省改良蠶絲局

されば廣東地方に於ける蠶絲業が更に躍進を遂げる爲めには、殆ど停頓に近い現狀を打開すべく、識者の活動に俟たねばならぬが、當業者は皆支那流の商人として保守的であり、それに血族關係のものが一團となつて斯業の經營に當り、概して排他的であること等の事情によつて當業者に之を期待することは殆ど見込がない。故に斯業の改良進步は蠶業教育及奬勵機關の活動言ひ換れば政府當局者の經營施設に俟つべきものであるが、何せ支那でも物情騷然たる處であるから、之に就て未だ見るべきものはないが、先づ第一に擧ぐべきは嶺南大學であらう。

抑々嶺南大學 Ling nan university (Canton Christian College) は米人の經營になれるもので、南京の金陵大學と共に規模の宏大な點に於ては支那の双璧であらう。大學は廣東市と珠江を隔て

た河南康樂に在つて、約七十萬坪といふ廣茫な地積に美しい煉瓦建の校舍が五十八棟もあちこちに立つて居る光景は支那とも思へない位である。本校の起源は約二十年前米國宗教團體によつて、澳門に格致書院と稱する學校の設立されたのが始りで一九〇四年現在の場所に移轉し續いて嶺南大學と改稱せられて、一九一六年に先づ文科大學の設立を見た。次いで一九二一年農科大學が完成し、附屬農場は全面積の三分の二を占めて居る。之に要する建築費二百六十萬元と傳へられて居るのに見ても內容の如何は兎も角規模の大さが窺はれよう。

由來廣東に於ける外國の勢力關係は歐洲戰爭前迄は獨逸人の活動が最も優勢で所謂「獨人の廣東」なる稱があつたが、戰後の民國十年前後は獨人の失脚に代つて、米人の擡頭が目立つた時代であつた。當時廣東は廣西派軍政府の天下にあつて時の省長はこの農科大學を以て將來國立大學の一分科に編入する條件で、創設費三十萬元と經常費として年額十萬元を支出する約が成つて、其頃から廣東政府との關係を生じて居たのである。而して農科は普通農科(選修科目田藝園藝及び畜牧)と蠶桑科との二部からなり、中學卒業程度を收容して修業年限は四ケ年で、それに一年の專修科を設けて居る。現在農科の學生數は男子三三名及女子一名、專修科一二名と未だ四十六名に過ぎない。

蠶桑科の設備に就ては先づ民國九年米國絹業協會の寄附になつた三階建煉瓦造の蠶室を以て、之を養蠶の實習室や研究室及改良事業の事務室に充てゝ居る。それから米國生絲商時泰洋(ジエネラルシルク)行の Marcus Freider 氏の寄附になつた建物を短期(半ケ年)專修科の學生の寄宿舍に充てゝ居る。

更に最近米商アツトウツド、マシン會社の Eugene Atwood 氏の醵金によつて、繰絲場一棟を建設するに至つた。この工場には簡單なボイラーを据へ、廣東式繰絲器械や上海式、伊太利式等凡そ二十釜を竝べて、繰絲の實習に供する一方、その研究に資して居る。尙又工場の地下室は前記アツトウツド會社の寄附に係はる冷藏裝置を設備して蠶種の冷藏に供して居る。次いで蠶桑科に於ける教授科目を擧げると次のやうである。

(第一學年)　植物概論、動物概論、無機化學概論、日本文、畜牧概論及宗教
(第二學年)　微菌學、實用昆蟲學、分析化學、法文及蠶桑大要
(第三學年)　農業化學、商業管理法、栽桑學、果樹園藝大要、動物育種學、土壤物理學及農具學
(第四學年)　飜譯、農場管理概論、蠶絲經濟學、宗教、蠶絲專論

仍て次に教授の顏觸を見るに蠶桑科主任ホワード氏(Charls Walter Howard)といふは米國コルネル大學及ミネソタ州大學出身の昆蟲學者であり、それに嶺南大學農科出身の黃澤晉氏と教授はたつた二人のみである。しかも兩氏共育蠶製絲に幾何の造詣があるかは疑なきを得ない狀況に至つては、折角の蠶桑科もその內容は聊か心許なくなつて來る。

然しながら蠶桑科は創設以來未だ日が淺く、之に批評を加へることは聊か酷であるかも知れないし、また米國絹業協會の後援もあることなれば、其の施設に就ては今後に俟つべきものであらう。のみならず民國十二年當時の省長廖仲愷氏は蠶絲業の發達に著手し、これが劃策の爲めには先づ全省に於ける蠶業狀態を調査するの要ありとして、香貨五千弗を嶺南大學蠶業科に支

給して、其調査に當らしめた。次いで同年十一月廣東全省改良蠶絲局を設置して便宜上事務所を嶺南大學蠶桑科に置き局長にはホワード氏を擧げて、廣東省に於ける改良事業を委任するに至つた。然しこの蠶絲局も廣東政府の財政窮乏から經費の捻出が出來ない爲め、未だ直接當業者に資する所がないけれども、將來斯業の啓發運動は或は此處に胎胚し、嶺南大學を中心として新發展を爲すべきものであらうかと推察せられる。

三　國立中山大學其他諸機關

(一)　國立中山大學農科學院蠶桑科。廣東には從前各種の專門學校や師範學校があつた。そして數年前是等學校を昇格せしめ、之を綜合して國立廣東大學と稱するに至つた。續て孫文の死するや、其號を取つて國立中山大學を改稱し、學長には前年邦人にお馴染の戴天仇氏が擧げられたから、將來相當の施設が行はるゝであらう。然し現狀にあつては醫科大學を除いては殆ど見るべきものがない。殊に農科大學は嶺南大學と珠江を距てゝ對峙する東山にある農林專門學校竝に農林試驗場を改稱せるもので、相當廣大な地域を占めて居るが、その設備內容に至つては大學と稱すべく餘りに貧弱であり、嶺南大學の蠶桑科と大同小異と言ふべく、先づ本邦の甲種蠶業學校にも遙に及ばない狀況である。

(二)　絲業研究所。(Chinese Silk Association) これは製絲家及問屋の同業團體で、上海地方の江浙皖絲廠繭業總公所若くは我が蠶絲中央會に類すべきもので、沙基に相當立派な建物を持つて居る。然し研究所の事業は一般支那に於ける同業組合と同樣に當業者利益の保護增進を計るのが目的で、未だ積極的な事業には當つて居ない。然しながら有力なる同業者の團體として、將來根柢ある斯業の改良事業はこの研究所の活動に俟たなくてはならない。

(三)　仲愷蠶業學校。視察當時計劃中の學校である。之に關し去る大正十四年刺客に斃れた故廖仲愷氏は廣東省長として又國民黨勞働部長として、廣東政府の錚々たる人物であつたが、殊に廖氏は蠶業の發達を計るべき意圖があつたから、同氏を記念する爲めに工費五十萬元を投じて蠶業學校設立の計劃を立てたのである。敷地は廣東セメント會社附近に選定を終へて、近く校舍の建築に著手する豫定であり、また廖氏の姉妹二女は本邦に製絲業を學んだといふことである。斯く本校は完成を見た上でなければ、設備內容が不明であるが、私が廣東滯在中に聞いた儘を玆に書き加へて置いた次第である。

(四)　萬國絲業改良會。これは上海地方に於ける中國合衆蠶桑改良會と同樣に民國七年廣東絲業研究所、外人生絲協會、廣東商會及英佛商業會議所等各種團體からの醵金によつて設立し續いて嶺南大學も之に加入した。然しながらこれは上海地方の改良會と違ひ、關稅剩餘金からの補助を得るやうな有力なる財源がなかつた爲めに、設立二三年にして頓挫して了つた。

其他近時香山縣小欖にも蠶絲局の設立を見るに至り、蠶業地に於ても、將來此種の機關が勃々設けられるであらう。それからまた廣西省梧州に於ける甲種蠶業學校は政情不安の爲め廢校に歸し、また一時米人の企劃せる生絲檢査所も沙汰やみとなつたと言ふやうに南支那に於ける

此種機關は一興一廢し、之を上海地方に比較すれば著しく遜色を免れない。

四　再繰式の採用

斯樣に廣東に於ける斯業の改良施設は現在未だ見るべきものがなく、それに米人の啓發運動も未だ研究が足らずして施設の方策が立たぬものか、現狀に則して言へば嶺南大學といひ或は生絲檢査所といひ、徒に聲ばかり大きく傳はれて居るに過ぎない。此間に處し所謂米人の啓發運動とは反對に世人の視聽は惹かなかつたが、斯業改良の上に滅却すべからざる大功績を殘したのは三井洋行生絲部員の傳授による廣東絲の再繰絲(New Style)で、之が爲めに廣東當業者が如何に利益を享受し得たかは看過することの出來ない事實である。蓋し廣東絲は在來の直繰式にあつては、多濕なる土地のことなれば枠角の膠着を始め、大類細斑の除去が出來ないことや、總の大小及絡交等整理の不完全なる點よりして先づ改良の第一歩として、再繰式の採用は夙に二十年前より米國機業家の頻々と勸告せる所であつた。然し舊慣を墨守する支那人の反響に至つては何時でも微弱であつた。然るに大正七年三井洋行生絲部員故宮下雅敏、水野健吉氏等の懇なる慫慂によつて順德縣葛岸鈿記絲廠に於て試驗的に再繰式を實施するに至つたところ、果然其絲質は好評を博し、偶々米國絹業の好況と相俟つて在來絲に比し百數十元高に賣却されたのであつた。斯うなると保守的當業者ではあるが、そこは利に敏い支那人として、改良の機運は欝然と勃興し、爾來二三年ならずして製絲家は滔々再繰器械を据付けるに至つたのである。

而して再繰式による利點は(イ)轉繰工程の能率增進(ロ)轉繰上屑絲の減少(ハ)從來の姫綾を鬼綾に改良したること(ニ)力絲の施し方の改良及(ホ)總の長さを日本絲と同一ならしめたこと等で、此の改良は從來廣東絲の苦情とした根源の一半を除去し得たことは品質改良の第一階梯を作つたものと言ふべきである。今之に就て在來絲と再繰新式絲との品質を比較すると左表の如し

	在來絲(最優格)	再繰絲(準優格)
平均纖度	一四・四七	一四・一七
類節(五百米突)	三〇六	三二六
強力	五一	五一
伸度	二三	二一
切斷(二時間)	二〇	八

右在來絲は最優格の商標永昌成 Wing Chong Sing を採り再繰絲は舊格 Small XXB. の鷹牌 Eagle 卽ち優等品と中等品との比較なるにも拘らず、再繰絲の切斷數が減少せることは一見明瞭であらう。由之觀之廣東と言はず、支那に於ける蠶絲業の眞の改良啓發運動は邦人の直接的指導によるか、或は之を學ぶことが最も有效にして必要であり、斯くて日支兩國の蠶絲業の將來が如何樣に接觸を來すべきやは興味ある問題である。

五　廣東絲の產額

斯くして南支那蠶絲業に關する究極の結論は將來の產絲額如何といふ問題に歸著するが、之に就ては先づ現在兩廣地方に於る產絲額を明にする要がある。けれども其の產絲額に就いては支那として憾るべき統計がなく、やはり海關報告による生絲輸出量を基礎とし、或は其の屑絲輸出額から推定する外はない。今材を屑絲輸出量に採つて其產絲額を推察するに、最近五個年間に於ける水結卽ち生皮苧の輸出量は平均年額四五、六六〇擔を示して居る。之に對して水結布其他に用ひらるゝ內地消費量を一割と見積る時は、生皮苧の推算年產額は五〇、二二六擔となる。そこで生絲百斤に對する生皮苧の生產割合を七十斤と看做し、此の率から割出される生絲の年產額は七一、七五〇擔となる。更に變つた推定法として省立農林試驗場は各縣署に就いて桑園面積を調査し、之を基礎として收葉量から產繭額及產絲額の推定に及び、嶺南大學の調査も亦此方法に倣つて居るが、難解なる支那產絲額の推定としては興味ある一法である。卽ち農林試驗場及嶺南大學の推定額は左表の如し。（一畝凡そ我二百坪）

		田畑面積	桑園面積	桑葉量	乾繭量
順德縣	農	八七二・〇（千畝）	四三六・〇（千畝）	一〇、九〇〇（千擔）	一五二、六〇〇（擔）
	嶺	—	—	—	二四二、〇六〇
香山縣	農	六〇八・四	六六五・〇	一七、二九〇	二八、〇〇〇
	嶺	—	一〇〇・〇	二、〇〇〇	一〇五、八七四
南海縣	農	四九六・〇	三二八・八	七、五六二	八三、三三〇
	嶺	—	二九七・六	五、九五二	九六、六〇〇
			三〇〇・〇	六、九〇〇	
新會縣	農	九六四・八	六〇・〇	一、五〇〇	二一、〇〇〇
	嶺	—	六〇・〇	一、五六〇	二一、八四〇
三水縣	農	三三四・二	三〇・〇	四五〇	六、三〇〇
	嶺	—	三〇・〇	六〇〇	八、四〇〇
番萬縣	農	—	一〇・〇	二〇〇	二、八〇〇
	嶺	—	一〇・〇	二三〇	三、二二〇
清遠縣	農	—	六・〇	一一〇	一、六八〇
	嶺	—	一六・〇	三二〇	四、四〇〇
鶴山縣	農	—	三〇・〇	六〇〇	八、四〇〇
	嶺	—	四・八	九六	一、三五一
四會縣	農	—	—	—	—
	嶺	—	五	一〇〇	一、四〇〇
東江流域	農	—	二八・六	五七二	八、〇〇〇
	嶺	—	二八・六	五七二	八、〇〇〇
西江流域	農	—	一〇・七	二一四	三、〇〇〇
	嶺	—	一七・〇	三四〇	四、七六〇
廣西省	農	—	一七・〇	三四〇	四、七六〇
	嶺	—	九〇・〇	一、八〇〇	二五、二〇〇

合計	農	一、〇二五・九	二二、八四八	三一九、八七〇
	嶺	一、五五五・七	三七、三七二	五二三、二〇五

上表桑園面積は四水六基により算出し、收葉量は地方の狀況により一畝(凡そ二百坪)に付き葉桑量二十擔乃至二十六擔を要するものとし、且つ年間七作の悉くが平作を占めるやうなことはないから其の推定額の七割を以つて收繭量として居る。而して乾繭總產額は右の如く農林試驗場の調査は三十一萬九千八百余擔を示し嶺南大學の數字は五十二萬三千二百餘擔と相當大きな相違がある。そして嶺南大學の調査報告は之より乾繭五擔に付き生絲一擔の生產割合として、生絲總產額を十萬四千餘擔と推算して居るが、然し上表乾繭といふも、それは七八分乾見當の殺乾繭であつて、之に對する絲量は嶺南大學の如く五擔とすることは產絲推定額を過大に失せしむる嫌がある。從て產繭額に就いては農林試驗場及嶺南大學調査の數字を平均して殺乾繭四十二萬千五百餘擔(生殺千八百萬貫)の推算を採るのが妥當なるべく、さすれば乾繭六百斤より生絲百斤の生產割合と見て其の生絲推算額は七〇・二五〇擔となり、前記生皮苧產額を基礎とする推算と一致するを見るのである。故に廣東及廣西省兩省に於ける生絲產額は大約七萬擔と判斷を下して大差あるまい。

而して最近廣東絲の輸出額は平均五萬擔見當にあるから、生產額の約七割が輸出さるものと見られる。そして將來の輸出見込に就ては假令斯業の現狀が不振狀態にあるとしても、土地及勞力方面より見て未だ發達の餘裕は多々あることは言ふまでもなく、更に此點は此地方に於ける養蠶業と他の生產業との利潤を比較して見る必要があり、それによつて生產額の增加の緩急も左右されるが、近き將來に於て廣東絲の輸出額が十萬俵(八十斤入)までになるであらうとは一般に豫想する所の數字である。

第六編　結論

第一章　支那蠶絲業の現況

蠶桑四千年の歴史を有する支那斯業の現狀は之を要するに本邦蠶絲業に於ける二三十年前の狀態に彷彿せるものと言ふべく、其の舊態依々たるは一面國民の保守思想によるものである。卽ち支那が獨自の文明を抱き自國を以て中華と唱ふる傳統的な保守自尊の思想は牢固として拔くべくもない。同時に彼等のいふ中國が「地大物博」なりとは常に國人の口にするお國自慢である。そしてまた事實列强が支那に注重する所以のものも國土の大にして物資の豐富なるにあるが、然しそれは支那の現狀が富めるに非らず、また產業が繁榮せるにもあらず、畢竟國土に横はる資源の偉大なるを言ふに過ぎない。然るに彼等は外人の著目を以て譯もなく「地大物博」を誇るのみで、之を蠶絲業に對する彼等の態度に徵するも「中國の蠶絲は其の質の優美なる、到底日本絲の及ぶ所でないから外人が之に著目するのである」など、己惚れ、進みて先進國の長所を學ぶに怠慢であつたことが卽ち斯業發達の遲々たる一因であつた。然るに近時外來の刺戟と識者の覺醒とは相俟つて漸く舊來の面目を改めむとする氣運を看取するに難くない。而して其の業態に於て既に特色ある形式をとつて相當程度までに發達を遂げた蘇浙及廣東地方の蠶

業と四川山東諸省の如き新場所とも稱すべき地方とは其の間自ら緩急の差があり、自然支那斯業に於ける各地方の地位に輕重を見るが、之を全局よりして支那蠶業の將來に最も重大なるは蘇浙蠶業を根柢として長江流域及北支那に亙る所謂上海生絲市場圈内の蠶業に屬し、之に對して局部に據る廣東生絲市場圈内の蠶業は特色ある業態を擁して別派に居るものと看做すべきである。玆に結論として支那斯業全體の趨勢を考察するに當り、先づこれ迄述べた各編蠶業の情勢を約言して見やう。

一、上海を中心とする中部支那の蠶絲業

世界大戰後絲界の好況に刺戟されて栽桑面積、產繭額乃至繭出廻額は孰も相當の增加を告げた。けれども粗笨なる養蠶業は急激なる繭價の昂騰に際會し彌上にも粗笨に墮するの傾向を馴致して繭質は逐年劣化し、之が爲に生絲輸出額の上に充分效果を齎らすことが出來なかつた。然し這は斯業の發達を辿るべき一過程と言ふべきものであつて、軈て繭質の改善蠶業の改良は當業者の眞劍なる問題となつて來た。即ち最近目覺しい發展を示せる無錫製絲業に於て二三製絲家が蠶種製造に手を初めたことや江蘇省立女子蠶業學校を中心とする秋蠶奬勵の如きその一斑を語るものである。加へて從來器械製絲業に對抗しつゝあつた所謂七里絲の輸出が近年著しく衰退を示し、これが本據たる湖州方面にあつては行詰れる局面の打開策として器械製絲業に轉換せむとする氣運を高めつゝある。而かも歐米市場に於ける生絲の需要が頻りに優等絲を求めつゝある傾向に對し一九二九年製絲業者が相寄り研究機關として日本式模範製絲工場設立の計劃を樹てるなど、優等品を生產する蘇浙器械製絲業は新なる躍進を爲し得る發展力を包藏して居る。

一、北支那の蠶絲業

山東省の蠶業が支那斯業の上に重きを加ふるに至つたのは邦人經營に係はる青島絲廠の出現そのものにあるといふべきである。それは同絲廠の製品によつて端なくも山東絲の眞價が發揚せられたからで、歐米市場ではその特有なる絲質を賞讃して之を上海絲の最上品と同格に取扱ふに至つた。而して之れが一半の理由としては山東省幷に北支那のみが持つ氣候、地味其他自然的素質に負ふべきである。就中大氣乾燥の氣象狀態に至つては他の企及すべからざる天惠といふべく、加ふるに勞力の低廉土地の廣大等斯業の發達を遂げ得る要件を多分に備へて居る。隨つて將來蠶品種の改良と好箇の氣象狀態とが相俟つて或る機會に躍進を來さぬとも限らぬ。然しながら現在北支那の生絲輸出額は之を總額に對し僅に百分の二を占むるに過ぎないのは畢竟一般經濟狀態が未だ斯業の發達を促すべく餘りに幼稚なからである。されば近時山東器械製絲業が大に面目を改めて來たにしても、北支那が支那絲總輸出額の上に相當部分を占むるには先づ一般經濟狀態の發達に俟たねばならぬ。そして之が爲めには地理上頻繁に受けつゝある動亂の安定を前提とするであらう。

一、四川省の蠶絲業

居然支那西部に横はつて夥多の人口を擁する四川省は由來天府と呼ばるゝも蠶業の地位は

甚だ重大である。同省が巨額に達する綿絲布の移入に對し、之れが決濟を生絲に俟たねばならぬ立場から言ふも或は蠶絲業を措いて他に有力なる產業のない狀態から見るも我國蠶絲業のそれに彷彿たるものがある。然るが故に最近器械製絲業は幾多の障害を冒して他地方よりも急進的な發達を示しつゝあり、この趨勢は今後とも持續さるべく差當つて黃繭絲の輸出額を增加せしむるものは四川省の蠶絲業であらう。而して將來一層急激の發達を遂げる爲めには蠶品種の改善に次いで例へば重慶から產繭地に繭の仕入に當るに前後四十餘日を要するといふ不便な交通機關の改善を當面の急務として居る。

一、南支那の蠶絲業

支那蠶絲業に於て世界大戰を機會に最も躍進を示せるは廣東の蠶業を措いては他になく、一九二〇年前後は正しくその黃金時代であつた。是れは廣東絲の特色たる絲質の彈力性及絲價の低廉が偶々クレープ其他の流行による米國向需要と相俟つた結果であつた。加へて米國向需要には當時日本絲の絲價昂騰が與つて力あつた。然るに最近日本絲の相場が著しい低落步調に轉じてから廣東絲は尠からずその壓迫を蒙りつゝある。而かも對內事情に於ては勞銀及物價の昂騰、稅金の增徵等により生絲の生產原價を高め當業者は苦境に陷り、之れが切拔策としては蠶絲業經營改善の必要に迫られて居る。

斯樣に各地方蠶業の情勢は之を例へば一つの潮流に棹さす各船の針路は同一にしても彼岸に達するまでに或るものは暗礁に阻まれ、或ものは激流に翻弄さるゝと言ふが如く、其の行路を異にするであらう。そして之が前途の難否を測定すべき觀察點として擧ぐべきは左記事項である。

一、對內的事情

イ、蠶絲業の發達の障害たるべき諸原因の除去として統制ある政治及教育の確立、交通機關の發達、金融、度量衡其他各種制度の整頓及一般產業狀態の發達等に關する狀況

ロ、蠶絲當業者の覺醒及斯業奬勵機關の活動による蠶品種の改良を始め育蠶製絲の技術及經營の改善等に關する狀況

二、對外的事情

イ、繭絲價の騰落と之を左右する銀相場の關係

ロ、生絲供給に關し日本蠶絲業との關係

ハ、生絲需要に關し歐米市場との關係及歐米の對支蠶業策

即ち支那蠶絲業が將來發達するには前揭各項の好轉に俟たねばならぬが、固より是等事項の悉くが絕對的必要條件ではない。のみならず其の或事項に至つては到底近き將來に改善を期し難いものがあり或はまた其の周境に於て前述の如く四川省蠶業は先づ交通機關の改善を急務とし、山東省蠶業は政情の安定を前提とするといふか如く各地方により其の事情を異にする。仍て以下支那斯業の將來に密接なる關係を持つ主要なる條件に就いて考察して見やう。

第二章　繭絲價と銀塊相場

一　支那生絲相場の變動

支那生絲輸出額の既往に於ける一進一退は之を端的に言へば蠶絲業經營上に於ける損得に歸着すべきは明かである。現に上海製絲業に徴するも製絲家の儲かつた年には必らず若干新設工場の加はるを見る。之と同樣に繭價の騰落も亦た打算に長けた支那農民の育蠶を左右するに與つて力ある。而して此の企業利潤に最も關係ある繭絲價に就き先づ既往に於ける絲價變動の跡を見るに左表の如し。

年次	上海器械絲（裸物）相場 最高	最低	平均	横濱市場器械絲裸物相場 最高	最低	平均	一九三年を一〇〇とする指數 上海絲	日本絲
一九一三年	八三〇	七三〇	七八〇	一、〇二五	八四〇	八九八	一〇〇	一〇〇
一九一四	九一〇	六四〇	七九五	一、〇三〇	七〇〇	八八五	一〇二	九九
一九一五	一、〇〇〇	七二〇	七九〇	一、一五〇	七五〇	八二五	一〇一	九一
一九一六	一、〇四五	八九〇	九八三	一、三五〇	一、〇五〇	一、一七一	一二六	一三〇
一九一七	九〇五	八三五	八七一	一、七五〇	一、一二五	一、三〇六	一一二	一四五
一九一八	八七〇	七二五	七八八	一、六五〇	一、三〇〇	一、四九五	一〇一	一六六
一九一九	一、〇五〇	七一〇	八五七	三、二八〇	一、三〇〇	二、〇九五	一一〇	二三四
一九二〇	一、二三〇	七九〇	一、〇一〇	四、三六〇	一、一〇〇	一、七五〇	一二九	一九五
一九二一	一、三〇〇	八一〇	一、〇四五	二、〇二〇	一、三九〇	一、五四二	一三四	一七二
一九二二	—	—	—	二、二二〇	一、五三〇	一、九一七	—	二一三
一九二三	一、七七五	一、三五〇	一、五二〇	二、四三〇	一、七八〇	二、一三六	一九五	二三八
一九二四	一、四〇〇	九八〇	一、一二二	二、一六〇	一、四五〇	一、八三七	一四四	二〇五
一九二五	一、一八〇	一、〇四〇	一、〇九八	二、一四〇	一、七八〇	一、九六六	一四一	二一九
一九二六	一、二六〇	一、〇一五	一、一二二	二、〇一〇	一、四三〇	一、六二六	一四四	一八一
一九二七	一、二五〇	八六〇	一、〇七二	一、五〇〇	一、二八九	一、三七六	一三七	一五三

註　上海絲平均相場は各月の最高最低を平均せるものにして一九二二年は調査を缺く。

上表に據り日支兩國の絲價指數を對照するに日本絲の相場は大正五年より躍然擡頭して爾來好調を持續せるも大正十三年以降著しく落潮に轉せるに反し、上海絲相場の好轉せるは漸く大正九年からで、最近に至るも依然其の步調を支へんとしつつあるは注目を要すべき點である。此事實は前半に於て本邦斯業が米國財界の繁榮を反映して著明なる發達を遂げたるに拘らず、歐洲市場を最大華客とする支那斯業が歐洲關係の惡材料に累せられて本邦の如くに大戰による好反響を享受し得なかつたことを語ると共に、その後半に於ては前者が圓建絲價の凄しい低落に遭ふて難色あるに拘らず支那に於て兩建絲價は依然比較的有利な地位にあるを示して居る。這は言ふまでもなく銀塊相場並に圓爲替の關係に基づくものに外ならぬが、特に銀塊相場は支那斯業の將來に重大なる關係を持つて居る。

二　繭價の騰落

次いで養蠶業の盛衰に直接關係を及ぼす繭價の騰落は固より絲價に左右さるべきものにして絲價を離れて繭價は考へられないが、然し各絹繭取引の項に述べた通り繭價の騰落に對しては絲價以外に之を動かすべき幾多の事實か存在して居る。重ねて之を擧げれば(一)廣東省を除き一般地方が殆ど春蠶一期に限られ、動もすれば競爭買の弊を醸し易く(二)交通通信及購繭機關の不完全なる爲めに繭價は地方的需給の原則に支配されること、及び(三)地方的に繭の供給は蠶作の豐凶により著敷增減を來し、同時に(四)是は育蠶技術の拙劣に基つくを以て繭の品質は年により地方により懸隔甚しく或は(五)之に座繰絲相場の關係するあり、絲價に對する繭價の關係は鈍感である。旁々養蠶家の收益には繭價の高低以外に桑葉相場及收繭量の多寡が之を左右するが故に本邦に於ける絲價の變動は直接養蠶業者に深甚の影響を及ぼすに反し、支那養蠶業は大勢の上から絲價の影響は免れないが、要するに未だその經營及組織の幼稚なる爲めに彼等の經濟は之によつて甚しくは動かされない。換言すれば彼等の生活が未だ海外經濟事情に制せられる程の位置に在らざることは斯業の前途に多々餘裕を示すものである。

三　銀相場と絲價

近時本邦に於ける生絲の價格は生產額の激增、人造絹絲の壓迫等に押されて著しく低位に置かれ、而かもその反撥力に乏しき感あるに反し、支那に於ける絲價(兩建)は今尙比較的有利なる地位にあるは其間支那の銀貨國たる本來の關係に基因することは今更言ふまでもない。更に金解禁までの一時的現象ではあるが、日米爲替變動の之に加はるありて、日支兩國絲價の消長は妄りに輕視すべからざる問題である。之を例へば上海市場の兩建絲價は普通紐育市場に於ける弗建絲價の變動以外常に銀の騰落による米支爲替の變動によつて高低するを免れない。加へて日支兩國絲價の間には假りに銀相場の變動がなくとも、例へば日米爲替に一割の變動を告げたとせば、此の變動は等しく日支爲替の上に現はれて支那絲の邦貨換算の上に一割の高低を示す譯にして、詰り銀相場の低落及圓爲替の昂騰せる場合には支那絲は日本絲に比し割安となり、銀相場の昂騰並に圓爲替の低落は之に反する關係にある。仍て先づ最近十數年間に於ける銀塊相場變動を見るに左表の如し。

銀塊及日支爲替相場

	倫敦銀平均相場「ペンス」	上海宛爲替平均相場(參着拂對百圓)兩
大正元年	二八・〇三一	七四・一二七
同　二年	二七・五八四	七四・六二二
同　三年	二五・三七六	八一・八七三
同　四年	二三・六五八	八七・八二二
同　五年	三一・二九八	七一・〇二五

同　六年	四〇・八七五	五五・一九七
同　七年	四七・五〇〇	四五・七四一
同　八年	五七・〇六二	三八・八四七
同　九年	六一・五六二	四三・六七九
同　一〇年	三六・八一三	六八・一四五
同　一一年	三四・五〇〇	六二・九三九
同　一二年	三一・九三八	六六・三九一
同　一三年	三四・〇〇〇	五五・三八五
同　一四年	三二・一二五	五三・〇五六

即ち大正十二年以降銀相場の低落せるに拘らず、本邦對支爲替の却て低落を示せるは之に圓價の低落が働けること今更言ふまでもない。而して之を本邦蠶絲當業者が大正十二年以降日米爲替變動によつて謂はば生絲相場の上に二重の危險あるは痛切に體驗せる所であるが、此點に關し銀貨國たる支那當業者にとつては遠く生絲貿易の當初より銀相場變動の危險は宿命的に免れない關係にある。殊に近世各國の多くが金本位に轉じてから銀は商品化して之に世界の經濟事情が悉く敏感し、而かも一種の投機目的たるに至つて其の相場は騰落常なく支那經濟界に深甚の影響を與へつつある。而して今後に於ける銀相場の大勢を窺ふに戰前十年間に於て銀貨は最低二二片より最高三二片の間を上下し、其の平均相場は二四片であつた。然るに世界大戰の影響は產銀を減少したるにも拘らず需要は驚くべき激增を示し遂に大正九年二月八九片余といふ有史以來の高値を見たのであつた。畢こ竟れは交戰國が軍費に莫大なる補助貨の必要を生じたると共に貨幣以外の用途も亦た戰時に於て僅少でなかつた爲めに旁々銀價暴騰の現出を見たのであつた。斯く銀價の騰落がその需要關係に支配さるるは當然であるが、世界大戰の終熄と共に戰爭に對する特殊的需要は漸次消滅し、爾來銀を需要すべき目當は印度及支那の銀貨國のみである。之に對し銀の供給は世界產銀の三分の二が銅亞鉛等の鑛山から此種金屬の副產物として產出する事實は假令銀價が低落しても直接產銀の減少を促すこと微弱なる關係よりして銀價の大勢は漸次軟弱の一途を辿るであらうと一般に見られて居る。現に最近銀の最需要國たる印度に金本位制採用の氣運を傳へらるるありて銀相場は二十五七片の間を往來し殆と戰前の相場に復歸せんとするものの如くである。斯くて本邦に於ける金解禁の曉上海宛爲替は七八十兩の間に落付くものと見て大過あるまい。

而して銀相場變動と絲價の關係を見るに、之を計算の上から言へば大年九年二三月の候橫濱市場に於ける絲價三千三百圓といふ空前の高値に對し之を當時八五片臺による對支爲替三十兩に換算すれば兩建絲價は九百九十兩に當り、更に最近に於ける日本絲千四百圓に對する對支爲替七十兩の換算値は九百十兩を示し、其間日本絲は三千三百圓より千三百圓に暴落せるに拘らず、支那絲は九百九十兩より僅に九百十兩に低落せるに過ぎない勘定である。此の現象は好況期支那絲斯業が銀高に累せられ、發達の好機に際會しながら却て之を著しく阻害したが、之に反し最近はまた日本絲の落潮甚しきに拘らず支那絲は銀安の好材料を控へて絲價の低落を支

へて居る譯にして之を金貨國の計算より見れば殆ど端睨すべからざるものがある。而かも所謂金解禁問題に關し例へば日米爲替四八弗に於て絲價千三百圓の場合は前者が一弗の昂騰を來したとすれば、その一弗の差に於て圓建絲價は必然二十六圓餘の低落を免れないが、之は日本絲のみが受くべきものである。斯く看じ來れば銀低落の趨勢は一般支那輸出貿易を始め生絲貿易の助長に至大の便益を與へつつあるばかりでなく、延いて將來支那絲輸出增加の曉之が日本絲に影響すること甚だ大なるものあるべきを思はねばならぬ。

第三章　日支兩國蠶絲業の關係

一　日本絲の壓迫

日支兩國生絲輸出額を對照するに日露戰役前後に於て兩者の輸出額は相伯仲し、當時横濱市場に於て銀塊相場の變動は絲況の上に相當有力なる材料であつた。即ち銀高は横濱絲況に好材料として迎へられ、銀安は之に反する關係にあつた。然るに銀相場は何時とはなくその働きを失ひ、今日横濱絲況に於て銀塊相場を云々するものなきに至つたのは日本絲の輸出額が戰後支那絲に比し幾倍となく激增するに至つたからである。同時に支那斯業は何としても低廉にして且つ潤澤なる日本絲の壓近を蒙らざるを得なくなつた。故に支那蠶絲業の將來に關する豫想は日本蠶絲業を度外視しては之を解決することが出來ない。若しも將來に亙り日本絲の供給が今後一層安値なるに拘らず其の生產が多々益々辨するやうなれば、支那蠶絲業は日本絲の壓迫から免れて擡頭するに困難であらう。

二　邦人の對支蠶業發展問題

斯樣に直接間接日本絲の壓迫を受けつつある支那蠶絲業の將來が本邦蠶絲業それ自體の歸趨によつて尠からず左右さるべきは自然の數であるが、啻にそれのみならず一衣帶水日支兩國

は之を脣齒輔車といひ、共存共榮といひ眞に兩者の生存問題たる關係に於ても、將又國境を超へ避けんとして避くべからざる聯鎖から見ても、兩國斯業の關係は一層の意義を加へ、自ら茲に我が當業者の支那斯業に對する對策問題を生ずるであらう。而して這般の事情に關しては之を三樣に考へ得る。即ち(一)支那蠶絲業に對しては故ら邦人の着手を俟たずとも本邦の長所とする蠶絲業上の技術及經營法は軈て支那人自ら之を吸集し得ることは自然の徑路である。更に(二)本邦當業者の對支發展は直接支那蠶絲業の發達を促進すること及(三)日支兩國の大局より論して支那の誘導啓發は邦人の使命とするが故に、積極的に支那蠶業の發展に努力すべといふ見解を抱くものとがそれである。蓋最近支那に於ける新式工業に於て燐寸石鹼硝子其他雜貨等低級工業の發達は相當見るべきものあるが、是等は孰も本邦より機械器具を購入し、本邦に範を採り、その法を學べるに負ふ所が甚だ大である。然るが故に本邦に於ける優秀なる育蠶製絲の法は行く行く支那當業者が之を習得するに至るであらう。況や本邦當業者の對支蠶業發展に至つては之が直接支那當業者の覺醒を促し、之に範を示すものなるを以て斯業の發達を助長すべきは言を俟たない。茲に於て對支蠶絲業の發展問題に關しては國家的見地から之により我國が何程の利益ありや、また支那蠶業に對し如何なる影響を與ふるかの二點に立脚し論者によつて見解の岐るる所である。

固より我國の一般對支經濟的發展は國策上必然努力せねばならぬことは言ふまでもないが、之に就いて先つ既往に於ける對支發展を顧みて最も顯著なる進出を試みたるは我國經濟力の最も膨脹せる世界大戰直後と、續いて華府會議の結果關稅關係から我が紡績業者の目覺しい發展振とを擧ぐるであらう。此の紡績業に次いで來るべきものは蠶絲業の如くにも考へられる。但し茲に言ふ蠶絲業の對支發展とは主として在支製絲經營を指すものであるが、現在支那の國情に於て製絲業は最も有力なる事業の一つにして、而も之が經營に最も特技を持つて居る邦人が之に當ることは事業の性質上紡績業の如くに大袈裟でなく、對支發展策として最も恰好なる事業の一つと言ひ得やう。然し蠶絲業が我國輸出の大宗にして且つ原料の悉くが國內に生產され、全國二百萬養蠶業者の利害に繫るからには單純なる對支經濟發展から割出して之を論ずるを許さぬ。斯るが故に邦人の對支蠶業發展問題に關しては暫々贊否兩論を聞くが其の利害得失を一朝に論斷し難く、試みに兩者の根據とする理由を約言するに大要次のやうである。

一、蠶絲業の對支發展を否とする說。最近在支紡績業の發達は驚くべきものがあるが、國家的立場より見て之によつて如何なる利益を見たか、その得るところのものは徒らに支那紡績業の發達を促したるに過ぎない。この失敗に鑑み國家經濟上極めて重大なる蠶絲業に於て再び前者の轍を覆ませたくないといふもの。

一、對支發展を可とする說。支那蠶絲業の大勢が徐々に發達しつゝある以上は、徒らに拱手傍觀して之を競爭的立場に置くよりも進みて對支發展により日支當業者の提携を企て、將來起るべき衝突を避けむとすると同時に名實共に極東生絲の供給權を把握すべしといふもの。

惟ふに叙上の贊否兩端にはその立脚に夫々相當の根據を有し、未だ國策上其の兩者孰れを選

ぶべきか遽かに決すべからざる問題である。而かも斯業の對支發展は實際問題として今日の變幻極りなき日支國交の上今少しく兩國民の理解ある日支親善を先決問題と爲し、且つ邦人の在支蠶業經營に相當の利潤あるべきことを前提とすべく、是等の事實を度外視しては徒らに之れが對策を論するも空虛に終らざるを得ない。而して此邊の關係に就きては要するに今後の事實に徴する外なきが故に、其の機に至つて本邦斯業の重要なる程度を考慮に入れて始めて內容ある對策を得るであらう。旁々此の點に關する本書の目的は之が資料として支那斯業の實體に明にするを主眼とするを以て、深く之が是非の議論は差控へ、それよりも既往に於ける我が對支蠶絲業關係事業を一瞥するであらう。

三　東亞蠶絲組合

既往に於ける在支蠶絲業經營を顧みるに先づ第一に大正五年設立を見た東亞蠶絲組合を擧ぐるに躊躇せぬ。抑々此の組合は夙に支那蠶絲業に關し研究と理解を抱ける今井五介氏を中心に、澁澤子爵及吉池慶正氏を肝煎役として之に有力なる我が當業者の殆ど悉くを網羅せる一團であつて、固より尋常一樣の對支企業ではなかつた。それには組合成立當時の情勢を述べなくてはならぬが、其頃我が蠶絲業は戰時米國財界の好反響を受けて俄然躍進の勢を示しつゝあつたものゝ、一方には勞銀を始め諸物價の昂騰に漸次生產費を高めつゝある傾向は我が國蠶絲業が追々最頂點に達し、軈ては伊佛の跡を追ふて支那に移るべき運命なるかに思はしむるものがあつた。故に我が當業者としては積極的に對支進出を企て、日支當業者提携の下に支那蠶絲業經營に當るに如かずといふが當時一般識者を支配せる意見であつたものゝ如くである。そして將來起ることあるべき邦人の在支經營に關してはそれが本邦斯業に關する事の甚大なるに鑑み豫め之を我が當業者の協同事業に期せねばならぬと考へられた。斯る折柄當時米國絹業者に唱へられた支那蠶絲業開發の聲は恰も警鐘の如くに本邦當業者の神經を刺戟する所あり、旁々我が事業界に於ては世界大戰の齎らせる資本の蓄積は之を滔々支那に投じて已まぬ活躍時代であつたこと等の諸事情が此の組合の生れたる緣故である。

斯くて東亞蠶絲組合は組合員四六名、一口一萬圓として出資額七拾五萬圓に達し、澁澤男及吉池氏を顧問に、今井五介、藤瀨政治郎及茂木惣兵衞の三氏が理事に當り、先づ第一着に之が事業の前提として、現に支那當業者の行ひつゝある上海式製絲經營法に關し實地研究の必要を認め、大正六年新絲期より上海に瑞豐及元大兩絲廠約五百釜を賃借經營すると共に山東省青島に新設工場を置いて事業を開始するに至つた。一方組合本來の使命とする目的に向つては當時疲弊困憊の極、賣物の續出せる上海及附近製絲工場大多數の買收、繭資金の放資其他上海を中心とする蠶絲業の實權を把握するに要する資金に關し日本興業銀行に千萬圓の低資融通方を交渉して略ぼ成案を得たものの如く、また同年末には上海製絲界の有力者たる莫觴清及邱毓庭兩氏の來朝して澁澤子爵を始め有力者と折衝する所あり、此の計劃は着々進捗するかに見えた。去る程にその着手せる製絲經營は生憎慮外の困難に蓬着して業績を擧ぐる能はず、經營二年後の決

算期に至つては出資額の一半を失ふの已むなきに至つた。固より這個の製絲經營は一つの調査機關たる性質のものにして、本來から言へば出資額七拾五萬圓も研究費に外ならなかつたけれども此業績の不良は痛く組合員を失望せしめ對支經營に對する興味を喪失せしめたことは爭はれなかつた。斯る形勢に累せられて遂に組合は所期の對策に何等手を初むる能はず行惱みの裡に偶々大正九年の恐慌來に折角一大使命を抱いて生まれた東亞蠶絲組合も遂に組織變更の已むなきに至つた。而して何故に前記製絲事業が蹉跌せるか之れが原因を明にするは徒爾ならざるべく、左にその主要なる點を指摘するであらう。

一、大正六七の兩年度上海製絲業は最大華客たる歐洲市場の戰亂による需要の激減、運賃保險並に銀塊暴騰等に制せられ何人が局に當るも損失を免れない業界の厄年であつた。

一、事業開始當初六十兩前後を唱へたる對支爲替は其後專ら漸落の一途を辿り經營資金の換銀は當初より當業者を惱ましたる問題であつたが、遂に銀行の手によつて最も逆なる四十兩見當の相場を以て餘儀なく切替せねばならぬ破目に陷り、これが差損は甚大であつた。

一、前記事情により折角經營資金を擁し乍らも之を擔保に銀資金を借入運轉し其間金資本の預金利子と借入銀資金に支拂へる利息との差に於て失ふ所が尠くなかつた。

一、上海生絲市場の賣行不振によつて生ぜる滯貨百八十俵は偶々大戰終熄により好反響あるべきを豫想して自ら里昂向委託積送せるに時態は却て豫期に反するものがあつた。

其他調査的事業として生絲生產費の增嵩せるは言ふまでもないが、要するに是れが原因は製絲經營の內容に基づくよりも、寧ろ之を時運の非に歸すべきものであつた。斯くして遺憾乍ら組合抱負の一端をも行はずに解散するに至つた。若しも之れが對策の實行を見たならば今日支那斯業の上に相當の地步を占め得たであらう。假りに否らざるとするも之を當時の對支投資が例の西原借款を始めその多くが貸倒れの現狀から見れば、安全地帶上海にある製絲工場の買收の如き遙に確實なる投資であつたであらう。然し這は死兒の齡を算する類に過ぎないが、兎も角も東亞蠶絲組合によつて支那蠶絲業の研究に一步を進め得たことと、組合の後身たる日華蠶絲株式會社が山東省を基礎に牢固たる勢力を扶植せる事實から見れば、短命ながら東亞蠶絲組合の成立も强ち無意義ではなかつた。のみならず此種問題の如き本邦蠶絲業の將來に關する事業に對し當時我が當業者が一致協同し奮起せる意氣に至つては、今日多難なる斯界の現狀に照らして轉た感なきを得ぬ。

四　生絲輸入稅撤廢問題

密接なる日支の關係に於て邦人が殆どあらゆる對支事業に着手し居るに拘らず、相互に主要產業たる蠶絲業に關しては前項事業を除き特に言ふべきものゝないのは、一面我が關稅定率法により輸入生絲に對して從價三割の障壁關稅を設けて居る結果に外ならぬ。而してこの定率法に關しては昭和二年四月一日勅令第五九號に依り同法第九條第一項の免稅規定の適用を受くることになつて輸入稅拂戻の途が開かれ、その拂戻率は從價二割五分となるに至つた。卽ち之によつて支那生絲の本邦向輸入の途は從來に比し幾分緩和されたものゝ、然し未だ(一)生絲を

輸入する場合には先づ輸入税金に相當する金額の擔保提供を要し(二)輸入生絲を原料とした製品を輸出する時に至つて前記提供金の拂戻を受くると共に(三)其間これが製造に際し煩鎖なる手續を要するが故に實際問題として之を利用するには幾多の不便を免れず、生絲の輸入税撤廢問題は尚ほ將來に殘された問題である。而して之れが撤廢の要望は既に絹織物業者の間に長らく唱へられて來た問題であるが、就中大正十二年日本輸出絹同業組合聯合會は此の問題に關し關係當局に之が撤廢方の建議書を送致した。試みにその要望する理由を摘出して見るに大要の次のやうである。

近年輸出絹織物貿易は不況にして漸次輸出減退の趨勢であることは統計表の示す通りである。此の頽廢を挽回するには支那の生絲を輸入し、其の特質を利用して印度南洋朝鮮人等の尤も嗜好に適する織物を製造して各其國に輸出することが良策の一つである。例へばその嗜好に適する支那紗の類の如き堅靱にして特種の風韻を有する織物は支那生絲でなければ出來ないのであるから、是非之を輸入する必要がある。我國の如く近時蠶種の改良統一せられたことや又製絲工場も漸次大規模となりて大部分が器械絲となり座繰絲は殆と其蔭を潛むることとなりたるにより特種の織物に應用せらるゝ如き特色ある原料生絲を得ることは絶對に不可能となつた。然るに支那に於ては特色ある座繰絲が今尚ほ各地に存在して居るから、之を輸入し織物に利用せば頗る有利であることを確信する。福井縣絹織物同業組合は支那生絲を以て羽二重の試織を爲さしむる計畫を樹て組合費を以て關税補助金二千圓を支出して、支那生絲百二十貫匁を輸入當業者をして本邦生絲を經に支那生絲を緯に使用して羽二重を試織せしめたる上精練仕上を爲したるに何れも精巧にして品位光澤等普通羽二重に比し何等遜色なく、一般に好評を博したるに付更に海外に輸送し需要者側の批評を求めたのである。然るに其後紐育駐在の商務官よりの報告に依れば此の試織羽二重は純日本生絲の從來の平羽二重に比し價格一割乃至一割五分低廉なる點に於ては相當需要あることは前途有望なりとの趣旨であつた。……從前支那の繭は無税であり又柞蠶絲も無税であるのに、生絲並に柞蠶絲及絹絲紡績絲に課税せらるることは意義を爲さぬことであるから、今一歩を進めて織物原料の供給を圓滑ならしむる爲め、生絲及柞蠶絹絲紡績絲の關税を撤廢せられむことを切望して已まぬ次第である。

此の絹織物業者の要望に關し當局は之に直接利害關係を持つ蠶絲業者の意見を聽取する所あり、蠶絲中央會はその諮問に對し左記理由を以て反對意見を答申した。

一、生絲は本邦輸出貿易の大宗であつて世界各國の總產額の五割二分を占めて居るのみならず內地消費も二十五萬梱に上り、眞に重要產業たるを失はない。然るに一度生絲の關税を撤廢し安い支那絲の輸入に便益を與へるならば、量の多少は別問題として蠶絲業者が一大脅威を蒙むるは勿論延いては多數養蠶業者に迄其の累を及ぼし、本邦經濟界に測るべからざる損失を與へるであらう。故に中央會として反對の態度を執らざるを得ない。

二、支那絲は格安であるのと、其の取引が銀建である關係から銀相場の變動如何によつては多量に輸入されるであらう。此の點に對し絹物業者は餘まり樂觀過ぎる。

三、支那絲が是非必要でありとするならば、支那繭を輸入しても宜くはないか又內地品でも座繰絲は十分其の目的に適合するものであらう。製絲方法の改良次第で支那絲の代用品を生產する

ことも出來る。此等の便法あるに拘らず少量の支那絲輸入の爲めに本邦蠶絲業の根蔕を危くすべき關稅改正を輕々に企圖するが如きは甚だ策を得たことでない。

斯樣に輸入稅撤廢問題に關し兩者が各自の立場よりして贊否を異にして居るが、之を要するに絹物業者は支那生絲を輸入してその特色を利用し印度洋其他輸出向織物を製造するといふも支那絲に就いて輸入の見込あるは格安なる座繰絲なるべく、此種生絲は內地向織物原料にもまた甚だ好適して居るのである。故に支那生絲の輸入は絹物輸出貿易振興の一策には相違ないが、それは兎も角として絹物業者の肚裡は「安い支那絲を使いたいが、之には關稅があるから之を撤廢して貰いたい」といふにある。之に對し蠶絲業者は「安い支那生絲が這入れば輸出向不適品を始め、廢絲及屑物利用等が影響を受くべく、而かも是等のものが今尙ほ蠶絲經濟に重要な關係を有するからには支那絲の輸入によつて之れが脅威を受くるを懼る」との懸念から反對して居るものと見られる。然し乍ら是等內地用のものは支那生絲の輸入を俟たずとも既に人造絹絲及絹紡絲によつて壓迫を受けつゝある。故に此の問題は兩者が各自の立場を離れて國家的見地から生絲輸入撤廢と絹物業の關係及蠶絲業の蒙るべき影響の程度とを彼此考察すると共に更に此の問題が支那蠶絲業に及ぼすべき影響を閑却すべきではない。

即ち輸入稅撤廢が支那蠶絲業に如何なる影響を及ぼすかといふに、言ふ迄もなく之を支那斯業から見れば新に有力な販路を加ふると同樣な效果となる事を看過し能はぬ。加之從來支那に於ける邦商の活動は一度有利なる商品があれば競ふて之に染手し、支那商人に魚夫の利を占めらるる事例に乏しくはないが、若し生絲輸入稅の撤廢を見たならば在支邦商にとり支那絲は有力なる對日輸出品として恐らく之を看過しないであらう。斯くて邦商の座繰絲產地買付となり或は進んで製絲經營となり直接間接支那蠶絲業の發達を促進するを豫想せねばならぬ。而して輸入稅撤廢による支那絲の輸入に對する見込に就いては(一)本邦に於て消費さるるものと(二)我が生絲市場を中繼として再輸出すべく輸入さるゝものゝ兩方面より之を觀察すべきである。既述の如く支那絲の需要が今尙ほ歐洲向を主とする事由は一面歐洲絹業が米國と違ひ、その規模並に業態に於て支那絲を消化するに適當なるべく、隨て米國よりも歐洲に近い我が絹業の狀態に見るも或は近時盛に輸入さる柞蠶絲及絹紡原料たる屑物に徵するも我が絹業が支那絲を利用し得る餘地の大きいことは察するまでもない。此の狀態を基礎に支那絲を左右するものは生絲の品質及價格の二點であるが、先づ價格の點に於て昭和三年七月上旬橫濱生絲市場の最優等格千二百五七十圓を唱ふる當時各種支那絲の邦貨換算相場を見るに上海器械絲特優品一八二〇圓、同裾物一三〇〇圓、山東黃石器械絲一三二〇圓、同四川絲一二四〇圓、七里再繰絲上物一〇七〇圓、同裾物九〇〇圓及七里大枠絲八三〇圓、それに廣東絲十五中物一〇五〇圓の見當相場にあつた。而して上海絲は特色を以て歐米市場に特需あり本邦に於て之を利用する餘地乏しきも、廣東絲に至つては價格廉にして且つ縮緬其他の原料として之が利用は大に興味があるであらう。また山東四川器械絲はその一半が日本式繰絲法により格安なるを以て相當利用の餘地があるべく、更に七里絲に至つては我が座繰絲達磨物の優等品に當り、我が當業者の最

も著目する所であらう。而かも其の産額は甚だ豐富である。其他現時印度向たる四川湖北の黄繭座繰絲は玉絲及絹紡絲の代用とし或は耳絲用として、之が利用は有望なるべく、一度輸入の道が拓けたならば各種生絲は相當數量の輸入あるべきを想察さる。勿論斯樣な需要が支那絲に加はつた場合絲價は當然昂騰すべしとは考へられざるに非ざるも其間銀相場の高低が之に働くことを看過してはならない。

轉じて上海及廣東市場に於ける生絲取引狀況は之を我が生絲市場に比較すれば買賣相方にとつて不利とする點が尠くないことは既述の通りである。此の支那市場に於ける取引上の缺陷に鑑み輸入稅撤廢の曉支那絲が先づ本邦市場に送られ、之を中繼として歐米市場に再び輸出するの徑路に出る可能性が頗る多い。此の點に於て本問題が我が生絲貿易の上に及ぼす影響は甚大と言はねばならぬ。而して其間商機の存する所之に一利一害を伴ふを免れないが、大局から言へば本邦絹織物業の發展策として將又生絲供給の實權を收むる見地よりして生絲輸入稅の如き保護關稅は之を何時までも存置して置くべきでなく、寧ろ叙上の目的を達成せんが爲めには之れが撤廢を必要とするであらう。然しながら是には我國蠶絲業の現狀から見て今少しく安定せる業態を前提とせねばならぬ。之を今日の如く生絲産額が增加する一方絲價の變動に遇へば忽ちに救濟を叫ばねばならぬ狀況に在つては生絲輸入稅の撤廢の如き愼重に取扱はねばならぬ問題である。

第四章　支那蠶絲業と歐米の關係

歐米諸國の支那蠶絲業に對する、需要國として生絲需要の消長が支那斯業に至大の關係を有するは言ふまでもないが、進みて彼等が指導的地位に立ち支那蠶業の開發に當るなきか所謂歐米の對支蠶絲業策は固より一顧を拂ふべき問題である。之を既往に於ける彼等の言動に徵するも既に光緒十五年寧波稅關長コンハート氏は蠶務說略なる一書を著して支那政府に對し養蠶公院の設立を說き、伊佛の新法を採用して蠶業の改良を策すべきを建議した。次いで光緒二五年上海稅關長レイセス氏も亦た江浙兩省の總督巡撫に宛て育蠶條陳なる意見書を致し、當局の採るべき蠶業政策に付き協議する所があつた。更にまた同三十二年には米國絹業協會は廣東省總督及商會に對し廣東絲の改良を勸告した。而して是等は何れも反響の見るべきものがなかつたが、兎も角も歐米人が早くより支那蠶業の開發に著目せるは明かである。斯くて近年歐米人の希望は漸次其の度を加ふるに至つたが、先づ歐洲人は支那斯業に對する多年の經驗から斯業の基礎たる養蠶業の改良に着目し、米國人は生絲消費者の立場からして生絲品質の改良を唱導し、この特徵ある兩者の啓發運動は一つは中國合衆蠶桑改良會とし、他は上海萬國生絲檢驗所となつて具體的に現はれたと言ふべきである。（第二編第一〇章）蓋歐洲人の支那蠶絲業に關しては夙に上海の製絲經營に或は支那生絲貿易に之が先鞭を付け頗る密接なる關係を遂げたる今

日更に積極的に新なる勢力を扶植せむとするの意圖を窺ふに足るものなく、寧ろ其の現狀に滿足せるものゝ如くである。現に歐人の手に成立せる蠶桑改良會の如きも畢竟蠶病害による支那生絲の品質劣化の傾向に對し斯業を保護し依つて以て其の發達に資せむとする好意的援助を與へたるものと言ふべきである。そしてまた數年前米國絹業者の頻りに慫慂せる再繰式採用に對し歐洲絹業者が之に冷淡なりしが如きその一班を語るものである。

反之自國消費生絲の大部を日本絲に俟たねばならぬ米國絹業者に至つては支那蠶絲業開發に對する希望と熱心の度に於ては前者と同じからざるものがある。けれども米人の一般對支經營は日未だ淺くして立脚の地盤が强固ならざる故に彼等の眞の啓發事業は之を將來に俟つべきものゝ如くである。此の點に關し先づ米支の一般關係から見るに所謂支那問題を中心とする列强の間に於て從來米國の對支經營は立遲れの立場にあつて現に支那に一線の鐵道、一個の碼頭をも持たぬ。けれども其の對支策は傳統たる門戸開放、機會均等の兩主義を基調に頗る圓滿なる發展を遂げ、殊に華府會議以來一層その地歩を進め、現在支那の上下を通じ米國には多大の信賴と深厚なる友誼を寄せて居ることは言ふまでもない。而かも之に與つて力あるは米國の對支文化事業であるが、これは遠く數百年前から始つて今日約三千の米國宣教師が支那各地にあつて傳道醫療教育及救貧事業に活動して居る。のみならず近時嶺南大學金陵大學及山東大學等に年々巨額の資金を注入し現代の支那青年に米國式教育を受けつゝあるものゝ尠くないことは看過すべからざる事實である。斯くて親善なる米支國交を基礎に米國の對支經濟發展は著しく目立つて來た。勿論それは日英の貿易額には未だ比すべくもないが、最近拾ヶ年に於て米支貿易額は三倍餘に進み支那貿易に於て戰前の第五位より第三位に進み、且又在支商社數に於ても約三倍を示して居る。而かも米國の對支輸出品は機械器具等の工業品か左なくば石油の如き特產品にして之を日英の棉製品を始め支那產業の發達に伴ふ所謂國貨と抵觸すべき輸出品に較ぶれば米國の對支貿易の前途は甚だ有望と言ふべきである。然るが故に米國の對支經濟策は支那をして米國品の消費市場たらしむるにあるべく、先年私は在上海貿易官ホワート氏に就いて對支蠶業意見を叩けるに同氏は「生絲の如きは日本絲が安ければ日本絲を買ひ高ければ支那絲を買ふまでゝあつて米國が對支貿易に傾注するものは米國品の輸入にある」と言へるが如きは蓋その一般を窺ふものである。隨つて米國の對支國策から言へば支那蠶絲業の開發策は第二義的に屬するものであらう。けれども直接米國絹業者にとつてはその供給を壟斷する日本絲を牽制すべく支那蠶業を開發するを得策とし、而かも最近優等絲を物色する傾向に於て優良なる上海絲に興味を抱ける機業者が支那蠶絲業の發達を冀望するは當然であらう。即ち米支生絲檢査所といひ、或は東洋養蠶改良資金の募金の如きその一端と見るべきである。然しながら既述の如く米國絹業者の期待せる上海生絲檢査所はその現狀から言へば僅に無いよりは優るといふ程度の外には見るべき效果を擧げて居ない。這れは勿論育蠶製絲の技術を缺き支那人及支那斯業に對する理解經驗の乏しき米人として直に斯界に目覺しい活動を望み難く畢竟米人の支那蠶絲業に對する現狀は之を調査研究時代と稱すべきである。現に既

述養蠶改良資金の如きも其の一二割が使はれた儘で之れが使途に就いては上海生絲檢査所や支那斯業に興味を持つ芝罘稅關長等に劃策されて居るものゝ如く、將來何等かの計劃となつて現はるゝであらう。けれども之に一歩を進めて支那生絲市場を掌中に收むるが如き企圖に至つては固より彼等にとつて容易ではない。蓋これには前述の如く支那蠶業及技術の知識經驗に乏しきと共に事業の性質といひ、豐かな生活を持つ米國の國情から見て支那に活動すべき人材に乏しい感がある。然るが故に米國が支那蠶絲業に對する希望を滿足すべき日は米國の資本と支那當業者の經營とか完全に結合した時であらねばならぬ。而かも之には支那當業者が米國の資本を誘致するまでにその信用及經營能力を高めねばならぬが、それには相當年月を要せざるを得ない。之を要するに對支蠶業策に關しては間々邦人が之を拱手傍觀するに於ては歐米人が之に着手して支那蠶業の實權を掌握するであらうとの意見を聞くも歐米人の支那蠶業開發運動によつて遠かに斯業の面目一新を想像するは早計と言ふべく、寧ろ支那蠶絲業の將來に直接間接の影響を與へつゝあるものは本邦蠶絲業であること思はねばならぬ。

第五章　支那蠶絲業の將來

最近支那蠶絲業を視察し或は之を論ずるものゝ意見を綜合するに各その觀察點を異にするも、一般に「支那蠶絲業が近き將來に急激なる發達を遂ぐべしとは考へられない」といふ結論に略ぼ傾いて居るものゝ如く、玆を以て本邦當業者の間に支那蠶絲業が兎角忘れ勝なのが刻下の現狀である。固より未來に關する此種豫想は之を適確に斷定するを困難とする以上支那現下の諸般事情より推せば斯樣な結論を以てするのが穩當であらう。けれども一歩を進めて叙上の結論に於ける「近き將來に急激なる發展」とは大體若干年月の間にどの程度の發達を指すものなりや明瞭を缺き之を如何樣にも解釋し得る點に於て漠然たる所論と言はねばならぬ。それは勿論最近數年來當業者さへ聊か意外とする程の膨脹を來せる我國蠶絲業に對し近く支那斯業が肉迫し來るものは到底考へられないが、今日世界に於ける生絲の需給は日本生絲の供給のみを以てしても殆ど飽和狀態に近い現狀に見て多少共生絲の增產が、我國蠶絲業に尠からず影響すべきは察するまでもない。而して之に直接關係を有するは器械絲輸出額にあるが、之に對する將來の見込に就ては各編末に述べたる通り日本生絲が今日以上に著敷價格の低落を見ざるに於ては恐らく拾數年の後には先づ(一)廣東絲は現在の五萬擔より八萬擔(八十斤入拾萬俵)に(二)上海絲は五萬擔より拾萬擔へ(三)四川及山東絲は一萬擔より二萬擔へと夫々增加すべき豫想を

述べた。即ち之を綜合して現在器械絲輸出額約拾壹萬擔は拾數年の後には二十萬擔に達するであらうとは現狀の推移に鑑みて判斷し得らゝ數字である。而して將來異常の事實に促されて突發的に躍進を來さぬとも限らぬし且つ之に對し日本生絲輸出額の增加も亦た計り知れないが、兎も角も支那生絲が前記豫想輸出額に達したとすれば之によつて我が生絲市場は相當牽制さるゝを免れないであらう。總而言之支那蠶絲業は將來發達し得る幾多の條件を備へて居るが反面之れが發達を阻止すべき諸種障害の横はるも亦蔽ふべからざる事實である。けれども最近その障害を排して伸脹せむとする萠芽と之を助長すべき機運とが漸次動きつゝある。重ねて竝に是が事實と認むべき諸點を擧げるならば次のやうである。

一、日貨排斥及關稅問題等に伴ふ所謂國貨の奬勵は延いて國家的經濟の觀念を高めつゝあるが、此の傾向は將來輸出貿易の振興を唱ふる曉支那として輸出品の第一位を占むる蠶絲業が先づ第一に注目さるゝであらう。

一、產業の發達に必要なる交通機關は漸次改善しつゝあり、之によつて地方產業が面目を一新するに於ては比較的副業の缺如せる農家にとつて勞力の利用は養蠶業に俟たねばならぬ。

一、日本絲の絲價が千二三百圓を維持するに於ては銀塊相場の大勢より見て支那に於ける繭絲價は依然有利なる地位を保ち得られる。

一、現在繭絲價の生產費を高めて居る主要原因たる一般技術の拙劣は多少共その向上によつて一層蠶絲業經營を有利ならしむるは言ふまでもないが、近時蠶品種の改良稚蠶共同飼育及夏秋蠶奬勵等の新運動は漸く端緒を得むとする氣運を胚胎して居る。

斯くて支那蠶絲業の將來は之を一本の藁の靡きによつても風の方向を知り得るとせば、前揭諸事實は正しく斯業前進の曙光を示すものに外ならぬ。殊に蠶絲業に關する經營及技術が向上すべきと否とは一般政治、教育、經濟及國民能力等諸般事情の相寄り、その集結せる力に俟つべきものであるが故に、育蠶製絲上に於ける彼等技術の程度に就いては我が當業者の濫りに看過するを許さず、總ては之を目標に支那蠶絲業の將來を推定して過つことなからん歟。

附錄

一、上海地方製絲工場一覽表
二、上海玉絲製絲工場一覽表
三、廣東地方製絲工場一覽表
四、支那各種生絲相場表
五、支那外國貿易額と蠶絲類輸出價額
六、支那蠶絲類と主要輸出品の比較
七、最近拾年各種生絲輸出額
八、最近拾年各種副蠶品輸出額
九、一九二七年支那生絲開港場別輸出高表
一〇、一九二七年柞蠶及副蠶品開港場別輸出高表
一一、支那蠶絲業大觀索引

1、上海地方製絲工場一覽表

昭和三年度現在

(一) 上海 九五廠 二三、五三四釜

虹口方面 (二二廠 五、〇九〇釜)

工場名	釜數	所在地	經理人	商標	經營年數
瑞綸	六一〇	密勒路	吳中伯	金銀紅錨、HY、金水牛	一五年以上
通緯	二八〇	梧州路	俞竹賢	綠軍艦、TW、海神、飛麒麟	八年
(英)裕經	二〇八	同	王稚泉	金鷹鐘、綠兵船、海神、湖山	九年
安豫	二四四	同	黃吉泰	青年、鼠、足珠	四年
(英)雲成	二一六	天同路	沈榕村	金雲成、YZ、金寶塔、氷河	一五年以上
祥成	二六四	同	張佩紳		新規
(伊)同豐永	三四〇	同	朱靜庵	日鶴、和平、新世界、金蝙蝠	七年
開泰	二三六	同	單福林		新規
(英)統益	三五〇	分水廊	倪錦璋	MD、MCC、	一五年以上
永和	一二〇	同	蔡風若	湖山	新
祥和	一三六	同	吳竟成	香檳、ZW	五年
義豐	二一六	同	朱辛生		新
興論	一〇八	同	費仲鄉		新
天昌	三五〇	張家巷路	張少鄉	天昌、元師、猩々	九年

(伊)元豐永	二四〇	天寶路	朱靜庵	同豐永ニ同シ	一二年
恒鑫	一二〇	張家巷路	潘芝英	鷹鶴、楊梅	新
緯餘	二〇八	同	王紫軒	幹指南針魚船	三年
厚福	二〇八	同	程道鄉	前門、無線電、寶船、猴蝠	二年
公益昌	二四〇	天寶路	朱靜庵	同豐永ニ同シ	新
益豐	二〇〇	香煙橋	同	同	新
新新	一〇〇	通州路	朱和生	湖山	新
錦雲	一六八	兆豐路	汪錦甫	綠飛機	八年

天道庵方面 (一〇廠 二、三六四釜)

勒豐	二〇〇	橫濱橋	蔣芝潤	龍馬	二年
楚信	四〇〇	同	陳瑞庭	楚信、藍麒麟、地球、紅天馬	新
鼎源	二五六	同	張鶴聲		新
永太興	一六〇	天通庵	吳漁生	五蜂、九峰	新
德興勒	二四〇	同	蔣潤禾	潤木、汽油桶、天宮	新
盈餘	二〇〇	嚴家閣	曾佐麟	藍象、黃象、鴻運牌	二年
豫豐	二二八	顧家灣	黃吉文	美女、足球、九鼎、D	九年
九經	二四〇	同	姚甫鄉	指南針、金字塔	六年
駿盛	二四〇	同	沈駿臣	金双兔、凱旋門、	二年

(伊) 大綸	二〇〇	海界橋	吳松岩	DL、日鹿、革盛頓、金鼎	一五年以上

租界濱北(老閘)方面 (一二廠 二、五二二二簽)

裕綸	二五六	北蘇州路	潘芝英	九蜂	新
綸大	一八二	同	鄭蔭泉	靈醫、石紅	新
中華	一六二	阿拉白脫路潘	芝英新		—
鑑豐	一六〇	同	孫涵如	歌舞、密月、千里鏡、金双刀	五年
牲源	二八〇	同	裘仲稱	漁船、大車頭	二年
寶經	三三六	文極司脫路	朱枋行	双鷹球、飛輪、一把絲	新
緒康	一八四	北蘇州路	沈[illegible]和	大鵬、月季花	二年
緒興	一九二	同	俞馨如	絲軍艦、海神	九年
永豐潤	二三四	甘肅路	吳履鄉	日鶴、日兎、日鹿、藍三鹿	七年
瑞和	一三二	唐家街	吳坤山	瑞和、漁翁	八年
(英) 綸祥	一九二	同	費少鄉	山鶴、双鴿、石臘紅、青龍	五—
慶豐	二一二	同		(藍双獅、日鹿、華盛頓)	三年

閘北方面 (四一廠 九、四八二簽)

(德康	二二四	滿州路	鄭仲瑛	CS、親々、勝鼓	三年
宏純	二二四	同	朱竹賢	將軍、鼠手、童麟	三年

利豐	一八〇	同	錢敬之	金双象、龍馬	二年
(瑞豐	二四八	長安路	曹金可	TS、金飛龍	一二年
啓昌泰	二四〇	同	懷芝琴	飛鶴	二年
益豐	一六〇	同	張其麟		新
(協昌	二八八	同	徐祖純	天來龍、大來、天來馬	新
啓昌永	二四〇	同	玉仲鄉	袖照、鷹鶴	新
緒昌永	二六〇	光復路	張芝才	倍耶、袖照、双鶴、地球	七年
順豐	四三二	同	黃錦帆	八駿、金桑樹、金燕	六年
久大	二四〇	同	王子琴	藍龍、久大、牡丹、天馬	三年
百司福	二〇八	同	史馨生	金熊、天成、SSS、黑双虎	一〇年
英安	二三〇	同	張韻生	WTK、彌々佛、NTK	一五年以上
(慎康	二四〇	光複路	許韻江		三年
百司二	一八四	同	史馨生	百司福ニ同シ	五年
合豐	二四〇	恒豐路	懷芝琴		新
鼎義	二二四	同	金良方		新
協豐	二二四	同	屠幼琴	協豐、YFF	五年
緒昌慎	二〇八	同	薛浩峯	金猴、袖照地球、双鶴	三年
恒昌新	二〇八	同	陳明善	金猴、飛鶴、珊瑚、楊梅	三年
鼎昌盛	二〇八	同	蔡鳳若	同	新

緒昌福	二〇八	同	史馨生	金黑虎、金熊、天成	七年
元元	二〇八	長安路	汪甫鄉	元々、FC	一三年
隆記	二〇八	同	茅也琴	石像、萬年青、竹林	三年
久勝	二〇八	同	徐道生	靈牌、蛾蝶、竹林	三年
永源	二〇八	同	莫永清		新
久泰	二六〇	同	姚鏡波	飛艇、親々	新
泰來	二六〇	同	徐祖純	天來龍、大來、天來馬	六年
大來	二二〇	共和路	張其麟	同	九年
天來	二二八	同	邸毓庭	同	八年
豐泰元	四一六	大陽橋	孫榮昌	金双豹、豐泰、玉佛、袁世凱	八年
永昌	二〇〇	同	錢筱琴	双虎、三猴三猫	二年
盈豐	二四〇	談家橋	陳福生	盈豐	三年
德豐	二一六	同	同	德豐	二年
久順	一四四	同	姚鏡波		新
晉綸	一四四	同	蔣壽銘		新
怡昌	二四〇	同	王福林	湖山	新
鑫源隆	二八八	同	謝元燦		新
大勝	二〇八	同	徐道生		新
衡康	二〇八	柳營橋	朱梓堂		新

恒隆	二二四	同	王耀祖	禿鷹、大蛇、彗星、孔雀、土星	六年

租界濱南(新閘方面　(六廠　二、一四四釜)

(英)怡和	五〇四	成都路	呂希安	EWF、	一五年以上
(伊)愼興	二〇八	同	潘瑞甫	潘宇、SF、金双燕	八年
二五六	同	曹少臣	一子、二子、三子		四年
緯豐	二三六	同	徐祖純	金双龍、大來、天來馬	二年
協泰	五一二	麥根路	陳浦生	虎邱山、獅子山、豹子山	三年
永裕	四二八	康腦脫路	線仲衡	一把絲、鴿牌	三年

其他方面　(四廠　一、九三二釜)

信昌	五三六	曹家渡	史馨生	廠房	一五年以上
久成	四一六	裡石灰橋	李森甫	生福、金寶塔、汕板	一五年以上
廣源	三五六	同	莫鏡清	莫宇、金桑葉、汕板	六年
寶泰	六二四	同	湯也欽	魯濱漢、銅人、VV	六年

(二)無錫地方　三八廠　一〇、四三〇釜

錦記	四一〇	西倉濱	薛壽費	金双鹿、月兎	一五年以上
永泰	四一六	知足橋	薛潤培	同	一五年以上

乾牲	五五六	通運橋	程炳若	三踏舞、FL、棕樹、九龍、惠山	一五年以上	
裕昌	三三〇	周新鎮	張滋華	CYC、雪山塔、松柏、二泉	一五年以上	
愼昌	二七二	金鈞橋	錢鳳高	同	五年	
振藝誠記	五二〇	清明橋	鐘志彝	金双鷹、花船、金双塔	新	
振藝協記	一五六	同	許受益	同	新	
德興	四八〇	周山濱	鄒季泉	蘭穀神、星花、鸚鵡桃	八年	
瑞昌	二七六	亭子橋	鄭炳泉	班馬、無錫花園	三年	
泰孚	三八四	塔塘橋	王頌魯	日魚、金帽、金獅、金馬、金林	九年	
元豐	三五二	南水仙	黃車儒	鷹球、三羊	三年	
乾豐(一)	二五六	治坊場	王貽孫	三踏舞、翠鳥、紅葉、絲包	九年	
乾豐(二)	二七二	北新橋	同	同	新	
源康	三二〇	黃埠墩	何夢蓮	七星、鹿、黃埠墩	一五年以上	
協大	二七二	亭子橋	張趾鄉	A、蜂皇、水仙花	新	
鼎盛	三二〇	北新橋	蔣鎬鄉	鷹鼎	新	
振豐	二八八	亭子橋	張子振	進行、遊泳	新	
鎮綸	三〇四	陸莊	陸頌詰	福神、陸園、太湖	三年	
泰和潤	二五六	東亭鎮	陶緝敬	九鼎	新	
澄豐	二五六	亭子橋	段樂森	賽馬	三年	
義豐	二四八	小粉橋	陳形甫	進行、太白宮、古錢	五年	

錫山	二四八	廟港橋	蔣賽馨	九鼎、噴水、龍	新
瑞豐	二四〇	迎龍橋	陶緝敬	海象麒麟	新
義生	二六四	惠商橋	狄信之	進行	新
源益	二四四	長豐橋	華調甫	天文臺、三羊	新
竟成	二六二	惠工橋	曹有聲	日鼎	新
緯成	一六〇	洛社	曹少臣	二子、三子	新
盛裕	二六四	南橋	張叔平	一把絲	新
新綸	一九二	玉祁	吳登瀛陳芳泉	金銀紅牛	新
餘盛	二三二	跨塘橋	錢敬之王佑之	双象、龍馬、戰勝、紅双鹿	新
餘綸	二〇四	鐵樹橋	王佑之	同上	新
永泰豐	一六八	梨花庄	吳世榮	忠孝、節義、賽狗	新
萬益	一六八	同	季雲初	日鶴	新
瑞孚	一二〇	羊腰灣	王領魯	金杯、日魚	新
瑞和	一〇四	同	周步雲		新
允大	一〇四	同	袁子彥	三鼠、快船、親々	新
永昌	二七二	張文庵			新
鎰豐	一四〇	光復門外	季雲初		新

(三) 蘇州及鎮江

六廠 一、五四四釜

仁昌公司	三三六	蘇州吳門橋	馬岩青	新
同	二〇〇	同　寬渡橋	同　（牛人、蘇經、織女、稻收耕作、賽船）	新
延昌恒	二五二	同　燈草橋	楊奎候	一五年以上
瑞豐	三〇〇	同　青陽地	日華鐵線	頤和園	三年
（大綸）	二〇八	鎭江金山河	（今期休業）	
（永利）	二四八	同　金鷄嶺	（同　上）	

（四）杭州方面　九廠　二、七五六釜

緯成	三八四	杭州	朱謀元	鐵猫	一二年
虎林	二〇八	同　蔡諒友	虎林	一〇年
天章	二〇〇	同　金濂生	西湖、帆船	九年
慶成	一二〇	同　徐杏生	長壽	三年
大綸	五六〇	塘棲鎭　謝月亭	金銀鶴	一五年以上
崇裕	四九二	同　俞博岩	金双鶴	新
祥綸	一九六	王家漾　吳松岩	五飛鷄	新
慶雲	三七六	蕭山縣城　陸麟孫	神和合	七年
雙山	二二〇	海寧縣硤石　李伯緣	双山、海潮	三年

（五）湖州方面　八廠　一、五七八釜

湖州模範絲廠	三二〇	湖州大通橋	沈子蘭	橋、飛塔、三壤、太湖、帆船	四年
祥綸	二四〇	武林頭　吳松岩	五雀	二年
南潯模範絲廠	二八〇	方丈港　莊驥干	NZ、湖邱、分水墩	新
梅恒裕	一五〇	南潯　梅趾芳	双金鷹鐘、藍鷹球	新
	六〇	菱湖		新
公利	二四〇	新市鎭　季子松	KL、金雀	新
競新	一二〇	双林鎭　潘仲英	双舞女	新
苕溪	一六八	湖州大通橋	驗絲、流行	新

（六）嘉興地方　四廠　五一二釜

裕嘉	一〇四	嘉興　朱謀元	鐵猫	七年
厚生	二〇〇	同　徐少雲	三橋、三塔	三年
五龍	四八	五橋　龍	五龍	二年
海敎	一六〇	同　鈕介人		新

江浙兩省總計　一六〇廠　四〇、三五四釜

註、〈トアルハ同一構內ニアル工場ヲ示ス。〇內ノ英伊佛等トアルハ洋商牌子（名義國藉）ヲ有スルモノ。經營年數ニ新トアルハ新設工場又ハ新規ニ組織ヲ變更セルモノヲ示ス。

2、上海地方玉絲製絲工場一覽表

福綸	四四〇	分水廟	姚雲科	蝙福、車綸	
元綸	一四四	同	吳慎春	鑑洋	
經綸	一九五	天道庵	宋徐可亭	双蘭	
大綸	一五〇	談家橋	吳旭東	旭日	
瑞綸	一六〇	三羊橋	董則安	舞踏	
鴻綸	三四四	柳營橋	宋鑑洋	日	
錦豁	一六〇	八字橋	徐可亭	双蘭、双猫	
			張伯頤		

3、廣東地方製絲工場一覽表　大正十五年度現在

工場名	釜數	揚返窓數	所在地			
釗棧	四三〇	八五	順德縣葛岸	貞泰	五〇〇	八五
均利	五三〇	九〇	南海縣良堡村	仁泰	四二〇	七〇
昌記	四二〇	八〇	同官山	西綸	五〇〇	九五
協昌	四〇〇	七〇	順德縣黃連	北綸	六〇〇	九五
鵬記	四〇〇	七〇	同桂州	北棧	四二〇	七〇
慎成棧	四二〇	七五	南海縣梧村	西棧	四〇〇	八〇
慎成	三五〇	七〇	同上	同德	五〇〇	八五
仁盛	五〇〇	八〇	順德縣大良	同利棧	五七〇	一〇〇
同和	五六〇	一一〇	同官山	同水藤	五五〇	一〇〇
厚成綸	三八〇	七〇	順德縣大良	同官山	三水縣西南	同大良
亨泰	四五〇	七五	同藤中	南海縣官山	南海縣樂從	順德縣陳村
維泰	五〇〇	九〇	同水藤	南海縣陳村	同上	南海縣官山
廣妙	四〇〇	八〇	南海縣杏市	順德縣大良	順德縣石頭	同上
妙棧	四〇〇	八〇	同龍度	南海縣登州	南海縣深村	同上
恕經	四八〇	七五	順德縣沙浩	番禺縣石壁	順德縣龍山	同浩
永和綸	四〇〇	八〇	同大良	順德縣鶯州	南海縣沙崗	同鷄州
繼成昌	四七〇	八〇	同大門	同大羅村	同官山	同譚州
續成昌	四八〇	八〇	同大良	同馬村	同鷺州	同鷺州
妙成昌	五五〇	八五	同幸村	同小布	同龍山	同小布
永和綸棧	四五〇	八〇	同鷺州	同鷄州	同浩河	同浩
協和祥	四五〇	七五	同楊浩	同譚州	順德縣錦昌	順德縣興遠綸
繼棧	五五〇	七五	同桂州	同小布	同上	同興源
天泰	四三〇	八〇	同大標村	同龍山	同上	同利源
永經綸	五〇〇	八〇	同大維村	順德縣河浩	南海縣官山	順德縣大良
妙經元	五〇〇	八〇	同石頭	同上	順德縣大良	同萬隆
永盛綸	四〇〇	七五	同小羅村	同鴻發	順德縣大良	同萬源祥
大和生	四〇〇	六五	同桂州	南海縣官山	南海縣榮經祥	同萬隆
鉅記	五五〇	九五	南海縣石灣	順德縣大良	順德縣大良	同大門
益利	五五〇	八〇	同荷村	同鷺州	同鷺州	同鷺州
祿隆	四〇〇	七〇	順德縣大藝	同萬源祥	同細綸	同幸村
順記	四三〇	七〇	同大良	同細綸	同幸村	同大良
鴻記	六五〇	一二〇	南海縣沙頭	恒昌盛	八〇	八〇

藝新	四五〇	四五〇	八〇	同陳村
廣裕綸	四五〇	四五〇	八五	同鄱陽信興
純昌	四〇〇	四〇〇	七〇	上潦兆誠
廣昌	五〇〇	五〇〇	九五	順德縣大良寶德
華記	五〇〇	五〇〇	八〇	同龍江兆德
公和祥	四五〇	四五〇	七五	同大良裕綸
榮安	四五〇	四五〇	七五	同勞村聯民
均安記	四二〇	四二〇	八〇	同大良盛昌
榮安	三八〇	三八〇	七〇	同大良廣綸生
永昌成	八〇〇	四二〇	七〇	同水藤嘉禾
永安記	四二〇	二五〇	八〇	同大墨仁昌誠
成棧	七〇〇	一七〇	八〇	同容奇頌亭純
廣綸	五〇〇		六五	同上上順記
廣棧	五〇〇	九〇	八〇	南海縣吉利江
永和綸	四五〇	九五	八〇	同鷺州安和興
永興綸	五〇〇	八五	七〇	同大良布小安棧
善綸	五〇〇	九〇	九〇	同大良協綸
貞綸	五二〇	九〇	八〇	同大良祥棧
忠信恒	五〇〇	九〇	七五	同桂州怡盛祥
瑞綸棧	五三〇	九〇	八五	同大墨怡盛和
恒綸盛	五五〇	八五	七五	南海縣音畔恰盛綸
美綸昌	四八〇	八五	七〇	順德縣新隆怡昌綸
協成	四五〇	七五	八〇	同大墨世昌仁

兆綸棧	四五〇	七〇	同上潦	和發成
大經綸	四八〇	八〇	同楊一	盛利
厚昌綸	四五〇	七五	南海縣官山	和昌
水祥綸	五一〇	九〇	順德縣鷺州	
公記	四六〇	八〇	南海縣吉水	廣安
廣維生	四八〇	八〇	順德縣平步	永經綸
怡昌成	四五〇	六五	同岳步	裕記
悅盛	四五〇	七〇	同梧村	時經
泰綸	五五〇	九〇	同水藤	永祥
泰昌	四八〇	八〇	同荷村	同和昌
東綸源	四〇〇	八〇	同勒流	同棧
興記	五二〇	八〇	南海縣奇梧	廣泰和
泰恒	五〇〇	八〇	同水藤	信盛
興隆	四八〇	七五	順德縣上莘	仁華
東成	五〇〇	九〇	同容奇	維盛
協綸	四〇〇	七五	同上	利加
協棧	四〇〇	七〇	同小勞村	經盛
誠記	五〇〇	八〇	同水藤	經棧
信棧	五五〇	九〇	同龍暗	利綸
恒安	四五〇	七〇	同藤涌	維成
兆興祥	五〇〇	七五	南海縣深村	維經綸
和記	四八〇	七五	順德縣荷村	經
廣盛	五〇〇	九〇	同沙崗	永棧

忠信和	五〇〇	九五	順德縣桂州
廣水源	四二〇	八〇	同沙浩
廣義隆	五〇〇	九〇	順德縣大羅村
龍經	五〇〇	一〇〇	同大良
滙經	四三〇	九三	同砂浩
粵經	四五〇	八〇	同容奇
廣經成	四五〇	八〇	同上
龍記	四〇〇	七五	同水藤
志誠	四五〇	七五	同大晚
鳳記	五五〇	九〇	同大良
紹鑄	五一〇	八〇	同水藤
業經	三五〇	八〇	同桂州
冠華綸	七五〇	一二〇	南海縣石灣
冠棧	五五〇	八五	順德縣譚村
廣紙昌	五〇〇	八五	順德縣良浩
廣紙昌棧	四五〇	八五	同石頭
廣發祥	五六〇	九〇	南海縣石灣
兆綸	四八〇	八五	同小沖
廣達祥	五三〇	八〇	同上
頌維亨	七〇〇	一二〇	順德縣容奇
廣純經	五二〇	九五	南海縣石灣
廣純亨棧	五五〇	八〇	順德縣大都
廣純貞棧	五〇〇	九〇	同西浩
廣純貞	五〇〇	七五	同賀豐
廣純綸	五〇〇	八五	南海縣容州
頌維坤	四五〇	八〇	順德縣桂州
華安	四八〇	八〇	同大良
瑞和綸	五〇〇	八五	同葛岸
祥安	五四〇	九〇	南海縣沙頭
祥綸	五二〇	九〇	順德縣水藤
祥盛	五六〇	九〇	同黃蔴沖
信經	五五〇	九〇	同蘇浩
祥利	四九〇	九〇	南海縣古利
釧利	四五〇	七五	順德縣沙滘
水利	四七〇	八〇	同鷺州
順昌	五三〇	八〇	同大良
經綸	五〇〇	八〇	同平步
和豐成	五五〇	九〇	南海縣龍畔
和成	四〇〇	七〇	同羅村
德泰	四八〇	九五	順德縣上滘
釧記	一九五	四八	同葛岸

4、支那各種生絲相場表

年月	廣東絲 最高	廣東絲 最低	上海絲最上品 最高	上海絲最上品 最低	上海絲裾物 最高	上海絲裾物 最低	七里絲 最高	七里絲 最低	柞蠶絲 最高	柞蠶絲 最低
大正十一年四月	一、四二〇	一、三六〇弗	―	―	―	―	―	―	―	―
同 五月	一、六二〇	一、四八〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 六月	一、六三〇	一、五四〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 七月	一、六七〇	一、五九〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 八月	一、六五〇	一、六二〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 九月	一、七一〇	一、六三〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 十月	一、八一〇	一、七四〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 十一月	一、八一〇	一、七八〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 十二月	一、九〇〇	一、七七〇	―	―	―	―	―	―	―	―
大正十二年一月	一、九五〇	一、九二〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 二月	一、八七〇	一、七七〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 三月	一、九二〇	一、八七〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 四月	二、一一〇	一、八七〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 五月	二、一一〇	二、〇五〇	―	―	―	―	―	―	―	―
同 六月	二、〇〇〇	一、七〇〇	―	―	―	―	―	―	―	―

同	七月	一、七七〇	一、六六〇弗	一、七五〇兩	一、六八〇	一、四七五	一、四〇〇	一、二三〇	一、〇七〇	八一〇	七八〇
同	八月	一、八九〇	一、七二〇	一、六六〇	一、六五〇	一、四〇〇	一、三五〇	一、〇七〇	一、〇七〇	八一〇	八〇〇
同	九月	二、四六〇	一、八九〇	二、〇〇〇	一、七〇〇	一、四一〇	一、三三〇	一、〇九〇	一、〇七〇	八五〇	八〇〇
同	十月	二、二九〇	二、一三〇	一、九五〇	一、八五〇	一、七〇〇	一、三〇〇	一、〇九〇	一、〇七〇	八六〇	八四〇
同	十一月	二、〇九〇	一、九四〇	一、八五〇	一、七五〇	一、六八〇	一、二八〇	一、〇八〇	一、〇六〇	八〇〇	七八〇
同	十二月	一、九六〇	一、八六〇	一、七五〇	一、六〇〇	一、四五〇	一、四〇〇	一、〇七〇	一、〇五〇	七六〇	七六〇
大正十三年一月		一、九二〇	一、八〇〇	一、六〇〇	一、五五〇	一、四〇〇	一、三五〇	一、〇八〇	一、〇四〇	七三五	七三五
同	二月	一、八〇〇	一、七二〇	一、五三〇	一、四五〇	一、三八〇	一、二八〇	一、〇三〇	一、〇四〇	八〇〇	七八〇
同	三月	一、六六〇	一、三八〇	一、四五〇	一、三八〇	一、二六〇	一、一九〇	一、〇四〇	一、〇四〇	七五〇	七〇〇
同	四月	一、四〇〇	一、三七〇	一、三五〇	一、二五〇	一、一八〇	一、〇五〇	一、〇四〇	一、〇四〇	六五〇	五一五・五
同	五月	一、三七〇	一、二九〇	一、二五〇	一、二〇〇	一、一二〇	一、〇四〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	五八〇	五三七・五
同	六月	一、二二〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇五〇	一、〇〇〇	九二〇	六〇二・五	四九〇
同	七月	一、四一〇	一、二二〇	一、二四〇	一、二〇〇	一、〇五〇	一、〇三〇	九〇〇	九〇〇	六五〇	六二〇
同	八月	一、五二〇	一、四六〇	一、二五〇	一、一一〇	一、〇七〇	一、〇七〇	九〇七・五	九四〇	六五〇	六五〇
同	九月	一、四九〇	一、三四〇	一、二三〇	一、一四〇	一、〇七〇	一、〇三〇	九八〇	九五〇	六〇〇	五〇〇
同	十月	一、三六〇	一、二九〇	一、一六〇	一、〇七〇	一、〇四〇	九五〇	九四〇	九四〇	五〇〇	四八五
同	十一月	一、四二〇	一、二八〇	一、一二〇	一、〇四〇	九八〇	九四〇	九二〇	五六〇	五〇〇	五〇〇
同	十二月	一、三八〇	一、三〇〇	一、一二〇	一、〇八〇	一、〇四〇	九三〇	九〇〇	五六〇	五三〇	五三〇
大正十四年一月		—	—	—	一、一二〇	一、〇七〇	一、〇二〇	一、〇六〇	一、〇七〇	八八五	五五〇
同	二月	—	—	一、二四〇	一、一二〇	一、〇六〇	一、〇四〇	一、〇四〇	一、〇四〇	八九〇	八六五	五三〇	五一五
同	三月	—	—	一、二四〇	一、一二〇	一、〇八〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	八六〇	八四〇	五三〇	五〇〇
同	四月	—	—	一、二〇〇	一、一〇〇	一、〇四五	一、〇四〇	一、〇四〇	一、〇四〇	八三〇	七八五	五〇〇	四八五
同	五月	—	—	一、二〇〇	一、一〇〇	一、〇七〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	七八五	七八〇	四九〇	四八五
同	六月	—	—	一、一七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇五五	一、〇五〇	一、〇五〇	七九五	七九五	五一五	五一五
同	七月	—	—	一、一九〇	一、〇七〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇七〇	一、〇七〇	八〇〇	七九〇	五八〇	五五五
同	八月	—	—	一、一〇〇	一、〇二〇	一、〇六〇	一、〇二〇	一、〇六〇	一、〇六〇	七八五	七七二・五	五〇〇	四八五
同	九月	—	—	一、二四〇	一、一四〇	一、〇八〇	一、〇一七	一、〇四〇	一、〇四〇	七八〇	七七五	五〇〇	四八〇
同	十月	—	—	一、二五五	一、一二〇	一、〇八〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七九〇	七九〇	四九〇	四八五
同	十一月	一、二六五	一、一八〇	一、二五五	一、一二〇	一、〇七〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七九〇	七七〇	四七〇	四四二・五
同	十二月	一、二七五	一、一五〇	一、二六五	一、一二〇	一、〇七〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七七〇	七五〇	四七〇	四三五
大正十五年一月		一、二七五	一、〇〇〇	一、二二〇	一、一二〇	一、〇七〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七五〇	七四〇	四六〇	四四〇
同	二月	一、二八〇	一、一一〇	一、二二〇	一、一二〇	一、〇七〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七三五	七三〇	四五〇	四五五
同	三月	一、〇九〇	九九〇	一、二〇〇	一、一一〇	一、〇七〇	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七八〇	七六〇	四八〇	四五〇
同	四月	九八〇	九四〇	一、二一〇	一、一八〇	一、〇八〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	七六〇	七四二・五	四六五	四六〇
同	五月	一、〇四〇	九七五	一、一八〇	一、一六〇	一、〇四五	一、〇一五	一、〇一〇	一、〇一〇	七四二・五	七〇〇	四六五	四八〇
同	六月	一、二五〇	一、〇三〇	一、一八〇	一、一八〇	一、〇六五	一、〇〇五	一、〇〇五	一、〇〇五	七七〇	七六〇	五一〇	四八〇
同	七月	一、二六〇	一、〇〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	一、〇五五	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	七四七・五	七六〇	五六〇	五五〇
同	八月	一、二六〇	一、一一〇	一、二〇〇	一、一〇〇	一、〇五五	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	七五〇	七四〇	五五〇	五四〇

同	九月	—	—	一、二七二・五	一、二一〇	一、一一〇	一、〇九〇	七七〇	七六〇	五八〇	五四五
同	十月	一、二四〇	一、二〇〇	一、四四〇	一、二五〇	一、二八〇	一、一八〇	八八〇	七八〇	六〇〇	五九〇
同	十一月	一、二四〇	一、二一〇	一、四五〇	一、二六〇	一、二四〇	一、一〇〇	八九〇	八八〇	六三〇	六二〇
同	十二月	—	—	一、四二〇	一、二六〇	一、二五〇	一、一〇〇	九一〇	九〇〇	六五五	六四〇
昭和二年一月		—	—	一、三七〇	一、三五〇	一、一三〇	一、一〇〇	九二〇	九一〇	六五五	六一〇
同	二月	—	—	一、三三〇	一、三三〇	一、一一〇	一、一〇	九五〇	九三〇	六一五	六一〇
同	三月	—	—	一、四〇〇	一、三五〇	一、一八〇	一、一五〇	九七〇	九四〇	六三五	六二〇
同	四月	—	—	一、四五〇	一、四〇〇	一、一八〇	一、一二〇	九八〇	九五〇	六二〇	六〇〇
同	五月	—	—	一、四九〇	一、三八〇	一、一二〇	一、一〇	九五〇	九〇〇	六〇〇	六〇〇
同	六月	—	—	一、三六〇	一、三三〇	一、一〇六〇	一、一〇〇	八五〇	七九五	六〇〇	六〇〇
同	七月	—	—	一、三〇〇	一、二九〇	一、一〇五〇	一、〇一〇	七九五	七八五	六〇〇	五五〇
同	八月	—	—	一、二九五	一、二六〇	一、〇四〇	一、〇一〇	七八五	七六五	五五〇	五三五
同	九月	—	—	一、二八五	一、二一〇	一、〇六〇	一、〇三〇	七八〇	七六五	五二〇	五一〇
同	十月	—	—	一、二九〇	一、二八〇	一、〇一〇	一、〇一〇	七八〇	七八〇	五一〇	四九二・五
同	十一月	—	—	一、二七〇	一、二一〇	一、〇〇〇	九〇〇	七五〇	七四〇	四九〇	四四〇
同	十二月	—	—	一、二一〇	一、一八〇	八八〇	八六〇	七五〇	七四〇	四六〇	四二〇
昭和三年一月		—	—	一、二四〇	一、二一〇	九〇〇	九〇〇	七四〇	七四〇	四六〇	四六〇
同	二月	—	—	一、二九〇	一、二五〇	九三〇	八七五	七七五	七六五	四四〇	四三五
同	三月	—	—	一、三〇〇	一、三〇〇	九二〇	九二〇	七六〇	七四〇	四三五	四二〇

5、支那外國貿易額ト蠶絲類輸出價額

曆年度單位（海關兩）

同	四月	—	—	一、三一〇	一、三〇〇	九三〇	九一〇	七四〇	七四〇	四一〇	四〇〇
同	五月	—	—	一、三一〇	一、三〇〇	九五〇	九一〇	七六〇	七三五	四一〇	三八〇
同	六月	—	—	一、三〇〇	一、三〇〇	九四〇	九一〇	七六〇	七五〇	三七五	三七〇
同	七月	—	—	一、二八〇	一、二五〇	九二〇	八九〇	七五〇	七四〇	三八〇	三六〇
大正三年		兩	兩									各年海關兩一兩ニ對スル平均円價	円
同	四年	九二五、四六八、〇一一	三五六、二三六、六二九	五一、四六一、八三九	四、〇九九、一〇四	七、三五八、三〇三	六二、一八四	六、四三九、七六四	九、三三八、一五二	七八、四〇七、四七六	三三、二九三、〇六三	一・三一	一・二五
同	五年	八七二、三三六、八八三	四一八、八六一、一六四	六二、六三九、五六〇	五、二八五、〇九六	二一、七七九、九九三	九〇、八四二、二五二	七二、九七七、〇六三	五、二八五、〇九六	二〇、九七五、二八八	一・五四	一・五四
同	六年	九九八、二〇四、三六一	四八一、七九七、三六六	七二、九七七、〇六三	六、〇二二、九九九	九、〇三七、九四九	八八、一八五、五五二	一七、九八七、四四五	一・九八	一・九八	一・九八	一・九八	一・九八
同	七年	一、〇二二、四五〇、四〇四	四六二、九三一、六三〇	一三、一三五、六三四	八、九一九、二一四	二二、九五二、六三五	八七七、六三四、五六一	一九、五四五、九二八	二・三七	二・三七	二・三七	二・三七	二・三七
同	八年	一、〇四〇、七七六、一一三	四八五、八八三、〇三一	六五、七六二、七一二	一〇、五一六、七〇九	一二、四〇四、〇二〇	一一三、九五九、九〇八	二四、一一四、〇四五	二・七二	二・七二	二・七二	二・七二	二・七二
同	九年	一、二七七、八〇七、〇九二	六三〇、八〇九、四一一	九二、〇三四、一七九	一〇、三五、一六、七〇九	八、八四三、九七六	七六、九九八、三六〇	二五、四六〇、〇一四	二・三八	二・三八	二・三八	二・三八	二・三八
同	十年	一、三〇三、八八一、五三〇	五四一、六三一、一三〇〇	六一、〇八〇、六〇九	七、〇七三、七七五	九、一四四、一四三	二三、〇二七、一二七	三一、四三一、五〇五	一・五七	一・五七	一・五七	一・五七	一・五七
同	十一年	一、五〇七、三七一、九七六	六〇一、二五五、五三七	九三、三八四、一〇七	八、四八八、八七七	一一、二三九、九九三	一四八、四五七、九四二	二六、二八一、三〇一	一・七二	一・七二	一・七二	一・七二	一・七二
同	十二年	一、五九九、九四一、五八三	六五四、八九一、九三三	一三三、〇三一、一七三	一五、四三四、八六九	一五、四五五、五七五	二〇、一四五、五一四	二四、八七九、八九一	一・六二	一・六二	一・六二	一・六二	一・六二
同	十三年	一、六七六、三三〇、三〇三	七五二、九一七、四一六	一二八、七七〇、〇七〇	一四、三八三、三三九	一二二、四四二、六〇九	三三、三〇〇、八七三	一・九五	一・九五	一・九五	一・九五	一・九五	一・九五
同	十三年	一、七八九、九九五、一四五	七七一、七八四、四六八	九七〇、〇六四、一九五	一〇、九九五、〇七三	一四、三八三、三三九							

同十四年	一、七二四、二二七、八八一	七七六、三五二、九三七	—	—	—	—	—	—	二・〇四
同十五年	一、九八八、五二六、〇〇四	八六四、二九四、七七一	一、三〇、七八七、七九二	一四、〇〇八、五六六	一四、九八、四〇八	一五九、〇〇四、七六六	三〇、八五七、六八二	一・五八
昭和二年	一、九三一、五五一、二八六	九一八、六一九、六六二	一一、七〇〇、三七六	一一、四五六、四三八	一四〇、一六二、一七〇	二五、一七〇、九三四	一・四四

6、支那蠶絲類ト主要輸出品ノ比較

（單位兩）

品目	昭和二年度（一九二七）輸出價額	昭和二年度（一九二七）百分比	大正一三年（一九二四）輸出價額	大正一三年（一九二四）百分比	大正一一年度（一九二二）輸出價額	大正一一年度（一九二二）百分比	大正九年度（一九二〇）輸出價額	大正九年度（一九二〇）百分比
豆類及其製品	一八六、三九八、八〇一	二〇・二七	一四七、九三〇、二六七	一九・一七	一〇七、一七二、五三〇	一六・三七	八四、九三〇、四五七	一五・六六
蠶絲類	一四〇、一六二、一七〇	一五・二六	一三二、四四二、六〇七	一五・八六	一四八、四五七、四九二	二二・六七	七六、九九八、三六〇	一四・二二
棉花	四七、三〇六、六九九	五・二五	四〇、四二〇、四一四	五・二四	二二、八八一、四三四	三・四七	九、三四、五一二	一・七〇
雜穀	三九、一〇四、二四四	四・二六	一八、四八〇、九三七	二・三九	一三、五三、二五九	二・〇七	三六、六六、三九七	六・七五
皮革類	三五、九七〇、六八四	三・九二	二一、五九、八四七	二・七九	二〇、三一一、一八七	三・一〇	二一、八二、九六八	四・〇三
生卵及其製品	三三、五六、三〇三	三・六五	二六、五五一、四四一	三・四四	二五、九五五、〇八二	三・九六	一一、九二八、一四三	二・二一
茶	三一、六一六、九四九	三・四四	二一、一二七、一三一	二・七四	一六、九六六、〇七五	二・五九	八、八七三、一三五	一・六四
石炭	二九、四〇八、八九三	三・二〇	二〇、五三九、四三〇	二・六六	一四、九〇〇、六三	二・二八	—	—
落花生及製品	二五、六一〇、五四九	二・七九	三〇、二四四、四七四	三・九二	—	—	—	—
鑛物類	二五、三六六、〇八七	二・七六	十一八、〇六八、〇六〇	二・三四	—	—	—	—
絹織物類	二五、一七〇、九三四	二・七四	二三、六〇〇、八七三	二・八九	二三、六〇二、二八四	三・六一	二四、三二七、四七七	四・四九
人毛鳥毛及羊毛	二三、三四四、七一九	二・五四	十一四、〇四〇、六七二	一・八三	一二、八九二、五三四	一・九七	—	—
桐油	二、九七〇、九四七	二・三九	一七、七一四、七一三	二・三〇	一〇、八三、一三〇	一・六六	—	—
綿絲	一九、七六八、一九五	二・一五	七、五一三、二二六	〇・九〇	—	—	—	—
煙草	一七、七七〇、七五四	一・九三	一五、三四二、一四四六	一・九九	一〇、一七〇、九三三	一・五五	—	—
綿布	一七、六〇〇、一四八	一・九二	二三、八六九、一九七	一・六七	—	—	—	—
果實及精菓	一七、三三六、九九三	一・八九	—	—	—	—	—	—
木材	一四、三四五、四六〇	一・五六	一六、三七六、一三一	一・七三	一三、〇六二、五二六	一・九九	—	—
豚毛	九、二九〇、〇〇九	一・〇一	八、七四三、二九二	一・一三	八、三〇二、一六四	一・二七	—	—
芝蔴	—	—	—	—	七、四五一、八七四	一・一四	一〇、八三〇、〇七〇	二・〇〇
其他	一五七、七〇八、二二五	一七・一七	一九二、五七〇、二二〇	二四・九五	一九八、三五一、一四三	三〇・二八	二五六、〇七七、七八一	四七・二八
合計	九一八、六二九、六六二	—	七七一、七八四、四六八	—	六五四、八九一、九三三	—	五四一、六三一、三〇〇	—

＋生鐵及錫鑛兩品ノ價額　＋羊毛ノミノ價額

7、最近拾年各種生絲輸出額

暦年度　單位（擔）

年次	白繭絲 座繰絲	白繭絲 再繰絲	白繭絲 器械絲	黃繭絲 座繰絲	黃繭絲 再繰絲	黃繭絲 器械絲	柞蠶絲 器械絲	柞蠶絲 座繰絲
大正七年	四、一五九	一四、四五四	六〇、九九四	一三、三六一	一、二〇五	三、一九三	二三、三三九	五、二六一
同八年	四、四六八	一六、七二九	八三、四七〇	一八、六六九	一、六〇二	六、五六八	二七、九九〇	五、六九一
同九年	三、四八二	八、三四二	五二、七五六	一五、四一〇	一、二五三	二、二七	二六、八七四	四、九一一

同十年	二、二四八	九、二三〇	七九、二五九	一三、九六七	一、〇五一	八、二三五	三二、四一一	五、六七三
同十一年	二、五九三	二二、七一一	八四、一二〇	一四、四二三	七五二	五、一三八	二〇、七九二	二、九四九
同十二年	三、二二	二二、六七八	七〇、二九四	二二、六二三	一、三五五	七、〇七六	二九、三五七	一、八三九
同十三年	二、九二八	九、〇九〇	七三、〇八六	一三、二七五	一、四二六	七、九六一	二〇、〇六四	二、五〇七
同十四年	二、八三六	二二、九〇八	九〇、四九六	二一、四四五	一、三三三	二二、七九四	三三、〇三四	一、五八〇
同十五年	二、六四一	二一、三六一	九七、二三九	二二、五三二	一、七二三	一〇、一四〇	三〇、二一四	八八二
昭和二年	五、二四三＋	一〇、七三七	九一、九三五	一四、二三六	六五一	九、九五四	二四、六九二	二三一

＋染色絲六十三擔ヲ含ム

8、最近拾年各種副蠶品輸出額

曆年度　單位(擔)

年次	玉絲	眞綿	蘭 家蠶繭	蘭 野蠶繭	蘭 屑繭	毛羽屑	絲	絹紡絲
大正七年	—	—	三三、七四〇	—	四三、一四五	—	二二七、八九〇	八二八
同八年	—	—	三四、七二六	—	三〇、四〇〇	—	二一四、五八六	七〇九
同九年	—	—	一五、九二五	—	二四、五四八	—	八三、六一八	一、三九三
同十年	—	—	三三、一九二	—	一八、六六六	—	七〇、五七八	二、一二九
同十一年	—	—	三三、〇七七	—	三七、六七七	—	九〇、八〇三	二、四九七
同十二年	—	—	一九、三二六	—	五八、六二五	—	一二四、五二六	三、五九三
同十三年	九二六	七、七二七	二〇、八二六	一五九	六五、八五七	五、九六四	一四七、六六四	二、七八五

年次	白座繰絲	白再繰絲	白器械絲	黃座繰絲	黃再繰絲	黃器械絲	玉絲	合計
同十四年	一、六〇二	六、一五二	二三、一七〇	四、七一三	四六、九九三	三、三六七	一四六、四四〇	二、七四二
同十五年	一、九三一	四五〇	二一、〇五五	三三	四三、六九一	四、八二〇	一四二、八〇〇	四、〇六九
昭和二年	二、四二二	一〇五	一四、八八五	一一	四〇、六九六	七、九九四	一〇〇、七二六	六、〇二四

(一)家蠶繭ハ主トシテ玉繭ナリ、(二)絹紡絲ニハ柞蠶絹紡絲及「ノイルヤーン」ヲ含ム、

9、昭和二年支那生絲開港場別輸出高表

曆年度　單位(擔)

開港場	白座繰絲	白再繰絲	白器械絲	黃座繰絲	黃再繰絲	黃器械絲	玉絲	合計
大連	—	—	六五	—	—	—	—	六五
奏皇島	—	—	三	—	—	五	—	八
煙臺	—	—	一六	—	—	—	—	一六
膠州	—	—	六九九	—	九七	—	—	三、九四七
重慶	二三八	一	五四	二、四九三	九九八	六、七七五	八	四、七四九
萬縣	一九	—	二三八	六八七	—	—	—	一〇、五六七
沙市	三〇	—	—	—	—	二八七	—	一、三三一
岳州	—	—	—	一、七八四	—	—	—	一、八一四
漢口	二八七	二	四七	—	七	—	—	七
蕪湖	一、九一〇	—	—	七、七五七	—	—	—	八、四二一
南京	三九	二五	一〇	—	一	四二七	—	一、九一〇
						—	—	七四

鎭江	六一	—	—	—	—	—	—	六一
上海	三一三	三五	四一一六一	一三	二	五九一	二、三九八	四四、八一三
蘇州	四三	二、四三五	七九一	—	—	—	三五	二三、三〇三
杭州	二、〇一五	四四七	一、二二三	—	—	—	三三	三、六一八
寧波	四五	—	九二	—	—	—	—	一三七
廣東	六八七	—	四六、七九五	九三	—	—	—	四七、五七五
九龍	七九	—	—	—	—	—	—	七九
江門	三八二	—	—	—	—	—	—	三八二
三水	—	—	—	二	—	—	—	二
北海	—	—	—	二	—	—	—	二
蒙自	—	—	—	四	—	—	—	四
思茅	—	—	—	—	三三八	—	—	三三八
騰越	—	—	—	—	三、四四七	—	—	三、四四七
計	六、〇五三	二三、二四八	九一、〇〇九一	一六、七二三	一、〇〇六	二三、〇二七	二、四七四	一四一、六二二

10、昭和二年柞蠶及副蠶品開港場別輸出高表

	柞蠶座繰絲	柞蠶器械絲	絹絲紡績絲	柞蠶繭	家蠶繭	繭毛羽	屑繭	屑絲
龍井	—	—	—	—	二	—	—	—
村	—	—	—	—	—	—	—	—
安東	八四	一七、二四	一、〇二四	五、三四八	—	—	二、七二四	一〇、九二一
大連	一九〇	四、五一六	—	一四、九九九	—	三、八七二	四、六四一	一、四八一
牛莊	三三〇	一	—	一	—	四	—	—
奏皇島	—	—	—	—	—	—	—	—
天津	—	—	—	—	—	—	—	八〇
龍口	二	—	—	—	—	—	—	—
煙臺	一〇九	三、二八五	—	一六	—	—	—	一、〇〇八
膠州	—	一	—	—	—	三	—	三
重慶	一三八	—	—	—	—	—	一、四五五	二三二
萬縣	—	—	—	—	—	三七	—	七、三二
宜昌	—	—	—	—	—	—	四、一六一	一、七四五
沙市	—	—	—	—	—	—	三三	二三五
岳州	—	—	—	—	—	—	—	一〇五
漢口	—	—	—	—	—	—	—	—
九江	—	—	—	—	—	—	—	四二
蕪湖	—	—	—	—	—	—	—	—
南京	—	—	—	—	—	—	—	—
鎭江	—	—	—	—	—	—	—	—
上海	三	九	四、九六三	—	四、三五五	七、五八八	一四五	五九一
蘇州	—	—	—	—	—	—	—	—

杭州	一	一	一	一
寧波	一	一	一	二六四
温州	一	一	一	一、一三六
福州	一	一	一	一
厦門	一	一	一	一
廣東	一	一	一	二〇五
九龍	二四〇	一	一	一〇
梧州	一	一	一	六一三
瓊州	一六	一	一	一
北海	三六	一	一	一
騰越	一	一	一	一
計	九一七	二五、〇二六	二〇、四〇四	二三、九七六

杭州	五四	一六九	二、四六一	七、八一七
寧波	一	一六八	一	四三、五一三
温州	七	九七	一	一〇五、八五三
福州	九七	一	一	一
厦門	六	二九、四二三	一	一
廣東	一	五、七一〇	一	一
九龍	一	一	一	一
梧州	一	四八	一	一
瓊州	一	一	一	一
北海	一	一	一	一
騰越	九	一	一	一
計	六、三六	二五、〇二六	二〇、四〇四	二三、九七六

11. 支那蠶絲大觀索引

	頁
省別繭生絲產額	一六
世界生絲產額と支那	一七
支那絲輸出の趨勢	一八
歐米向輸出の比較	二一
種類別歐米向比較	二二
上海絲輸出の趨勢	四一
商館別輸出高(上海)	四二六
同(廣東)	一〇〇一
同(廣東副蠶品)	一〇二〇
生絲輸出高(山東省)	五九九
同(四川省)	七三三
四川生絲產額	八六七
縣別產繭額(山東省)	六六九
同(廣東省)	一〇三六
上海乾繭入荷高	二二七
同副蠶品出廻高	四五六
繭の出廻高(中支)	一六四
同(山東省)	六九〇
同(湖北省)	五四七
同(四川省)	七九二
銀塊の相場	一〇四九

	頁
貨幣及度量衡(中支)	一九二—二二七
同(湖北省)	五八一
同(山東省)	六四二
同(四川省)	八四五
桑の生產費	二八
同(中支)	八二
同(山東省)	六一〇
同(廣東省)	九〇九
桑葉の相場(中支)	八七
同(山東省)	六一四
同(四川省)	七五三
蠶種の生產費(浙江省)	一一六
同(廣東省)	九二五
繭の生產費	三〇
同(中支)	一六〇
同(山東省)	六二六
同(四川省)	七六八
同(廣東省)	九二七
器械絲の生產費	三一
同(上海地方)	三四四
同(湖北省)	五七三

	頁
同(山東省)	六八二
同(四川省)	八四二
同(廣東省)	九八七
足踏絲生產費(山東)	六八四
同(四川省)	八三七
座繰絲生產費(七里絲)	三八五
同(海寧細絲)	三八四
同(山東省)	六八五
七里絲の再繰費	三九〇
繭の相場(中支)	二二二—二二五
同(湖北省)	五七七
同(山東省)	六四七
同(四川省)	七九四
同(廣東省)	九六三
繭買入諸掛(中支)	二一七
同(湖北省)	五五四
同(山東省)	六五六
同(四川省)	七九五
生絲輸出諸掛(中支)	三五三—四五四
同(湖北省)	五八〇
同(四川省)	八四〇

同（廣東省）　九八八
蠶兒飼育表（中支）　一三九
同（山東省）　六二三
同（四川省）　七六一
同（廣東省）　九三三
蠶具一覽表（中支）　一三七
同（廣東省）　九三〇
繭の品質檢査（中支）　二六一
同（湖北省）　五四五
同（廣東省）　九六一
繰絲成績（中支）　二七九—二七五
同（四川省）　三四六
同（湖北省）　八〇五
同（廣東省）　五六五
生絲の種類（上海市場）　九五八
四二六
生絲の格付（上海）　四三五
同（廣東市場）　一〇〇八
生絲の品質（上海）　四二八—四三一
同（四川絲）　八二一
同（廣東絲）　一〇三五
上海生絲市場取引規約　四三八
同（廣東市場）　一〇〇九
製絲釜數の趨勢（中支）　二三五
同（廣東）　九三〇
製絲工場一覽（湖北省）　五五六
同（山東省）　六三〇
同（四川省）　七七三
工場建設見積（上海）　二四三
同（廣東）　九四八
水質の分析（上海）　二四九
同（廣東）　九四九
河泥（肥料）の分析　九〇五
繭行一覽（中支）　一七一
同（湖北省）　五四七
廣東市場問屋一覽　一〇〇四
同（副蠶品問屋）　一〇一九
同繭市一覽　九六七
同絲市一覽　九九六
製絲工場の職制（上海）　二五二
同（廣東）　九五〇
中支生絲取引經路圖　六一
同（副蠶品）　四七四
地方別業態の特徴　七
中支蠶業の地方色　五八
日支絲價の指數　一〇四六
氣象表（四川省）　七四一
同（廣東省）　九四〇

昭和四年四月一日印刷
昭和四年四月五日發行

支那蠶絲業大觀

定價金八圓

著作者　蠶絲業同業組合央中會
東京西巢鴨町宮仲二六四九

發行者　岡田榮太郎
東京市神田區表神保町一〇

印刷者　井波康三郎
東京市神田區表神保町一〇

印刷所　同興舍

發行所　岡田日榮堂
東京、西巢鴨町宮仲二六四九
電話大塚一五一七番
振替東京六二九五八番

不許複製

53
16

588
168